那支

仙人列傳

精聚堂發行

334
45

住友彬氏寄贈書

國立國會
41.1.29
圖書館藏書

685556

序

支那神仙の說は道士方士の徒の唱道にかゝれるものにして漢以後に到つて、漸く其流行を見るに到りしかど、其起源は早く已に先秦時代にありて存し、老莊二子に於て已に其萠芽とも謂ふべき思想の存在を認む。而して此神仙說は一面支那の神話ともいふべき性質を具有して無數の迷信を混入するに拘はらず其恬淡淸虛を喜ぶ說は、早くも國民の深き信仰を得て其文明に影響する所極めて多かりき。即ち儒敎が國民の道德思想の上に深甚なる効果を齎したると同じく道敎は國民の信仰及び日常生活の上に多大の感化を及ぼしたるなり。その無爲を說きその淸虛を喜ぶの風あるが爲に自から俗寰を脫し、眼を自然界に向はしめ、儒敎が人をして專ら世間

的交際の間に沒頭せしむるに反して是れは人をして益〻自然其物と親しむの性情を養はしめ、其結果清楚恬淡にして神韻に富む自然派の一派を生み、簡素にして清虚を喜ぶの筆致は永く東洋の美術界を飾る一特質たるに到らしめぬ。然して其影響は獨り繪畫美術の上に止らず、更に文學の上に於ても亦同樣なる感化を及ぼしたるは此處に精説する迄も無し。斯くて儒教と道教とは互に經となり緯となりて共に彼の廣大なる支那文明を形成したる二大要素なれども、其美術文學の方面に於ては別けて道教の影響の深甚にして且つ多大なるを見る。然れば神仙の研究は單に支那神話の研究に止らず更に其文學美術の精神を闡明する所以の一にして、其研究の必要にして且つ切實なるは今更贅説するを須たず。是れ吾人が文學士東海林辰三郎氏著の支那神仙傳を以て東洋文

明の一方面を了解するに於て實に有益にして且つ切實なる著述と思惟する所以なり。是れを以て之が序となす。

明治四十三年十一月二十五日

文學博士　井上哲次郎識

凡例

一、支那の仙人の傳記は百家の書に散見し居るも、之れを一纒にして一冊の書に成せしもの其數多からず。最も古きは漢の劉向の列仙傳にして、錄する所總て七十一人。次は晉の葛洪の神仙傳にして錄する所總て九十二人。次は唐の沈汾の續神仙傳、明の王世貞の列仙全傳、明の張文介の廣列仙傳、及び清の王逸章の歷代仙史等僅々三四種に過ぎず。中にて最も廣く世に愛讀せられたるものは神仙傳と列仙全傳の二書とす。

一、仙人は一種の空想的人物なり。假令實際生存したりし人間と雖も、支那國民は自己の空想よりなれる衣服と假面とを以て彼をつゝみ、全く自己の崇拜物たる神仙と同化し了せずんば止まず。故に仙人は或意味に於て支那國民の神話中の人物、傳說中の人間なり。其荒誕にして怪奇なる閱歷は其物其儘にして其處に彼等が神話的傳說的特質の著しきを見る。而して此特質が最もよく現はれ居るものは蓋し神仙傳と列仙全傳の二書なり。是れ古來此二書の世に愛讀せられたる所以にして又余が本書を編むに當り、專ら二書によ

凡例

りて筆を執りたる理由なりとす。

一、王世貞の列仙全傳は前後九卷に分れ、錄する所上は黃帝より下は明代の諸仙に到り、總て四百九十七人。蓋し劉向、葛洪の二書を本として之れに群書載する所の者を採錄したるもの也。余初め本書を編むに當り、之れを上下二卷に分ちて列仙全傳に載する所の者を悉く集錄し、更に其漏れたる人々は之れを葛洪の書より採る意なりしも、中途にして都合上俄かに其計畫を變じ先づ此處に其一部のみを發表するとしぬ。然して他の漏れたるものは他日更に續篇として世に公にするとあるべし。

一、本書採錄する所總て二百十五人、其名の世に聞えたる者は大概網羅して餘さず、なほ有名ならぬ者にても、神話的傳說的人物として稍々觀るに足ると思ふ者は勉めて之れを集錄しぬ。是れ本書の目的は其閱歷以外に主として仙人の神話的傳說的特性を發揮せんとするにありたればも。然れば余は筆を執るに當り、飽くまで自己の想像的作意の混入を避け、忠實に原文の面影を傳ふるに勉めたり。尤も他に二三の書を參酌して取捨出入したる所もなきにあらねど、要するに本書は全く前二書の飜譯なりといふも敢て妨げず。讀者願くは意を此處に留めて仔細に讀過あらんとを乞ふ。

一、本書の卷中に挿入する所の繪は總て皆列仙全傳中に載する所のものを亞鉛版にて撮影縮寫したるものなれば、原圖の眞を傳ふるに於て又遺憾なかるべし。而して此繪の筆者は果して何人なりや明かならず、然れど今此繪を觀るに其紛本とする所恐らくは主として王圻の三才圖會に存するとならんと思ふ。

一、列傳の順序は之れを年代によつて排列し、年代の不明なるものは總て皆卷尾に錄せり。然れど其年代の順序とても極めて大體の區別に從へり。如何となれば精細に歷史的に之れを別つことは仙人の性質上殆んど不可能と信すれば也。

明治四十三年十二月

著者識す

支那仙人列傳

目次

老子(給入)……一
木公……六
西王母(給入)……八
上元夫人……一〇
赤松子(給入)……一一
姮娥……一二
吳剛……一二
廣成子……一三
黃帝(給入)……一三
容成公(給入)……一七
何侯……一八

正誤

訛	正
頁數(場所)	
三二五乃至三二八	
三七六乃至三七七	
三八四(標題)	
三九三乃至三九四(柱)	
四〇七乃至四一〇(柱)	
呂嚴△	呂嚴●
劉晴△	劉晴●
陣搏△	陳搏●
湘馬△	馬湘●
朱有△	林靈素●

目次

鐵拐先生(給入)……一九
彭祖(給入)……二〇
張天翁……二二
王中倫……二四
劉越……二五
匡嶽……二七
彭宗……二九
王子喬(給入)……三一
沈義……三二
琴高……三五
負局先生……三六
莊子(給入)……三七
尹喜(給入)……三九
玉子(給入)……四八
太陽子……五一

目次

太陰女……五二
太玄女……五四
墨子……五五
控鶴仙人……五七
涉正(給入)……五八
司馬季主……五九
朱璜……六〇
王次中……六一
徐福……六三
安期生(給入)……六六
茅盈……六六
劉安(給入)……六七
綏仙姑……七〇
蘇耽……七四
東方朔(給入)……七六

目次

衛叔卿……八二
王興……八四
黃安（給入）……八五
郭瓊……八六
伯中（山附四河の少女）……八七
赤光侯……八九
焦先……九〇
王褒……九二
王仲都……九四
欒巴……九五
范幼冲……九六
蘇林……九七
劉根……九七
葛子訓……一〇一
魏伯陽（給入）……一〇三
……一〇四

目次

王老……一〇七
張道陵（給入）……一〇八
劉晨（給入）……一二四
劉憑……一二六
孔安國……一三一
成仙公……一三三
于子吉……一四六
董奉……一四七
介象……一五五
李意期……一五九
封衛……一六一
鐘離權（給入）……一六三
李阿……一六六
左慈……一六七

目次

呂恭……一七一
黃初平（給入）……一七三
蘭公……一七四
費長房（給入）……一七六
嚴青……一八一
藍采和……一八二
沈建域……一八四
著質……一八四
王遂球……一八五
葛玄（給入）……一八六
曹仙嫗……一八八
鮑靚……一九六
孫登……一九九
王烈……二〇一

目次

稅康（給入）……二〇二
吳猛……二〇六
鄭思遠……二〇八
葛洪……二〇九
黃野人……二一一
麻姑……二一一
吳彩鸞……二一三
許遜（給入）……二一五
黃仁覽……二三一
郭璞（給入）……二三二
劉綱……二四〇
東陵聖母……二四一
孟欽（給入）……二四二
范豹……二四四
王嘉……二四六

目次

屈謙……二四八
麻衣子……二四九
鄧去奢（絵入）……二五一
韓越……二五四
陶弘景（絵入）……二五六
桓闓（絵入）……二六一
寇謙之……二六二
張昆……二六五
萬振……二六六
徐則……二六八
白鶴道人……二六九
王延……二七〇
孫思邈（絵入）……二七一
張果……二七六
崔子玉……二八二

目次

明崇儼……二八六
韋善俊……二八七
王遙……二八八
司馬承禎……二八九
謝自然……二九二
貞孟……二九四
許宣平……二九五
王可交……二九八
李筌……三〇〇
李白（絵入）……三〇二
殷七々……三〇五
邢和璞（絵入）……三〇八
吳道元……三一一
羅公遠……三一三
雞窠中の仙兒……三一六

目次

申泰芝……三一六
徐佐卿……三一七
裴玄靜……三一九
帛和……三二〇
顏眞卿……三二一
黃升……三二三
王昌遇……三二四
呂巖……三二五
李賀……三三六
韓湘子……三三七
瑕丘中……三三九
江叟……三四〇
許栖岩……三四一
伊和玄解……三四六
王四郎……三四六

柳實。元徹……三四九
本村懋の仙人……三五四
廬山人……三五七
威道遙……三六一
唐居士……三六二
裴航(繪入)……三六三
軒轅集……三七〇
鄭全福……三七四
侯道華……三七五
劉瞻……三七六
譚峭……三七七
葉千韶……三七八
麻衣仙姑……三八〇
爾朱洞……三八〇
陳摶(繪入)……三八四

目次

目次

鈎玄英……三九二
馬湘……三九三
張九哥……三九五
侯先生……三九六
費孝先……三九七
張柏端（給入）……三九八
王鼎……四〇二
徐問眞……四〇二
徐熙春……四〇三
申屠有涯……四〇四
朱有……四〇五
林靈素（給入）……四〇七
李鼻涕……四一九
莎衣道人……四二〇
王文卿……四二一

目次

陶道人……四二二
武元照……四二三
孫寶魚……四二四
薩守堅……四二五
孔元方（給入）……四二九
王嘉……四三一
馬鈺……四三三
孫仙姑……四三六
譚處端……四三八
劉處玄……四四一
唐廣眞（給入）……四四三
朱橘……四四五
郝大通（給入）……四四八
賈善翁……四四九
顏筆仙……四五〇

目次

藍喬……四五一
周史卿……四五二
李笈……四五三
李仲甫……四五五
莫月昂……四五七
王處一……四六一
李靈陽……四六四
張金箔……四六五
張中……四六八
張三丰……四七〇
周顛仙……四七一
冷謙……四七四
翟天師……四七六
陽狂……四七八
費文禕……四八〇

劉無名……四八二
李常在……四八三
裴老人……四八四
張得一……四八八
梁野人……四九〇
趙閬……四九三
劉政……四九六
張先生……四九八

合計二百十五人

插繪四十一個

支那仙人列傳目次終

支那仙人列傳

東海林辰三郎著

老子

老子は太上老君の化身である。此太上老君は世々人間界に降つて來て、其道の宣化に力を盡された人で、天皇氏の時の萬法天師、地皇氏の時の盤古、伏羲帝の時の鬱華子、女媧氏時代の鬱密子、神農氏時代の太成子、軒轅氏時代の廣成子、少皞氏時代の隨應子、顓頊氏時代の赤精子、帝嚳氏時代の錄圖子、堯帝の時の務成子、舜帝の時の尹壽子、禹帝の時の眞行子、殷の湯王の時の錫則子等の各聖人は何れも皆太上老君の化精てある。

老子は殷の陽甲帝の時、玄妙玉女といふ婦人の胎内に宿つて、武丁帝の庚辰二月十五日卯の刻に、楚の國苦縣瀨鄉の曲仁里といふ小邑て生れた。母の胎内に在ること前後八十一年間、李樹の下て母の左の腋から生れた。其時彼は李の樹を指して此れが即ち吾が姓てあると言つたので、後世李氏を姓としたのてある。

老子

名は耳、字は伯陽、老子は其號で、又老聃とも稱する。生れた時頭髮已に眞白で雪の如く、顏色黃白にして耳長く、目亘きく、鼻隆く秀て居て額廣く、口締り、齒疎らで、美しい長い鬚が生えて居た。而して額には參五の達理が現はれて居て、日月兩箇の肉塊左右に突起し、耳には三漏門あつて、足に二五を踏まへ、手に十文を把るといふやうに、生れた時から已に聖人の瑞相を備へて居た。

周の文王未だ西伯であつた時分召されて賓藏室の吏となつて圖書の監督をなし、武王の時遷つて柱下の吏となつて其儘成王の時に到つたが、西極、大秦、竺乾等の國々に遊び、自ら古先生と號して治ねく敎化することに努めて居た。康王の時本國に歸つて來て再び柱下の吏となつたが、昭王の時仕官を罷めて亳といふ處に退隱した。其後昭王の二十三年に再び西域地方を敎化しようと思ひ立ち、青牛に駕て函谷關を通つた時、關の役人尹喜といふ者に仙道の奧儀を傳へた。

其後二十五年に蜀の青羊肆といふ町で再び尹喜に遇ひ、共に一所に流沙河を渡て西域に入つたが、穆王の時に復た中國へ還つて來た。平王の時再び西域地方に遊んだが、敬王の十七年孔子の爲めに道を說き烈王の三年、秦の獻公の爲めに歷數のことを說いた。赧王の九年、秦の西方にある散關を通つて崑崙山に隱

れたが、秦の世になつて、再び峽河の濱に降り、自ら河上公と稱して道を安期生に授けた。漢の文帝の時廣成子と稱して居たが、文帝は痛く老子の道を好んであつたので、態々使を老子の許に遣はして道を尋ねられた。其時老子は道を尋ねるには、夫れ相應の禮式がある、使を以て尋ねるなどは不遜も亦甚だしいと怒つたので、文帝も過を悔いて老子の許に詣り、親しく道を尋ねられた。

老子

其時皇帝老子に向て言はるゝやう、普天の下、帝王の土地に非らずといふ事無く、率土の濱、帝王の臣に非らずといふ事はない。王は實に一天萬上の尊位に在して、人類の最高に位するものである。然るに今汝は

假令道を得た有德の君子であるとはいひ、なほ陛が民の一人ではないか。それに何故斯やうな驕慢不遜の振舞をなすのであるか。考へても見よ、汝を殺し汝を生かすも皆陛が方寸の中にあるのではないかと。老子之を聞くや否や、默て掌を拍ち、座しながら身を躍らすと、不思議や老子の身體は冉々と空中に飛び上り略百餘丈の高さに達したと思ふ處て身を停め、帝を眼下に見下して、御覽の如く我が體は上は未だ天上に達して居らず、下は地上に屆いて居ない、そして身は空中にぶら下つて居るから何人の民でもない。然れば陛下如何に權勢が在しますとも、我が體を自由に處分さるゝ事は出來申すまいと言つたので、流石の皇帝も忽ち己が非を悟り鳳輦から降りて、禮を恭しくして詫びられた。此時老子は今日世に傳へてある老子道德經を帝に授けられたさうてある。

其後彼は又成帝の時曲陽泉に降て于吉に太平眞經を授け、章帝の時再び于吉に一百八十の大戒を授け、安帝の時、劉國に罪福新科を授け、順帝の時天師に三洞經籙を授け、桓帝の時、天台山に降て葛孝先に上清靈寶大洞の諸經を授け、魏の明帝の時嵩山に降て天師寇謙之に新科符籙を授け、唐の高祖の時、羊角山に現はれて吉善行に唐公の受命符を告げた事がある。又玄宗皇帝の天寶の初年丹鳳門に降つた時、皇帝彼を興慶宮に延て大に饗應した。其後又人間界に降て來て、金匱靈符が函谷關に藏して置かれてある事を田同秀に告げ、又王元翼に妙眞符の所在地を告げ知らした。宋の政和二年に又華陽洞天に現れて梁先生に加句天童護命經を授けられた。

斯樣に老子は世々身を現して、道を傳へ、民を敎化する事に勉められた。一體彼は太上老君の精てある故、天地未だ出來上らない前から、未來永遠の無極まても常に生存して居て、神通の弘大なる事、變化の自在にして隱顯出沒の測られない事は以上大體述ぶる通りてあるが、此外身を種々の者に現して普ねく人民を濟度した事は、一々此處に述べ盡されぬ。現に彼は今日なほ存して居て、常に道を吾人に敎へつゝあるものと、洽ねく人民に信じられて居る。

世に傳ふる處によると、始め彼が崑崙山に上うて昇天する時に、五色の光があつて天上の紫微宮を貫いた。其時昭王は太史を召して之れを占はしめた處、これは一人の聖人が西の方に去る兆候てあるが、千年の後には其道再び北方へ返つて來て、中國の民其敎を蒙る事てあらう、との事てあつた。そして今泰の昭王の甲寅から、漢の永平まで年を經ること大略千年てあつたといふ事てある。

木公

此處に唐の高祖の武德三年に、晉州の人吉善行といふものが羊角山に上つた時、一人の白衣を着た父老が居て自分を呼び留め、吾は即ち太上老君である、今の唐朝は即ち李姓で、現皇帝は即ち我が子孫に當て居る、朝廷に歸つたら宜しく此事を皇帝へ白して呉れと言つて、其儘姿が消えて了つた。其處て高祖は廟を建てゝ老子を祭り、高宗は彼を玄元皇帝と追尊し、明帝は又之れが爲めに自ら道德眞經を註せられ、又東西兩京及び諸州に玄元皇帝の廟を建てられた。即ち兩京にあるものを玄元宮と呼び、地方の各州にあるものを紫極宮と稱してあつたが、其後程なく西京のものを改めて太清宮と爲し、東京のものを太微宮と稱し、皆夫れ〳〵學生を置て教育せられ。又老子を尊んで太聖祖高上大道全閼玄元天皇大帝の尊號を賜はられた。

木公

木公諱は倪、字は君明といふ。彼は天地未だ混沌として其形體を成さない時に、天地の精氣先づ凝り固つて、大海の上りにある蒼靈といふ處に生れた。彼は天地の化育を贊け萬物の生育を掌る德の高い仙人て、專ら東方を治めて居る處から又號して東王公ともいふ。凡そ男子にして道を修めて登仙する者は皆彼の掌る處である。

彼嘗て丁卯の日に高き臺に登て、洽ねく宇宙八荒の內を見渡して廣く仙人の種類を觀るに、凡そ九つの階級がある。一は九天眞皇、二は三天眞皇、三は太上眞人、四は飛天眞人、五は靈仙、六は眞人、七は靈人、八は飛仙、九は仙人てある。而して總て仙人となつて昇天する際には、先づ第一に彼に拜謁し、次きに金母(西王母)に謁見して、萬事の指圖を受けるのてある。

漠の初年、何處の者とも知らず、一群の兒童が京師の市中を徘徊して居て、次のやうな歌をうたつた。

著青裙。上天門。揖金母。拜木公。

當時の人々は何の意味てあるか絕えて之れを知る者無かつたが、此處に唯一人張子房といふ者此話の通り木公に拜謁して仙道を得た。

彼嘗て玉女仙等と投壺の遊を爲し、勝負に負けた者が有る毎に即ち大口を開いて笑つてあつたが、其時彼の口から一道の光焰が迸り出た。是れ即ち今日の電光てあると云ふことだ。

西王母

西王母とは即ち龜臺金母の事である。西華至妙の氣を得て伊川といふ處に生れた。姓は緱(或は何にも作り或は楊にも作ろ)諱は回、字は婉娩、又太虛ともいふ。常に西方に位して居て、東王公と相對して陰陽の二氣を掌り、兼ねて又天地を調成し萬物を化育することに勉めて居た。そして凡そ女子にして道を修めて仙人になつたものは、總て皆此西王母の下に隷屬する事になつて居る。

彼女は平生崑崙の圃と、閬風の苑の中に住んで居たが、其住家は九層の美を凝した樓臺で、左には瑤池を控へ、右には翠水といふ河を繞らして居る。彼女に娘が五人居る。長女は華林といひ、次は媚蘭、青娥、瑤姬、末は玉扈といふ。

昔周の穆王八正の駿馬に乘て西方の國々を巡視なされた時、白圭の璧を執て此西王母に謁見せられた。其後又彼女と一所に花薫る瑤池の上りて酒宴を張つたことがある。其時西王母は王の爲めに次の様な謠を作つた。

白雲在天。山陵自出。道里悠遠。山川間之。將子無死。尙能復來。

畢竟不老不死の道を得んと思し召さは、再び此處に訪ねて來られよとの意味である。

漢の武帝の元封元年、宮殿に降つて皇帝に謁見した時、彼女は皇帝に蟠桃七箇を獻上し、自分も其中の二つを取つて食べた。其時帝は核だけ此處に留めて置いて吳れと頼むと、彼女は此桃は三千年に一度實を結ぶ世にも珍らしい仙果で人間世界に產するものでないから、假令種子を播いても無益であらうと答へた。

西王母

其時偶々東方朔が牖の隙間から此方を窺いて居るのを見て、彼女は東方朔を指して彼の小童こそ已に三つ計り吾が桃を偸み食つたのであると、笑ひながら帝に物語つた。

是の日彼女は、侍女

の董雙成に雲和の笛を吹かしめ、王子登に八琅の璈を彈かしめ、許飛瓊に靈虛の笑を鳴さしめ、安法輿に玄靈の曲を歌はしめ、そして武帝の末長く壽命あらん事を祝して、然る後自分の住家へ歸つた。

上元夫人

漢の武帝元封元年七月七日、西王母紫雲を飛ばし五色の斑點ある麒麟に乘て帝の宮殿に降り、皇帝が禮をただして彼女に拜謁せられると、其時西王母は侍女の一人を上元夫人の許に遣して彼女を呼び迎へしめた。上元夫人とは三天眞皇の母で、總て仙人共の名簿を掌る上元の役人てある。

此時上元夫人は青霜の袍を着け、髪を三つの髻に結び、餘りの髪をだらりと後へ長く垂れ、同じく麒麟に乘つて宮殿に來り、帝を見て即ち云ふやう、汝は平生道を好んで、常に眞人を求めやうとして居るのは如何にも殊勝な事てあるが、只汝の性質は餘りに疎暴てあること、女淫を好むこと、豪奢を好むこと、殘酷を喜ぶこと、物事に深しからぬこと、此五つの惡性は汝が母の胎内からして稟け繼いて來たもので、此五性が深く汝の五臟の中に宿つて居る爲め、汝が是迄屢々方士などを招いて長生の術を求めて居るにも拘はらず、未だに何の効もなく、徒らに心思を勞するに過ぎないのてあると戒めた後、靈飛十二の法を帝に授けて、西王母と一所に天上へ歸つて了つた。

赤松子

赤松子は神農の時に雨師といふ役人になつて居たが、後崑崙山に上り、西王母が築いた石室の中に住て居て、只風雨ある毎に石室を出てゝ山を下つて來る。然るに炎帝の少女彼を戀ひ慕ひて同じく崑崙山に

赤松子

上り、同じく赤仙術を得て赤松子と一所に飛仙して了つた。其後赤松子は高辛氏の時再び現はれて雨師となり、時々山を出てては人間界に遊んで居た。

姮娥

何時の頃か羿といふ者が居て、或日一人の神人（或は西王母といふ）から不老不死の仙藥を授けられ、其儘深く秘藏して置いて誰れにも告げ知らさなかつたが、其妻之れを知つて或夜竊かに其藥を盜み出し、之れを服して昇天し、月宮の中に入つて姮娥となつた。

附記 一說には姮娥を嫦娥と書く、後世月を指して嫦娥といふのも全く此傳說から起つたことである。

吳剛

吳剛は西河の人である。仙道を修めて居る中フト罪を犯したので、上帝から月の中に繁て居る桂の樹を伐る役人に貶された。而して件の桂の樹は折角骨を折て伐つたかと思ふと、復た其跡から合して、幾何伐つても〳〵伐盡すことが

出來ないのであつた。

期くて、彼は今日もなほ其桂の樹を伐て居るといふことである。

廣成子

廣成子は軒轅氏時代の人であつて、崆峒山の石室の中に住つて居た。一日黃帝が彼の許を訪づれて道の要旨を尋ねた時、彼は答へていふやう、聖人の道は玄窈冥邃であつて、眼で觀ても視る事が出來ず、耳で聽いても聞く事が出來ぬ。只神を潛め心を靜めて其妙不可思議の道理を悟るにある。故に心を靜め念を清め、徒らに形骸の爲めに累はされず、邪念を消して精神を勞する事さへなければ長命する事が出來る。何事でも謙遜辭讓を第一とし、慾ひ知識を鼻にかけ、才能に任せて驕慢の行あつてはならぬ、是は失敗の第一源因である。自分は此年まで能く此道を守つて來たから、千二百年の長い年月を經ても、今汝が見る通り嬰鑠として少許も老衰しないのである云々。（其詳しいことは黃帝の傳に記してある。）

黃帝

黃帝

黃帝位に登て天子となつてから十九年經つた某日、廣成子といふものが崆峒山に居ることを聞いて、早速之れを訪ね、禮を厚うして道を尋ねられた、其時廣成子は汝が天子となつて天が下を治められてから今日まで、雲が族集しない中に雨が頻りと降て來るので、一年中雨の降るのに一定の極がなく、草木なども黃葉しない中に早くも散つて了ひ、日月の光も益々荒び衰ひて來る、斯樣な事では未だ道を聞ても何の効にもたゝぬと言つて、大に黃帝を叱責した。

其處て黃帝は退いて身を責むる事三月、再び崆峒山に赴いて廣成子に謁えた。其時廣成子は南の方を枕にして臥て居て寸許も相手になつて呉れぬ。其處で黃帝は廣成子の脚の方から膝行りよつてそろ〳〵と前へ進み、平身低頭して長生の法と身を治むるの道を問ふた。此時廣成子は遽かに起上り、能くも問はれた、今は何事も押包まず汝に告げて遣らう、夫れ畫人の道は玄窈冥邃にして眼て覩ても視る事が出來ず、耳て聽いても聞くことが出來ぬ。唯心を靜め、邪念を斷ちて神を養ふならば始めて長壽なることが出來るのだといつた。之を聽いて黃帝大に喜び、それから浮世を棄てゝ三昧に入り、專ら心を養ひ神を鍊ることに努めたので、形骸は此世に留て居れど、魂は常に此世の外に逍遙して、華胥氏の國に遊んて居た。

華胥氏の國とは弇州の西、臺州の北に當る一の國て、中國を去ること幾千百里てあるか到底測り知る事が出來ぬ、然れば步行は勿論のこと舟車も通ぜず、唯精神のみが自由に往還する事が出來る。そして其國は上には師長等の權力を揖にする階級がなく、人民は皆太平を樂しんて利欲の心少しもなく、又生きて居るといふ事を樂しいとも思はなければ、從つて又死の畏るべきものてあるといふ事も知らない、恬淡無爲の中に生活して居て、夭殤等の事は曾て無い、其他自己一身の利榮を謀るなどの心が露程もないから、元より

黃帝と廣成子

黃帝

愛憎によつて好惡を區別するとか、利害によつて向背を別つ等の事はなく、一切平等無差別で、世に畏るゝものもなければ又忌み憚るものもなく、水に入つても溺れず、火に入つても燒ける事がなく、恰も地上を歩くやうに自由に空中を飛行し、山でも、川でも總て平地の如く駈け廻る事が出來、風雨とか、雷震などゝいふ恐ろしい天災も起らず、實に此世ながらの極樂世界である。

黃帝是に於て愕然として大に悟る處があつたので、一日各州の諸侯を召し集め告げて言ふやう、朕三月許閑居して身を養はうと欲したけれど、天下を治むるの道に於て聊かも得る所がなかつた。然るに夢に華胥氏の國に遊び、偶々道の至奥を窺ひ知る事が出來た、其妙味はとても理窟で說明し、又は口で說き盡す事が出來ない。其國は斯樣々々であると精しく說き聞かしてあつたが、其後果して黃帝の天下は華胥氏の國のやうに大いに治まつてあつたと云ふ事だ。

黃帝其後首山から採掘した銅を以て、荊山の麓で一の鼎を鑄た。鼎が愈々出來上つた時に一頭の黃龍忽然と現はれ出て、天上から下りて來て黃帝の前に平伏した。其處で黃帝は妻妾及び群臣七十餘人を連れて其脊に乘り、共に天上へ上昇して了つた。此時他の群臣共は乘る事が出來ず、悉く龍の頤の髯に掴まつ

たので龍の髯が拔けた。黃帝は弓を惜しんで嘆き悲しむ群臣を見て、紀念にせよと仰つて、携へた所の弓を地上へ投げ下すと、群臣は其弓を抱いて皆泣き悲んだ。因て後世此處を名づけて鼎湖と呼び、其弓を稱して烏號と名づけた。

容成公

容成公は自ら稱して黃帝の師であると言て居たが、周の穆王に對面して補導の事を說いた事がある。

其說は精神を養ふて長生不死の道を得やうとするにあるので、老子の道と同一である。彼は斯樣にして

容成公

精神を煉る事に勉めたので終に仙術の奥儀を極め、髪が白くなつても後忽ち黒くなり、歯が老朽して落ちて了ふと、又更に新らしい歯が生えて來て居た。

何侯

何侯は堯の時蒼梧山に隠れ、常に長生の術を得ん事を望んで居た。そして家族は奴僕婢女を加へて三百餘人、田畑を耕して平和に暮らして居たが、舜帝南方に巡狩をなされた折、何侯の家を以て其行在所となされた。

此時天帝の使者潜かに來りて、舜帝に其昇天すべき期日愈々明日に迫つた由を告げたが、翌日になると果して天帝が天から下て來て舜帝を迎へ、眞晝中に昇天して了つた。其後夏の禹帝の時、天帝再び天より下て來て、仙藥を何侯に與へ、酒の中に入れて家族に飲ませやうにと告げた。其處て何侯の一家族三百餘人、右の藥を入れた酒を飲むに、幾許飲んても酒が盡きたといふ事が無い、試みに餘つた酒を家根に灑いて見ると、さても不思議、其部分丈け家根が抜け去ると見る間に、何侯を始めとして一家族の者身體忽ち輕くなり、風にゆらるゝともなく自づと空中に飛び上り、其儘抜け去つた家根の穴から皆々昇天して了ひ、何侯は太極仙人の位に叙せられた。今日嶷山に舜帝の廟あるが、其側に又何侯の廟も建てられて居る。

鐵拐先生

鐵拐先生姓は李氏。性質剛壯てあつて、容貌魁偉の一丈夫てあつた。若年の時已に道を得て或山中の巖穴に修錬をして居たが、一日李老君（老子）宛丘先生と共に鐵彼の許を訪づれて、仙道の秘訣を傳へられた。

拐

或日彼は老君を華山に訪ねる約束がしてあつたので、自分の

弟子に留守の事を吳れ〳〵も頼み、且つ自分の魂は今此處を去るけれども、魄は留めて此處に殘して置くから、若し自分の魂が七日經つても還て來ないならば、自分の形骸を勝手に仕末してもよいが、七日經たぬ中は一寸でも動かしてはならぬぞと堅く戒めてあつた。處が其後彼の弟子は急に母の大病によつて歸らねばならぬやうになり、未だ六日しか經たないのに、先生の遺骸を火葬に附して了つた。てあるから鐵拐の遊魂が七日になつて歸て來たけれど、自分の形軀は早や燒き棄てられたので宿るべき處が無くなり、仕方がないから、或路傍に餓え斃れて居た一人の乞丐男の屍に乘り移つた。それてあるから、彼の形は跛の醜い男となつたけれども、これは彼が本來の軀幹てはないのてある。

彭祖

彭祖姓は錢（一書には籛とある）字は鏗、顓頊の玄孫てある。殷の世の末年には齡已に七百餘歲てあつたけれど、顏色少しも衰へず、若々として居て恰も少年のやうてあつた。性甚だ恬靜幽寂を愛し、惟だ精神を養ひ長生を得ることを專ら修業として居た。

穆王或日彭祖の賢明てある事を聞きて召して大夫と爲さんとした處、彼は佯て疾と稱して役につかず、唯補導の術に長して居たので水晶雲母の粉、及び麋の角を服しては、一向長命延壽ならん事を勉めて居た。然るに此處に一人の容姿美はしい女が居て、每度輕輧に乘て彭祖の許を訪ね、道を聞きては其要點を摘んで穆王に敎へて居た。そして王が試みに其方を行て見ると一々皆著しい效驗があつた。其處て王は大に喜んて此法を永く秘密に爲やうと思ひ、國中に令を下し彭祖の道を敎授する者があれば、直ちに之れを引き捕へて祖殺した後、更に彭祖をも捕へて之れを害しやうとした。然る

に彭祖是を聞て大に悔み、一日飄然と何處へか去つて了つたが、其後七十餘年程經つて、門人某が流沙河の西に於て偶々師の彭祖に逢つたさうてある。

或一說には、周の世が衰へた時彼は一家を携へて四方を流浪し、晩年蜀の國の武陽といふ處に留つて姑らく其處に住んて居たが、是迄に彼が一家は四十九人の妻女を代へ、子供五十四人まて失つたといふ事だ。

其後黃山君といふ者が居て、彭祖の術を修めて大に得る所あつたが、彭祖が仙化した後、其說を集錄して彭祖經といふものを作つた。

張天翁

張天翁は名は堅、字を刺碣といひ、漁陽の人てある。幼少の時から磊落不羈、物に拘泥することを嫌ふて居た。

曾て或日のこと、羅を張て一羽の白雀を獲たので、乃ち餌を與へて飼て置くと、此處に天上の仙宮に天劉翁といふ者が住んて居て、或事からして深く此張天翁を怨み、或日謀を以て彼を殺さうと企てた時、件の白雀之れを知て斯くと張天翁に告げ知らしたから、張天翁は彼の謀計に對して充分の備をしてあつたので、天

劉翁は遂に彼を害することが出來なかつた。

其後天劉翁は此張天翁の許を訪ねて來たことがあつた。其時張天翁は多くの人々を招き集め、盛んに酒肴を出して厚く天劉翁を待遇し、彼が酒に醉ふて前後忘却して居る隙を窺ひ、竊かに彼が乘て來た白龍の車に騎り、策を擧けて天上へ驅け登つた。後て天劉翁は眼を醒して此事を知り、大に驚いて急に龍車にのつて彼の跡を追掛けたけれど、遂に彼に追付くことが出來無かつた。

扨て張天翁は天上の仙宮に到着すると、直ちに百官を夫れ〳〵改易し、北門を堅く鎖して天劉翁の入ること出來ぬやうに致し、次に件の白雀を封して上卿侯となし、彼の子孫をして長く下界の地に產するやうのことが無いやうに取計らつた。今日此人間界て白い雀が一匹も產しないのは全く之れが爲めてある。

醻て彼の天劉翁は張天翁の爲めに自分の宮殿を奪はれて了つたので、今は身を寄する處がなく、五岳（華山、嵩山、恒山、衡山、泰山）の山々を彷徨きまはつて居て、腹癒の爲めに散々人民共に災を爲して居た。張天翁此事を聞て大に心配し、更めて彼を太山の太守にして人間の生死の登錄簿を掌らしめ、而して永く中嶽に住はせて置いたので、彼の暴行も漸う收まることを得た。

王中倫

此處に高唐縣の鳴石山といふ處に一の巨岩がある。其高さ百餘仞、幡欒として雲の上に聳えて居たが、人若し何か物を以て件の岩を叩くと、奇妙な音を發して其聲が如何にも清越であつた。

然るに此處に田宣といふ一人の隱者があつて其岩の下に住んで居たが、風清く月明き夕、件の岩を叩いては其清越な響に耳を傾けて獨り娯んで居ると、或夜一人の白い單衣を着た道人が岩の上を彼方此方と徘徊して居て、曉方近くなると何處へか立去て了つた。

其翌晩田宣は他の人に岩を叩かしめて置いて、扨て自分は岩の上に登つて密かに件の道人を待ち設けて居ると、其夜も果して件の道人が遣て來て頻りに岩の上を逍遙ひ始めたので、田宣は急に其袂を執へて其姓名を詰問すると、件の道人は衞國の者で、名は王、字は中倫といひ、周の宣王の時少室山に上つて仙道を學んであつたが、此頃少許思立つことがあつて、毎夜方壺に往來する途次、會〻此處を通つて件の清越な岩の響を聽て獨り樂んで居るものであることを物語つた。

田宣之れを聞て大に喜び、早速養生の術を彼に問ひ尋ねると、彼は大さ雀の卵程ある一箇の石を田宣に與へ、其儘空を渡て何處へか立去て了つた。

そして件の石は之れを口の中に含んで居ると、不思議や、百日の間何に一つ食べずとも少しも餓ゑるといふことがなかつたそうてある。

劉越

周の世に匡先生（匡先生ともいふ）名を續と呼ぶものが居て、南嶂山の虎溪のほとりに修道をして居ると、一人の少年が何時頃からか數〻遣て來るやうになつたが、其言ふ所を聽くと、なか〳〵奇警にして普通のものとは格段違て居るので、匡先生心中に深く之れを怪しみ、或日彼の少年に向つて、貴殿が此處に遊びに來るやうになつたのも最う久しい事だ。然るに今猶ほ君が何處の何んの誰人であるかを明かして呉れないのは何よりも殘念だ、今日は是非之れを伺ひ度いといふと、件の少年は、自分は劉越といつて、此山の陰に住んで居るものだ。此山の麓に高さ二丈計の一箇の大石がある、此石を手て叩くと、內に應ずるものがあつて戸が忽ち開かれることを告げた。其處て匡先生は或日彼の少年に敎へられた通り

劉越

山の麓に行て見ると、果して高さ二丈許の大石があつたので、試みにトン〳〵と輕く叩いて見ると、石が忽ち裂けて二つになつた。其れは即ち石の門扉であつて、左右にサッと開くと、一人の小童が案内に出て來て彼を奥に導いた。門内へ入つて漸々數十歩も行つたかと思ふ頃、二人の青衣を着た男が出て來て前にたつて案内して呉れた。それについて奥深く入つて見ると、驚いた事には、大きな廣々した庭を隔てゝ幾箇かの樓臺が其處にも此處にも建て居て、金楝朱欄燦然として相映し、珍らしい鳥や、奇妙な獣が自が勝手に庭内を飛び廻て居り、幾種とも數も知れぬ美事な草木が四邊に繁つて居て、一體の風趣が全く世間のものと異つて居る。

處へ主人の劉越が眞人の冠服をつけて出て來た。匡先生は餘りに美事な宮殿なので、斯様な處で悠焉と長滯留して居たらさぞ面白い事であらうと、頻りに心を動かし始めたが、劉越は早くも彼の心中を見抜き、貴方の修養は此處に來て住む程未だ充分積んで居らぬ、何れ其中には貴方も此處に住む身と爲らるゝ事であらうから、今日は一日悠焉遊んでお歸りなされといッて、仙酒を三盃、外に延齡保命湯を一杯御馳走して呉れた。

さて匡先生は其處を辭して山を出て、後を振返て見ると、彼の石の扉は復た舊のやうに鎖されて一箇の石となつて居る。其後彼は再び彼處に赴いて前の如く石を叩いて見たが、今度は何等の手應もなかつた。其場所は今の盧山の太平興國宮の三門の外で即ち石逕亭の在る所である。此石は今日一般に仙石と稱して居るが、今も猶ほ此石の表に劉仙の二字が存して居るさうである。

匡續

匡續は字を君平といひ、南楚の人である。匡阜先生とも號して居た。聰明利達で、幼い時から神童と呼ばれ、早くも普通ならぬ人であることを示して居た。彼は小兒の時分から浮世を厭ひ、周の武王の時老子に就いて道を學び、終に長生の術を得た。仍て南障山の虎溪の上りに草廬を構へて、此處に住んで居たが、室の中には何一つ目に觸るゝものはない、唯一脚の榻と書卷數篇あるのみだ。周の武王彼が名を聞て、屢々使を發して召されたけれど、毎時も辭退して應ずる氣色は見えなかつた。是より先き、匡續の許に屢々遊びに來る一人の少年あつたが、其話す所を聞くに尋常一樣の少年ではない、深く斯道に達したものと見える

のて、或日匡續が此少年に向つて其姓名を尋ねたところ、此少年は姓は劉、名は越と呼び、山の陰に住んて居るものてあることを話した。仍て匡續或日此少年の隱家を訪ねて仙湯の饗應に逢ふたことは、劉越の處で精しく述べたから此處には略す。其後彼は修養を積んて道を得、遂に仙丹を煉て昇天することを得た。

漢の武帝元封元年に南方に巡狩して天を祭り、櫂て潯陽江の上りて毒蛟を射殺して人民の害を除き、又匡續を封じて南極大明公となし、更に虎溪の舊の草庵の跡に一字の祠をたてゝ年々の祭祀を行はれた。東晉の時に至り雁門の名僧慧遠といふもの羅浮といふ處に遊んて、一夜を此匡續の祠に宿した時、其附邊の景色の優れて居ることを觀て心に大に之を愛し、早速郡守の桓伊に逢ひ、恩僧昨夜匡先生の祠に宿すると、匡先生夢の中に現はれて、今の祠を廢して佛寺と爲されたい旨を告知したと欺いたので、其處て桓伊は其言葉を信じて早速祠を山の麓に遷し、其跡に一字の佛寺を建てた。唐の開元年間、再び此祠を修復し、尊んて仙廟と爲た。凡そ人民此祠に禱る時は水難、旱災、惡疫等の災難から免れるといふので、後世まて人々の信仰が厚かつた。

彭宗

彭宗は字を法先と呼び、彭城の人てある。年二十歲の時杜冲に從て道を學んだ。曾て或日のこと師に從て藥草を採りに或山に上つた時、路て誤て深い谷底に墜落して手足を傷め損ひ、一時人事不省の狀態に陷つたけれど良久して息吹き返し、又初の如く恭肅して居て少しも姿態を崩さなかつた。又或時師の吩咐て山へ薪採に出掛けた時、毒蛇に噛まれたけれど、少しも惰る氣色をも見せなかつた。斯樣に彼は種々の困難に出逢ふたけれど、一日も道を求むる志を廢しなかつたので、師の杜冲も大に彼を愛し、丹經五千文と守一の道とを授け、每日之れを修業せしめた處、彭宗の學日々に進んて、今は道の玄妙を極むるまでに及んだ。

彼についての奇蹟は非常に多い。例へば斯ういふ事がある。曾て或夜のこと、仙燈數箇忽然として空際に浮び、光輝燦々として彼が坐て居る座敷を照らすさへ不思議てあるのに、五色に彩つた雲霞が霏々として降り、彼が座敷の四圍を立籠めて異香四邊を薰する有樣、實に天上の仙界もかくやと思ふ計りてあつた。又彼は三晝夜に一呼吸をなし、又は水底に臥して一日も出て來ない時もあり、或

彭宗は目を閉ぢて横臥した儘一年餘も身を動かさないので、塵が自然に其上に積て指を沒する程に到つた。それで傍に見て居た人々は已に死んだものと思ふて居ると、彼はやがて復た塵の中から起き上つて、人々と話す樣は平日と少しも變らず、顏色まで艶々して如何しても一年餘も絕食した人と見えなかつた。又五千の文字を一息で讀み下し、尙ほ息が餘つて再びそれを始から讀み返すことも あつた。又山中を通て毒蛇や猛獸に出逢ふ事があつてもウンと氣合をかけれ ば件の毒蛇や猛獸は皆其處に慴伏して身動きも出來ず、彼が其法を解くに到て 始めて身が自由になる。斯ればこそ禽獸も彼の顏を見知て居て、彼が通れば向ふから逃隱れて了ふのであつた。昔て一人の獵夫が居て、彼を見て口を極めて罵詈惡口を吐いたのみならず、やがて又を以て彼を殺さんとする氣色が見えたので、彼は一つ氣合をかけて印を結ぶと、件の獵夫は全身忽ち痺れ、手足の筋が硬ばつて其處に直立した儘一寸も身動が出來ず。そして其處へ數多の幽靈が顯れ出て、手に〳〵棒を以て件の獵夫を擊つので、彼は頻りに苦しい聲をあげて泣き叫んだ。此時側に見て居た人々の眼には妖鬼が見えず、唯空中に頻りと笞の音を聞くのみてあつた。

彭宗年一百五十餘になつたけれど、顏色鮮かて少しも衰へず、恰度二十位の少年にしか見えなかつた。周の厲王十三年正月太上老君仙官を使者に遣して彼を天上に迎ひ、大清眞人の位を授けて赤城宮を治めさした。

王子喬

王子喬は周の靈王の太子て名を晉といふ。平生笙を好んて却々其道に堪能てあつた。曾て伊洛の間に遊んて居る中、道人の浮丘公といふものに從て嵩高山に上り、三十餘年經つた後山を出て來て柏良といひ

王子喬

ふ人に遇ふた時、彼に向つていふやう、都へ歸つたら、七月七日には自分も久振て家へ歸らうと思て居るから、緱山の頂に在て自分を待て居るやうに家族の者共に話して呉れと。

さて愈七月七日になると、果して王子喬は白鶴に乘て緱山の頂に下りて來た。彼の家族は之れを見て間近に行て親しく對面しやうと思つたけれど、何にせよ嶮しい山の頂に居るので、其處へ上つて行く譯に行かず、唯遠くから之れを眺めて居た。其時王子喬は集つた人々に久濶の禮を述べ、數日の間山頂に留て居たが、やがて復た白鶴に乘て何處とも知れず飛び去て了つた。其處で家人は其後緱山の麓に彼の祠を建てゝ厚く彼を祭てあつた。

沈義

沈義は呉郡の人である。蜀中といふ處で或仙人に遇ふて道を學んだ。此沈義といふ人は甚だ醫術に達して居たので、其術を用ひて廣く人民の病氣を治し、其功德在天の仙聖に聞え、周の赧王の十年、太上老君が態〻仙使を沈義の許に遣して、彼を義碧落侍郎の役に任じて彼等夫婦を仙界に召び寄せた。此時恰度多くの人々が田畑にあつて耕して居たので、沈義夫婦が日中昇天するのを目の當り能く見ることを得た。初め非常に濃い霧が一面に降りて四邊は暗黒になつたが、須臾して霧收まつた時には、沈義が乘つて居た牛車のみが畑の中に殘されて居て、沈義夫婦の姿は何時の間にか消えて無くなつて居た。其時或人が件の牛車を見知て、此事を急に沈義の家族に告知らすと、家族共は恐らく魔性の仕業であらうと推測したので、一家の奴僕數百人、各〻手を八方に分けて、凡そ百里の間、木の上から草の蔭まで殘り隈なく探し求めたけれど、夫婦の影だに見出すことが出來なかつた。

其後凡そ四百十二年程經て、即ち漢の殤帝の延平元年に、沈義は久振にて鄉里に還り、自分には丁度十餘世の孫に當る名は懷喜といふものに逢つた時、懷喜は大に喜んで、自分は曾て自分の祖先で仙人となつて昇天したものがある由を親から聞き傳へて居たが、果してそれが眞實であつたかといつて沈義を鄭重に取扱つた。沈義は數日其處に留て居たが、或日家族のもの共に語ていふやう、自分が初め天に昇つた時、天帝には拜謁しないで唯老君丈けに面會した。其時老君は東に向て坐つて居られた。

其宮殿といふは實に目も醒むる程立派で、四方の壁は總て金箔が張り詰めて居て眩い程照り輝き、棚の上には一面に符書が積み重ねられて居る。そして五色の雲が常に宮殿の四圍を籠め、庭前には珠のなる草、玉のなる木が幾千本となく植ゑられて居て、春夏秋冬の眺めは形容の出來ない程美しい。宮殿に使て居る侍臣は其數五六百人程もあつて、男が少なく、大半は總て皆女である。老君の身長は一丈餘あつて、身體中から金色の光明を發して正視することが出來ない。其の時老君は一人の仙女に吩咐て金の案と玉の杯とを持ち來らしめ、件の杯に神丹といつて、之れを飲めば不老不死の壽を得る仙藥を盛て、自分等夫婦に一匙づゝ飲ませ、次きに鷄の子程の大粟二箇を賜はり、又一枚の符と一つの仙術とを自分に授けられ、姑らく人間界に還て行て人民の病に苦んで居るのを救ふてやれ、若し昇天したいと思ふ時には此符を竿の梢に懸けて指し出しさへすれば、仙吏が居て汝を呼び迎へるであらうと言はれた。其時自分は忽ち昏々として深い睡に落ちたやうな感がしてあつたが、眼を開いて見ると、自分は何時しか此地上に到着して居るのである云々。

此時會〻竇太后が疾にかゝつて、天下の名醫が集つて手を盡し品を換へて治療

したけれど少しも効驗が見えなかつたが、沈羲の醫術を能くするといふ事を聞かれて彼を召し寄せて治療を受けられると、流石の難病も忽地の間に平癒してあつた。安帝の時沈羲はなほ人間界に留て居たが、其後暫時たつと再び昇天して了つた。

琴高

琴高は趙の人で、琴を鼓するに妙を得て居た。宋の康王の舍人となつて居たが、涓子彭宗の術を學んで又之れにも通達して居た。冀州涿郡の間に放浪して居ること二百年許り、其後涿水といふ河に入つて龍の子を獲たので、仍て自分の弟子共に某の日家に歸るから必ず待て居るやうにと堅く約束をした。愈〻其日になると數多の弟子共は齋戒沐浴して席を河の邊に設け、刻限の來るのを一時千秋の思で待ち設けて居た。

琴高が歸て來るといふので、それを觀やうとて諸所方々から集て來た群衆略〻一萬餘人、皆々鳴を靜めて今か〳〵と水上を眺めて居ると、今迄穩てあつた河水が俄に波湧き、河底の方に當て何處となく音樂の聲が聞えたかと思ふと、一際高

く起つた波の中から、翠高は二尾の鯉魚に乘て水の上に浮んで來た、そして彼は一月計り人間界に留て居たが、やがて又水府に歸て了つた。

負局先生

負局先生は何處の人であるか瞭然せぬ。何でも其言語によつて判するに、燕代地方の人らしく思はれてあつたとのことである。鏡を磨ぐことを以て生業として居たが、顧客があれば必らず其者に家に病氣で苦んで居る人が有るか無いかを尋ね、若し病人でも有る場合には、懷中から紫丸赤藥を取出して之を飲ませしむるに、如何な病氣でも直ちに癒らぬといふことがなかつた。

或年惡疫大に流行して人民非常に難義をした時、彼は家毎に右の藥を頒ち與へて、之れが爲めに病苦を免れたものは幾萬といふ數を知らず、然かも彼は一文も謝禮を取るでなかつた。

其後彼は久しく吳山に隱れて居たが、其家の側にある絕崖の上に藥を懸けて置き、人民に勝手に來て取り去らせ、そして自らはかう言て居た。自分は今に遂萊山に歸らうとするのだから、斯うやつて汝等人民の爲めに水崖のほとりに神

を降し留めて置くのであると。處が雨が降る度に水が增し藥が溶けて下流へ押し流される爲め、其下流の水を汲んで飲む人は如何な病氣でも忽ちに平癒しないものはなかつた。仍て其地方の人民は彼が爲めに祠を建て、年々盛んな祭を行て居た。

莊子

莊子は蒙の國の人で、名は周といふ。梁の惠王、齊の宣王と同時代の人で、蒙國の漆園の監督をして居た。

彼は極めて博學にして、諸子百家の學一として目を通さないものはなく、實に一世の

碩學大家たるに愧ぢなかつた。然し其學問も要する所老子の道を祖述したものに過ぎなかつた。又彼は莊子といふ書を著して數萬餘言を述べたが、其要旨は全く老子と同じてある。

楚の威王彼の賢明なことを聞て宰相に爲やうと思ひ、即ち使者に夥しい贈物を持たして彼の許に遣すと、其時彼は冷かに笑つていふやう、自分が曾て斯ういふとを聞た、昔楚の國に一頭の神龜が居て死後已に三千歳を經て居るが、平素立派な箱に入れられて廟堂の中に大切に藏て置かれる。さて此處で一つ汝に問ふて見るが、一體此龜は死んでも長く其骨を留めて世の中から尊敬せらるゝのを喜んで居るだらうか、但しは又値無く生きても、悠々と自分の氣の向く儘に泥の中を尾を曳いて遊んで居るのを嬉しいと思つて居るか、就れてあると汝は思ふか。其處て彼の使者は何心なく、それは勿論泥の中を尾を曳いて歩むとも生きて居る方が喜ばしいには相違ない。と答へると、莊子は此處ぞと言はぬ計りに身をゴロリと横にしながら、折角遠路のところ尋ねて來られたのは實に難有いが、自分は今尾を泥の中に曳かうとして居る龜であるから、一刻も早く此處から立ち去て貰いたいと言つて、其後は一語も發しなかつた。其後威王再び使者を遣して是非にと說勸めた時も、彼はそれを辭退して、彼の神前に供へる犧牛を知て居るか、美しく文繡した衣を着、彼等には此上もない御馳走てあるところの芻豢を食べて、何に一つ世に不足のないが幸福な境遇にあるけれども、忽ち太廟に連れ出されて行く時には最早身體の自由な野犢とならうとした所て無益だ。目や口の贅澤の爲めに二つとない身體を束繩されて、終にはそれさへ失はれて了ふやうなものは、望ましくも何んともないと言て、遂に終身仕へなかつたが、其後昇天して關編郎と爲り諸の仙人の賞罰を記載する役人となつた。

尹喜

尹喜字は公文といひ、天水の人てある。初め彼の母嘗て昼寢を爲た時、世界中の流霞が集て一團となり、自分の身を十重二十重に取り圍むと夢みて彼を胎んだ。そして尹喜が生るゝ時分に、家の周圍に幾千と數知れぬ蓮が生えて花を開き、香氣馥郁として四邊に滿ちてあつたさうてある。

尹喜成長するに從て、眼に日精があつて其光人を射る、そして身長高く臂又並よりも長くして下へ垂れゝば膝の下まで屆いてあつた。幼少の時分から學を

好み、常に精華を服して居て身を養ひ、優悠閑雅の態を喜んで區々たる世間の俗禮に拘ることを嫌ひ、又陰德を行ふことを勉めて、名聞などは少しも求めなかつた。

彼は周の康王の時大夫となつたが、一夜庭前に立て天文を觀るに、東の空に當て一道の紫氣氤氳と立ち上り、其末次第に西の方に向ひて動きつゝあるのを見て、早くも心の中に一人の聖人があつて、函谷關を超えて西方へ赴くことあるべきを察し、自分から謂ふて函谷關の役人孫景といふものに、若し風采態度から、其載て居る所の衣服迄、總て通常のものと殊なつて居る者が此關を通つたならば、其旨早速自分の許へ報して呉れと、堅く申し含めて置いた。

頃は恰も昭王の二十三年七月の十二日甲子の刻である。太上老君（老子）には白輿に乘り、青牛に牽かせ、徐甲といふ者を御者として此の函谷關を通過せられた。孫景斯くと見るや、逸早く此由を尹喜に告げると、尹喜は喜ぶこと一方ならず、直ちに通常服を朝衣に改め、關を出て路側に出迎ひ、禮を恭しくして暫時自分の許に車を留められんことを乞ふと、老君伴ていふやう、自分は見る影もない田

夫の一老翁である、家は關の東にあれど、田畑は關の西にある。唯今其處へ行いて薪を採らうと思つて居るので、別に怪しいものでも何んでも無いから、無事に此處を通らして呉れと、丁寧に頼むのを、尹喜は更に耳にもかけず、尙も一層身を謙遜りて、大聖が薪を取る爲めにと仰せらるゝけれど、そは必ず伴り給ふものであらう、愚生は已に數月前から大聖が此處を通らるゝことを知て居て、實は大聖のお出になるのを此處に待て居たのである、是れから行く先々は、山險しく路細く、毒蛇猛獸路々に充滿して居て旅の途定めて難澁であらう、秋の涼風たちて、木の葉も落ちる頃にもならば、毒蟲も穴に潜みて、旅も今よりは甚だ易きことであらうと思へば、それまで暫時愚生の許に車馬を留め玉へと、眞情をこめて引留めたけれど、老君なほ聽き入れず、西方に一人の聖人あつて竺乾を濟度し、其道宏大であつて德化洽ねく其地に及んで居ると聞いたから、親しく其仙聖を尋ねて道を求めやうと思ひ、さては偶此處を通つたのであると言つて容易に實を吐かなかつた。

是に於て尹喜膝を抑進めて、今大聖の容貌を覩ひ相るに神姿他に優れて居て、道德の峻き聖者と察し奉るによつてかくは懇願申すのである、早く眞意を打明

けて敎を垂れ給へと言つたので、老君も今は强て拒みかね、足下は一體何を以て左樣に明かに愚翁を知て居らるゝかと問ひ尋ねた。其處で尹喜は去年の冬十月天文を按んじて老君が今日此處を通らるゝことを豫め知つた理由を委細包まず物語ると、老君はさも喜ばしさうに點頭き、足下が豫め我を知つた如くに、我も亦已に足下の人と爲りを知つて居る、足下は實に神に通ずる賦を有て居らるるやうてあるが、それてこそ此世も心安く過すことも出來やうと云はれた。是に於て尹喜重ねて大聖の姓名は何といはるゝか、苦しからずば明かし玉へと云ふと、老君曰く、愚翁の姓名は一定して居らぬ、世の開けぬ時から今日まて種々の姓名も呼んて來たので、今一々數へ切れぬ、唯今は姓を李と呼び、字を伯陽といひ、號を老聃と稱して居る。

尹喜是に於て老君を已が官舍に招待し、夫れ〳〵座を設けて種々の供養をなし、恭しく弟子の禮を執て敎を乞ふた。老君も亦尹喜の志を憫んて關に留ること百餘日、盡く內外修練の法を傳へた。

さて老君の御者徐甲は一日百錢の賃銀て今日迄備れて來たが、函谷關までの賃錢を計算すれば已に七百三十萬錢になる都合てあつた。而して彼の西國に

行けば黃金も限りなく得らるゝので、賃銀は十倍にして貰ふから、西國へ着くまては何處へも立寄らぬ約束て此函谷關まて遣て來たのてあるが、さて愈〻其關所近くまて來ると、徐甲は牛に草を食べさせると言て、牛を車から解いて野に放つた。此の時、老君不圖彼の心を試して見やうと思ひ、傍の吉祥草を化して一人の美しい少女となし、徐甲が牛に草を食べさして居る處へ遣し、種々甘い言葉を以て彼に戲れさした。

すると徐甲は全く此美女の色に迷ひ込んて全く前日の約束を忘れ、此處に暫時滯在するやう頻りに老君に說きすゝめた。

然るに徐甲は愈〻關所に到着した時、關所の役人に訴へて老君

から錢を請求した。老君之を見て徐甲に向ひ、汝が已に附隨ふてから今日まで略二百年の餘になるが、本を言へば汝はとうの昔に死すべき人間であつたのを、己が不憫に思つて太玄生符を與へて今日まで生長へしめて居たのである、それの恩をも思はず今此處で己を訟へて無法の貸錢を貪るとは、實に見下げ果てた奴である、よし〳〵左樣の儀ならば今に思ひ知らして遣らうと言ふと、其言葉が未だ終らない中に一枚の符が忽ち徐甲の口中より飛んで出た、そして其符に朱て記された篆字は唯今讀かれたかのやうになほ鮮てあつた。すると、今まで其處に立て居た徐甲は忽ち解體して一塊の白骨となつて了つたので、傍に見て居た尹喜は不憫に思ひ、種々と老君の怒を宥め、再び徐甲を蘇生せしむるやうに懇願したので、老君も怒漸く解け、再び太玄生符を徐甲の白骨の上に投げて遣ると、不思議や、彼は忽ち舊の如く生き返つた。其處で尹喜は彼に約束通りの貸銀を拂ひ種々と勞つた上彼を關所から還して遣つた。

或日老君尹喜に向て云ふやう、吾初め西方に一聖人があつて竺乾を敎化しつつあることを汝に告げたが、其所謂聖人とは誰あらう、即ち斯く云ふ自分のことである。然るに吾今仙期漸く滿ちて、再び神に還り、仙化して淸寂の境に入らうと思ふので暫時汝とも別れねばならぬ。尹喜之れを聞て大に別を惜しみ、ともに何處までも一所にと哀願したけれど、老君は吾天地の外に遊び、冥窈の間に逍遙するからには、昏々溟々、上は限りなく高く下は窮なく深く、今日は彼處にあるかと思へば、明日は此處に現はれ四維八極の間これと云て一定の住家もなく、神に任せて飄流する身であれば、假令汝が今吾に隨ふと思つた所で、俗緣未だ身を離れぬ間は如何しても吾に隨ふて行くことを許さないといつて、少許も聽き入れなかつたが、やがて又言葉を繼て、熟々汝が骨相を觀るに無爲の妙道に合して居て、遠からず仙道の妙果を得らるゝであらうから、尙ほ一層體を煉り神を養ひ暫時此世にあつて洽ねく敎化を行はれた方がよいと告げて、道德經五千言を彼に授け、更めて暫ひをたてゝ、今より千日經つた時に獨の靑羊といふ市に行て再び吾を尋ねて見よと言訖るや、身を一搖り動かすと、老君の身體は早くも雲の上に浮き上り、面から五色の光明を放ち、肌からは燦然たる金光を放つて、冉々と昇天して了つた。其時五色の光燿々として館舍に滿ち、世は恰かも一時光明界に變したやうであつたが、稍〻良久して後其光漸々に消えて了つた。そして又此日諸國の河水汎濫し、山川夥しく鳴動し、五色の光天に現はれて太微宮を貫き、其餘

光洽ねく四方に照し渡つたといふことだ。

扨て是より尹喜は心に深く老君の戒を守つて專心に道を修めて居たが、一日國を治め身を修むること及び奢を去り、欲を滅することについて、老君が曾て自分に語つた所の大要を書き記して三十六章となし、名づけて西昇經といつた。此後彼は一切の俗緣を斷切て、三年の間精神を修煉することに潛めたので其道大に進み、略其玄妙の奥に達することを得だ。其處で彼は再び筆をとつて書九篇を著し、關尹子と題した。

頃は正に丁己の歳であつたが、數へれば老君に別れてから丁度千日目に當て居るので、約束通り彼は蜀の青羊に行いて、潛かに老君を尋ねて居た。是より先き老君は甲寅の年に昇天したが、乙卯の歳に再び太微宮を去て人間界に降り、蜀の國の大官李氏といふものゝ妻の腹を借りて此世に生れて來た。そして又豫め一頭の青龍を青色の羊と化し、常に自分の側に置いて護衞せしめた。處が一日此羊が忽ち何處へか消え失せたので、一家の心配一方ならず、早速一人の童子を遣して市中を尋ね求めさした。此時丁度尹喜は蜀に到て青羊市を尋ねたけれど所在分らず、甚だ困却して居た時であつたが、路に件の童子が一頭の青羊を

牽いて家へ歸るのに出逢ひ、忽ち釋然として心に悟て思ふには、今此處に青羊が居るのを見ると、察するに青羊市とは此町を指したので、老君が約束せられたのも恐らくは此處であらうと思ひ、件の童子に向て汝は羊を連れて何處へ往く積りかと尋ねると、童子は訝しさうに彼を眺めて居たが、暫時して後、自分の主人の細君が此頃一人の男子を生み、此羊をも非常に可愛がつて居た所が、二三日前此羊が突然見えなくなると同時に、赤兒が啼き悲んで困るので、今漸々尋ね當てゝ一所に連れて歸る所であると答へた。尹喜之れを聞て心に早くも其赤兒の老君の再生であることを悟り、件の童子に向つて、若し家に歸つたなら其赤兒に尹喜が見えたと告げて呉れと賴んだ。

さて件の童子は何心なく家へ歸て來て、主人に斯樣々々と事の概略を告げ、彼の赤兒に向て尹喜に逢つた由を話すと、彼の赤兒は突然床から起き上り、身を一搖り搖ると、忽ち丈け數十尺の巨人となり、身より白金の光を放ち灼燦として四邊を照らし、頭には七曜の冠を戴き、身に晨精の衣を着、脊に九色に彩つた帔（うはぎ）を被て、蓮花の臺の上に坐りながら、驚き騷ぐ家人を制して、自分は太上老君て別に怪しい者て無いことを示け、尹喜を膝近く呼び寄せて、吾向（さき）に汝の乞を斥けて此

玉子

世に留めて置いたのは、汝吾に道を學んで仙術の功を積むこと久しいとは言ひながら、俗緣未だ身を離れず、昇天の時機も程遠いと思つたからである。然るに今や汝は身を養ひ氣を煉り、其道奥妙を極めて居て心身共に漸く俗緣を脫して、神光自つと身に添つて來て居る。今こそ汝が望を滿たして遣らうと言ひ終ると、口に呪文を唱へて三界の諸の眞人を召び寄せた。此時諸天に在す諸々の帝君を初として十方の神王及び諸の仙衆、袖をつらね袂を接べて空に浮び出て、名名手に香花を執て地上に降り來り、老君の前に跼つて謹んで其命を承つた。其時老君は五老上帝と四極監眞とに命じて尹喜に玉冊金文を授け、文始先生の尊號を奉り、無上眞人の位に任じ、紫芙蓉の冠、飛青の羽裳、紅色の褊衣、羅紋の黃綬、九色の笏等を賜ひて二十四天王の上に居らしめ、八萬の仙士を統轄せしめた。又彼の李氏の家族二百餘人は即時に仙術を得て老君と一所に光明を放つて昇天して了つた。

玉子

玉子姓は章、名は震、南郡の人である。幼少の時分から書を讀んで諸子百家の道に通して居た。周の幽王彼が名を聞いて、使を遣して招く事度々であつたけれども遂に其召に應しなかつた。そして常に嘆して云ふには、世人は但た富貴を貪て我々が天から稟けた大切の性を養ふ事を知らない、假令黃金の山を積み、位人臣を極むるとも、此三寸の息絕えて命脈永く絕て了へば、矢張り白骨の身と化して、一片の墓碑に其名を刻まれる丈けだ。左樣なつて了へば、折角骨を折て貯へた財產も何の益にたゝぬ。それよりも仙術を學んで、齡千萬年の長壽を保つ方が幾何優つて居るか知れぬと。仍て長桑子に從て黃老の道を研究し、道書百餘篇を著したが、其後崆峒山に上つて仙丹を煉り、

玉子

白日昇天して了つた。

扨て彼が神通の宏大な事は非常なものであつた。或ば風雨、迅雷、雲霧等を起して家屋を覆し、大木を折る、或は又一本の草、一片の石を化して種々な動物となし、それを又自分の思ふ通りに驅使する。左樣かと思ふと又自分の一身を變して數百千人の姿となすこともあつた。又空中を飛行すること自由自在で、河を渡り海を超え、口に水を含んで吐き出せば、其水玉が忽地數百の珠と變じ珊々として地に落つ。或は又息を閉ぢて數十日間全く死んだと同樣になり、他人が力を込めて之を動かせど彼の身體は千斤の重みがあつて寸許も動かない。或は又身體が伸びた儘で少しも屈せず、或は屈した儘で少許も伸びないこともある。そして數十日經て俄かに息吹き返して再び起上るに、平生と少しも變つた所がなかつた。又多くの弟子を引連れて他へ行く事がある時には、泥を丸めて馬と化せしめ、それを弟子の人々へ頒ち與へる。其時弟子共各々目を閉ぢて居ると、件の馬は一日千里も驅ける通力があつて、數十里の遠い道も瞬間に達することが出來た。玉子又口を開くと五色の烟が忽ち數丈の高さに立ち上る、又手を擧げて空中を飛んで居る鳥を指すと、其鳥が忽ち地上に墮ちて來る。又川の淵に

立て符を水中に投げ込むと、其水に住んで居る魚鼈の類が皆自づと岸へ上つて來る。又諸の弟子共に、眞の短時間だけれど千里の遠い處にある物を明かに眼に見せしむることもある。又器物に水を盛り、之れを手にさゝげて魁星（北斗七星の中第一位より第四位迄の星を指す）と魁星との間に此器物を著けて、扨て一口の水を含んで空中に吐き出すと、此水の上に赤色の光が現はれて燦々と燃え上る、そして此器中の水を以て病を治すれば如何なる難病でも立處に直る。即ち病の內に在るものは此水に浴するのである。

太陽子

太陽子は姓を離といひ、名を明といふ、元と玉子の友人であるが、玉子已に仙道を得たのを見て更に弟子の禮をとつて彼に從ひ、少しも懈怠の容子なく、孜々として勉強して居た。然し彼は平生酒を好み、醉ひ倒れて前後を忘却すること度度あつたので、之れが爲めに常に玉子から譴責されて居た。

太陽子は最も五行の道に通達し、肌膚豐肥にして顏色艷々しく、齡三百餘歲になつたけれど其健かなること少壯の人と少しも變らなかつたが、唯餘り酒を嗜

むのて髮髭悉く白く、全く嬰兒の姿となることが出來なかつたさうてある。

玉子或日彼に向ひ、汝身を理め姓を養ふて宜しく衆の仙聖の龜範となるべきを、酒の爲めに昏迷して功業兎角修らず、斯様にては假令千百歳の壽を得るとも竟には死滅することを免れまい、斯様なことは凡庸の人ても能く知て居ることて、苟くも達人ともいはるゝ程のものは決して爲さぬ所てあると言つて、堅く其素行の正しからぬのを戒めたので、後には彼も大に悔ひ改め、一心不亂に道を修むるやうになつたが、其後終に昇天して了つた。彼が著書に七寶樹の法を說いたものがある。これは、深く道の大要を得て居るので世間に廣く用ゐられて居る。其後彼は時々此人間界に現はれて來て居たが、凡そ彼が人間界に留り居る年數は一回大抵五百餘歳てあつたさうてある。

太陰女

太陰女姓は盧、名は全、才智人に優れて居た。平生玉子の道を喜んて、頗る其法に精しかつたが、尙ほ進んて道を修めんと志したけれども、是れと思ふ善い師を見當らぬので、一策を案じ、路傍に一軒の酒店を開き、毎日店に出入する人々を觀

察して、久しい間密かに明師を探して居る處へ、會〻太陽子が其處を通りかゝつて酒を飲むことがあつた。彼は店の主婦が如何にも禮節が正しく、詞遣ひも何處となく閑雅て居るのを見て、獨り心の中に嘆賞して居ると、また太陰女に於ては物蔭から太陽子の風采擧動の頗る常人と異なつて居るのを觀て大に喜び、先づ試みに妹を遣し、慇懃に禮を正して問はしめていふやう、土の數は幾何てあるか、太陽子曰く、幾何てあるか、自分にも分らない、然し南の數は三、北の數は五、東の數は九、西の數は七、中央の數は一てあるから、恐らくは一が土の數てもあらうかと。妹之れを聽いて姉の太陰女に囁いていふやう、彼の客人は世にも稀なる賢人てある、妾初め一つの事を聞いたのに對して五つの事を答へた。

是に於て太陰女は彼を座敷に請じ入れ、厚く饗應して後敎を乞ふた。其時太陽子は卿と我と、共に天帝に仕へ、俱に神光の水を飲み、又共に玉子の道を學んて居るといふのは如何やら宿世の仙緣あるやうに思はるゝと言て、彼女に道の大要と仙丹を煉るの法とを授けた。

斯くて太陰女は端なくも太陽子に逢ふて道の秘訣を授けられ、年二百歳の時漸く仙道を得たが、其顏色美しくして猶ほ十四五歳の處女のやうてあつたといふ。

ふことだ。

太玄女

太玄女姓は顓、名は和、年若い時分に夫を失つたが、其後一人の術者が有て、或日太玄女親子のものを相て、二人のもの共に天死するの相があると云つたので、太玄女之を聽いて痛く自分等の不幸を嘆き、是から志を立てゝ仙道を學び、刻苦勉勵して玉子の術に通ずることを得た。玉子の術は變通自在、神化萬端にして、水の中に入れども衣服が濡るゝやうな事がなく、極寒の時に單衣を着て氷の上に臥して居ても身凍えるといふ事がない、又官府、宮殿、城市、家屋等の、建物でも、一度指せば忽然として他の處に移り、再び之れを指すと復た舊の所に還て來る、又門戸櫃樞等總て關籥がかゝつて堅く錠が下されて居るものでも、一度之れを指すと忽ち錠が自から開く、又山を指すと山が崩れ、樹を指すと樹が立處に枯死し、更に再び是等の物を指すと忽ち復た舊の如うになる。

昔て或日のこと、彼女は弟子數人を引連れて或山中で日に暮れられた事があつた。此時彼女は持て居た杖で側の石をハタと擊つと、不思議や件の石忽ち左

右へサッと打開くのを視れば、それは實に美事な石門であつた。中へ入て四邊を觀ると、美々しい室が幾何も有て、中に床几、帷帳等の日用品を始めとして、厨屋には山海の珍味が堆高く積み重ねられて居るので、數多の弟子共は感嘆の餘り姑らくは呆然として其處に立て居た。

彼女は又極めて小い物を忽ち大さ山の如き物と變じ、或は極めて大きい物を忽ち毫末の如き微細のものと化し、或は野火が一面に野原を包んで、焔煙天に漲る時、ハッと息を噓けば、件の猛火一時に消え失せる、又盛んに燃えて居る炎火の中に入ても衣服が少しも焦けない。又老人に變じたり、或は小兒に變じたり、或は牛馬に變じたり其神變の自在なること實に驚くべき程で、三十六の秘術は悉く通じ曉らめて居た。そして顏色は年を老るに隨て益美しくなり、髮は漆を欺て了つた。

墨子

墨子は宋の國の人て名を翟をいひ、宋に仕へて大夫と爲て居た。日頃から好

んで群書を繙き、傍ら道術を修めて居たが、後書十篇を著し題して墨子といつた。

此處に公輸般といふものが居て、楚王の爲めに雲梯を作て宋の國を攻めやうとした時、墨子楚王に利害を說いて一時其軍を罷めさした。年八十二の時世を厭ひ、官を辭し、門を閉ぢて專ら仙道を修め、夜となく、晝となく、始終思を仙界に趨せて、一向神仙の來迎を待ち設けて居たが、其後夜になると左右の山で何人か頻りと書を讀む聲が聞え、床に入てから又何人の仕業とも知れず、毎夜來て自分の身に衣を被せるものがある。墨子初めは然うとも別に氣が付かなかつたが、度重なる中に漸うそれと覺り、或夜潛かに寢息を殺して伺ひ居ると、果して一人の男が自分の室の中へ這入て來た。其處で墨子は、急に起上り禮を正しくして、自分の素志を打明け、道術を敎へて呉れるやう懇々と願つた。其時件の神人曰ふやう、汝の容貌を見るに仙骨自ら備て居て、其上なほ道を求めやうとする志があるのを見たので、毎夜斯うやつて汝の許へ來ては潛かに候て居るのである。扨て汝は一體如何んな仙術を求めやうとして居るのであるか。之れを聞て墨子は千歲の長き壽を得て天地と共と榮える身とならば、それて此身の望は足りるのである由を答へると、件の神人は喜んで素書併に朱英丸の方、道靈敎戒及び五行變化總て三十五卷を授けた。

墨子は件の諸書を日夜研究して大に得る所があつたので、更に自ら五行記五卷を撰集した。漢の武帝の時楊遂といふ使者を遣し、束帛、璧等の種々の贈物を以て墨子を召し抱へやうとしたが、墨子は飽くまで其主義を守て仕へなかつた。其時墨子は已に數百歲の老人であつたにも拘はらず、其顏色を見るとまだ五六十歲の人のやうで、少しも衰へて居なかつた。そして平生泰山、衡山、華山、恒山、嵩山の五岳を周遊し歩いて決して、一處に止ることはなかつたといふことだ。

控鶴仙人

控鶴仙人、名を屬仁といひ、天台の元虛老君の第七番目の子で、武夷山に上つて仙人の名簿を校定して居たが、平生鶴を伴ひて寸間も身邊を離さなかつた。

其時魏の王子羨龍潭の上で雨を禱ることがあつたが、曾々其處を仙人が通りかゝり、魏王の風骨世の常の者と異て居るのを見て、侍者の何鳳兒といふものを天台に遣して仙籍を取り寄せ、それを檢べて觀ると果せるかな、其中に子羨及び其臣下の張湛等十數人の名が記してあるので、魏王を始め張湛等十數人に胡麻

の飯、及び九品丹書を授けた。

此仙人は平生酒を好み、時々其度を過すことがあつたので、天帝の咎をうけ、武夷山に謫せられて其處に留て居たのであるが、其後八百年を經て漸々罪を許され、遂に再び昇天することを得た。

涉正

涉正字は玄眞といひ、巴東の人である漢の末年秦の始皇の頃の事を話すに、恰も目に睹るやうに明かであつた。或日のこと涉正彼は二十人の弟子を引連れて吳の國へ行つたが、平生彼は目を

閉ぢて居て路を歩くにも開くことがない。二十年許り彼に就き隨て居た弟子共てさへ、曾て彼が目を開いたのを見た事がなかつた。處が一人の弟子が居て此事を不思議に思ひ、或日折を覗ふて強ひて彼の眼を一目見せて吳れと請ふた時涉正は快く承諾して一時にカット目を開くと不思議や、其時百雷の響がして、電光の如き光が目の中から閃めき出たので、件の弟子は不思身を慄めて地に伏した儘暫時は顏も擧げ得なかつた。其後涉正は昇天して了つたが、其時平生使用して居た日用品は殘らず弟子共に頒ち與へて遣つた。其後李八百といふ者が居て、涉正は昇天した時丁度四百歳になつて居る筈てあると、或人に話したさうてある。

司馬季主

司馬季主は楚の人てある。初め長安の市中に出て賣卜を業として居たが、其後委羽山の大有宮に入つて西靈子都を師とし、霞を吸ひ露を飲んて長壽を保ち又身を隱し姿を變するの術を學んだ。

彼は漆のやうな眞黒な鬚が三尺程生え延びて居た。

彼其後弟子の范零子を伴ひて常山の石室に行き、其處に暫時滯在して居たが、其石室の傍に一の石匱（いしびつ）があつた。そして季主が其石室を出て外に遊ばうとする時は、何時も范零子に此石匱を守らしめ、自分の留守中其中を開いて見ることを堅く禁じて居た。處が或日此范零子季主の留守中潜かに其石匱の蓋をとつて開て見ると、自分の故郷の兩親及兄弟の面影が現々と中に映して居るのを見て、急に自分の罪を後悔し、季主の跡を追ひかけ不殘自分の罪を謝したことがあつた。然るに其後數年を經て彼再び一箇の銅匱を守ることがあつたが、復た曩の戒を破て其銅匱を打開き見ると、復た前の如く故郷の兩親の顏が映て居つた。それが爲めに彼の心常に動いて居て遂に道を得る事が出來なかつた。

其後季主昇天した時に枕を夜具に包んでそれを自分の姿に變じさしたので、家人共は別にそうとは氣も付かず、其枕と夜具とを彼が眞の屍體と思つて、之れを蜀山の南に葬つたさうである。

朱璜

朱璜は廣陵の人である。幼少の時毒瘕を病んで甚だ難澁し、唯（する）山の道士阮丘

に就て其治療を受けた。其時阮丘は若し都合よく腹中の三尺（青姑、白姑、血姑といふて人身を害する毒蟲である、其精しい事は蘇林の傳の處に說いてある）を除き去ることが出來たら更に眞人の藥を與へて長命することを得せしめてやらうと約し、朱璜は又、若しお蔭を以て病が癒ることが出來たら、先生の從僕となつて二十年間御奉公申しようと誓つた。

其處で阮丘は朱璜に七物の藥を與へ、毎日九粒づゝ服せしめ、斯樣にして百日經つと、肝汁のやうなもの數斗計りを便下した。それから更に身體を保養すること數十日計りあつて、身體が非常に肥え太り、精神も爽に氣も晴々として來た。其處で又老君の黃庭經を與へて毎日それを讀ましたが三遍計り繰返すると遂に其大意を了解して了つた。其處で彼等兩人は共に浮陽山の玉女の祠に入て其處に八十年ばかり居たが、朱黃の白髮は盡く再び黑くなり、鬚髯も俄かに三尺餘延びてあつた。其後朱黃は家に歸て數年間留て居たが、復た何處へか立去て了つた。武帝の末になほ生きて居たといふ話だ。

王次仲

王次仲は何處の人であるか詳でない。或年泉漾山に庵室を構へて其處に住

んて居たが、平生書を能くし、從來の篆書を廢して隷書の一體を創めた。そして彼の子孫は代々其遺風を繼て彼の筆法を世に傳へることに努めて居た。

秦の始皇帝彼の名を聞て召抱へんと思ひ、屢々使を遣て彼を朝廷へ召されたけれど、彼は少しも應ずる氣色が無かつたので、始皇帝も遂に腹を立て、或日使者に申含めて、彼を斬殺さしめようとした。其時王次仲は俄かに身を大驚と變じ、翼を張り、嘴を鳴らし、今にも飛び去らん氣勢を示したので、使者之れを見て大に驚き、急に大地に手をついて、今君に飛去られては自分は二度と朝廷へ立歸ることが出來ない、此處は何んとか致して自分の顏がたつやうに取計て呉れまいかと、涙を流して哀願した。王次仲之れを聞て憫然に思ひ、然らば之れを持ち歸て記にせよと云て、翅の羽を三筋拔きとつて使者へ渡した。

扨て使者は件の羽を大切に所持して朝廷へ立歸り、斯々の次第と一伍四什を物語り、最後に件の羽を取出して皇帝に差示したので、皇帝も漸う怒が解け、彼を召寄することもそれ限りて止めになつて了つた。其處て後世彼の王次仲の接んて居た處を今も落翮山と稱して居る。

徐福

徐福字は君房といひ、秦の道士である。或時何故とも知らず、路行く人毎に毒氣にあたりて俄かに卒倒し、死骸が累々として塗の上に積み、親に別れ、子に別れた者共の嘆き悲しむ聲四方に聞えて、此先如何な事が起るかと人々安き心もなかつた。其時何處よりか烏の如き鳥數十羽飛び來り、口々に一莖の草を啣へて、それを死人の顏の上に覆ひ被せると、不思議や、死人は何れも皆息吹き返して蘇生した。始皇帝此由を聞き、急ぎ件の草を持て、人を鬼谷先生の許へ遣して其名を問はしめた處、是から東に當て海中に十の洲がある、其中の祖洲といふ處に不死の草があつて、瓊田の中に生える。それは養神芝といつて、簇々と叢生する草で、其葉は薤に似て居る。若し其草の一株を取て死人の顏に當れば死人忽ちに蘇返ると聞て居たが、今此草を見るに全く其不死の草に相違ないといふ事であつた。

其處で始皇帝は徐福を遣して、彼の祖洲といふ處を尋ねしめると、幾年待てども音沙汰が無く、遂に其生死の程も分らなくなつたが、其後沈義といふ者仙道を

徐福

得た時、徐福が太上老君の使者となり、白虎の車に乘て沈羲を迎に來たので、世人は此處で始めて徐福が仙人となつた事を知つたのである。

唐の開元年間に惡疫天下に流行し、人民の之れに罹るものが多かつたが、一度此病にかゝれば半身が眞黒になつて自由がきかなくなる。當時の名醫張上客等皇帝の命をうけて其病を療治したけれど少しも效能がなかつた。其處で昔からの言傳によれば海中に一人の神仙が住んで居て、此者に祈れば如何なる難病でも立處に治るといふ事であつたから、今は其の神仙の力を借りる外に途がないと、徐君とは秦の始皇帝に仕へた徐福の事であると告げたので、彼の人々は大に喜び、直ちに徐君の許に到り、慇懃に禮を厚うして療治を求めると、徐君は快く承諾し、先づ飯を出して此人々に食はしめた。ところが其飯を盛る器物が甚だ小さかつたので、人々は心中に頗る不平に思て居たが、徐君は早くも之れを悟て、汝達は此器物の小さいのを面白からず思て居られやうが、然し其中のものを食盡せるならば頗る結構だと言つたので、人々は頻りに貪り食つたが、成る程一杯食べて見ると何時しか腹も一杯になつた。其處で徐君は再び其器に酒を盛て飲ましめたが、人々は皆程よく醉ふて其日は其處に滯留した。翌日になると徐君は黒い丸藥を與へて飲ましたが、すると黒い水液が大小便と一所に流れ出て彼の不思議な病は忽地平癒して了つた。

其時彼の人々は厚く徐君に禮を述べ、更に以後永く徐君の許に留めて置て呉れるやうに、呉々も懇願したけれど、徐君は汝達は今夫々の祿位を有て居て、未だ俗緣が切れて居らないから此處に留り居ることは出來ぬ、東風を待て再び本國へ歸るがよい、扨て此處に一の藥がある、之れを飲めば如何な病氣でも直ちに治るから之れを持て行いて病に苦んで居る人々を救つて遣れと言て、黄色の藥を一袋づゝ名々に與へた。其處て彼の人々は名殘は惜しけれど、徐君の言ふ儘に、東風を待て某日其處を出立し、數日を經て再び先の登州へ到着し、藥を添へて委

細を朝廷へ奏問したので玄宗皇帝は試みに右の藥を以て病に苦んで居る人々に飲ましめて見るに、各れも皆立處に平癒してあつたさうである。

安期生

安期生は琅琊阜鄕の人である、平生或海邊に出て藥を賣て居たが、時の人々は皆彼を呼んで千歲公と言て居た。秦の始皇帝彼の賢明であることを聞て宮中に呼びよせ、共に物語ること三晝夜、安期生が歸る時に金帛數萬を贈られたが、盡く阜鄕亭を出る時彼は其贈られた品々を皆其處に放

置り棄て、更に赤玉の舄一足と書一卷とを殘し、是れから千年經つたら己を再び蓬萊山の麓に尋ねるやうに皇帝へ傳言して、其儘其處を立去つた。是に於て始皇帝は使者數人を遣して、海上遙かに彼の跡を尋ねしめたが、舟まだ蓬萊山に至らない中に、大風波に逢ふて空しく歸て來た。其處て新に阜鄕亭の側と他の海邊十箇處とに祠を立て、永く彼を祀てあつた。

茅盈

茅盈字は叔申といひ、茅濛の玄孫てある。弟は固といひ、字を季偉といふ。其次の弟は衷といひ、字を思和といふ。盈は漢の景帝中元五年に生れたが、小さい時から餘程尋常の小兒と異て居て、浮世の事を厭ふて清虛神仙の道を喜び、年十八の時、家を飛出して恒山に入り、禾を食して專心に修業を積て居たが、後王君に從て更に道を學び、西の方龜山に至て西王母に謁見し、太極玄眞經を授けられ、年四十九歲の時恒山に歸て來て北の谷に隱れて居た。此時彼の兩親はなほ達者て生存して居たが、父は彼が久しく家を出て歸らないのを憤り、杖を擧げて彼を擊たんとした時、彼は厚く己が罪を謝し、且つ自分は今や仙人の仲間に入て居る

ので、自分の身體は天帝の兵士が常に護衞して居るから、若し父上が誤て自分を擊つやうな事てもあれば忽ち天兵の咎を受け、自分はなほ此上に不幸の罪を重ねる譯てあるから、自分を笞つことは堅く思ひ止つて呉れと戒めた。然し、父は其言の眞否を試さんと思ひ、故に劇しく彼を笞つと、不思議や杖忽ち折れて數十段となり、其折れた杖の片が矢のやうに四方八方に飛び散つて、壁に當れば壁を穿ち、柱に當れば柱を貫き、此先如何な事になるか測られぬので、流石の父も俄かに怖氣がついて擊つ事を止めた。

其後弟の固、衷の二人は立身出世して、固は武威の太守となり、衷は西河の太守となつたので、鄉里の人々が數百人集つて盛に送別の宴會を開いたことがあつた。其時盈も亦其座敷に交つて居たが、其處に集て來た人々に向ひ、自分は今何の官役にも就いては居ないが、來年の四月三日愈〻昇天する時になれば、其儀式の盛なことはとても今日と比べものにはなるまいと言つたが、其時誰一人として彼の言葉を信ずるものはなかつた。それは丁度宣帝の初元四年である。

扨て愈〻翌年の四月三日になると、盈の家の門前にある數丁歩程の場所は誰が遣つたと無く自然に地鎭が出來て、草が綺麗に苅り取られ、其上に青繒の幄が張

りめぐらして、其下には一面に白い毛氈が布きつめられ、數百人位の席が自然に設けられて居た。其時近隣の人々が集て來て、盈の爲めに別れの酒宴を始めると、誰も居ないのに杯や盤や皿が自然に飛んで來て座敷の眞中へ置き並べられ、香りの高い酒、見も聞きもせぬ珍らしい殽、美しい果物が山程積み重ねられ、歌舞音樂の音が何處からとも聞えて來て、蘭麝の香數里の外までも充滿した。そして、少頃すると朱衣玉帶をつけた立派な天官が數百人、旌旗をかざし、甲仗を携へた天兵を前後に打隨へ、徐々と天から降りて來て、盈をば立派に飾つた仙車にのせ、再び冉々と天上に昇て了つた。

此時二人の弟は各其任地にあつて職を執て居たが、兄の盈が愈〻昇天し去ると聞て、直に官を辭して家へ歸て來て、東山といふ處て兄の盈に對面した。其時盈は二人の弟を見て今目が醒めても最早晩い、それに大分年も老て居るので仙術を得る事が殆んど望無い、縱ひ仙術を得たとしても、地仙になつて此世に留まる位なものだと言て、二人に延年不死の法を授け、更に其後三年許り不淨を遠けて神を煉らしめた後、これに道の秘訣を授けて明堂玄眞の氣を保存することを得せしめ、又九轉の還丹と神方とを授け、各之れを服して仙人となる事を得て茅

山に留り居らしめた。世に之れを三人の茅眞君と稱して居る。

劉安

淮南王劉安は漢の高帝の孫で、平生仙術を好んで內書二十一篇を著し、次に又鴻寶萬年二卷を著して變化の道を說いた。

或日八人の老人が、劉安の門前に遣て來て面會を乞ふた時、門番の男が彼等に向て我主人が、第一に求めて居らるゝものは、疾の根を斷ちて不老不死の長壽を得る道てある。第二は學博く識高き賢者てある。第三に力鼎を扛くるに足り、勇は暴虎を制するに足る程の豪傑てある。此三つの者を兼ね有して居るものてなければ、假令面會したればとて到底採用さるゝ望がないから、一層此儘歸られた方がよからうと言ふと、之れを聞た八人の老人共は互に笑ていふやう、汝は我々の年老て何の役にも立ちさうに見えないので左樣申すのてあらうが、然し我等は王が賢者を敬ふて厚く士人を遇するといふ事を聞たので、態々來て面會を求むるのてある。夫れ賢主は一藝の爲めに其人を棄てずといつて、苟くも多少の才藝に秀て居るものは、其種類を問はずして召し抱へ、其才能に應じて夫々

拔擢任用するといふ事を聞て居る。今我々は年も老り其上才淺く能少くして王が望んて居る三つの資格を有しては居ないにもしろ、兎にも角にも一應名を通して面會するやうに取計て呉れ、其上て奈何成らうと、それは又諦らめやうもある。若し王が少年だから有道の者てあると謂ひ、老人だから無能のものに極て居ると思召すなら、致方もないが、恐らく汝の主人はそれ程物の道理を辨へぬ者てもあるまい。

扨て件の八人の老人がかく言ひ畢ると忽ち變して各れも皆十五六歲の美少年となつた。之れを見た門番は大に驚き急ぎ王の許に行いて一伍四什を話すと、王は之れを聞て履を穿く遑

がなかつたので、跣足のまゝ急ぎ出て迎へ、早速八人の老翁を思仙臺に招待し、錦綺の帷を垂れ、象牙の床を設け、百和の香を燔き、金玉の几を備へて厚く之れを遇し、自分は弟子の穿く屐を着け、恭しく北面して謹んで教を乞ふた。

其時件の八人は復た元の老人と成て、さて云ふやう、吾々は豫て王の道を好みなさるゝといふ事を聞て、態々此處まで出て參つたものであるが、扨て王の求めなさるゝものは、如何なるものであるか、吾々の一人は神通廣大であつて、坐して呼べば風雨俄かに到り、起て呼べば雲霧直ちに起り、日月を藏し、天地を掩ふ、又地上に其形を晝けば、それが忽ち渺茫たる溟海となり、土砂を撮み取て平地に置けば、それが直ちにして峨々たる山岳となる。今一人は山を崩し壑を埋め、或は水の流を止めて淵の底を涸らし、或は龍虎を制御し鬼神を使役する等何事でも思ふ通りにならぬものはない。今一人は變化の術に通じて、形を換へること掌を反すよりも易く、又隱顯出沒意のまゝになすことが出來る。今一人は虛に乘て空を涉る事平地を行くよりも易く、針程の孔隙さへあれば、如何なる處へも出入自在で、千里の遠い處でも一瞬の間に往復することが出來る。今一人は火に入つても身體が燒けず水に入つても衣服が濡れず、如何なる劒でも矢でも其肌膚を

傷つくることが出來ない、そして又如何なる極寒の冬でも其身凍えるといふことなく、如何なる酷暑の夏でも其身汗ばむといふことがない。今一人は變化自在の道に通じて居て、天地間に有りと有らゆる總ての物に化けることが出來る、又山川丘陵を此方より彼方へ轉徙することも出來る。今一人は一切の厄神病魔を禁厭して治ねく人民の害毒を除き、又能く年を延ばし壽を增して不老不死の藥を得さすことが出來る。今一人は泥を煎して金となし、鉛を煅て銀となし、水て八石を煉て珠と變じ、又龍に乘り雲に駕して、高く九天の上に遊ぶことが出來る。以上は我々八人の有て居る仙術の大要であるが、孰れても王の氣に召したものを求めなさい、我々は喜んで其玄術の秘訣を敎へ申さう。王之れを聞て大に喜び、直ちに酒を出して厚く彼等を饗應し、一々其技を試みさせると、果して皆其言ふ通てあつた。其處で彼八人の道士は王に丹經及び三十六の水銀を煉る法を授けた。

扨て愈々仙藥も、煉り上つて、未だそれを服しない中に、偶然とした災難が劉安の身に起つた、といふのは斯うてある。劉安に一人の子があつて遷と呼ぶ。平生劒術を好んであつたが、郎中の雷被といふものと劒に劒術の試合をなすと、雷

被は誤て遷を斬り殺したので、雷被は自分が誅せらるゝのを懼れ、皇帝に劉安が謀逆を企て居ると讒言した。其處で彼の八人の道士は劉安に是も畢竟は天帝が王を呼び迎へる機會が來たのであるからと言て、强て此處を逃去るやうに說きすゝめ、俱に一所に山へ遁れ、其處で八人の道士は天地を祭て金を地中に埋め、劉安をつれて終に昇天して了つた。

此八公と劉安が踐んだ所の石は皆其處丈窪んで、今に其足跡が殘て居るといふことだ。其時其處へ放り棄てた藥鼎の中の殘物を鷄や、犬共が舐つたので、彼等もまた仙氣を得て同じく昇天して了つた。仍て其日雲中に鷄の鳴く聲や、犬が吠える音が頻りに聞えてあつたといふ事だ。又一說によると、劉安は鴻寶萬年の術を得て不老不死の仙人となり、後尸解して昇天し、太極眞人の位を授けられたさうである。

緱仙姑

緱仙姑は長沙の人であるが、衡山に入て道を修め、年八十歲になつても相變らず孤獨の生活を送て居た。其住宅の傍にある山は南岳といつて、魏夫人の仙壇が其處にある。或日一羽の青鳥が飛んで來て自分は南岳夫人の使であるが、夫人は汝が一生懸命になつて道を修めて居らるゝのを聞て、大層感服なされ、自分に命じて姑らく汝の許に一所に居るやうにとの事であるから、自分は今此處へ遣て來たのであることを告げ、其儘緱仙姑の許に留て居た。そして、誰れか此山に遊びに來るものがある場合には、此青鳥は先づ豫め其者の姓名を彼に告げ知らして居た。處が或日彼に向つて、今晩暴客が來て汝を脅かすかも知れぬが、決して心配には及ばぬと告げた。果して夜になると一群の律僧手に〳〵松火を持ち、白刃を閃かして彼を殺害しようと山へ上つて來た。其時緱仙姑は默て床の上に坐て居たが、僧侶共の眼にはそれが少しも見えなかつたので、彼等は口々に惡口雜言を吐き散らし、一度に外へ立去て了つた。然るに其山を下る途中で一頭の猛虎に出遇ひ、無殘にも彼等は皆嚙み殺されて了つた。

其後緱仙姑は湖南といふ處に徙り、其後又九疑山に隱れたが、其行衞が遂に分らなくなつた。

蘇耽

蘇耽は郴(ひん)の人(一書には蘇仙公とし桂陽の人であるとして居る)である。母に仕へて極めて孝行であつたが、或日異人に遇ふて潜に仙術を授けられた。其後朝夕母に給持をする際に、母が鮓を食たいと言へば、毎度も外へ出て鮓を買ふて來て居た。そして何處から買ふて來るかと問へば、毎度も便縣から買ふて來ることを告げて居た。然し便縣といへは此處より幾百里も離れて居る處で、左樣僅の間に往復することが出來ないから、母は始めからそれを怪んで居た。

或日彼は庭に出て頻りと其處を掃除して居るので、母が怪んで其故を尋ねると、自分は今迄母に默て居たけれど、實は潜かに仙道を修業して居たのだ。然るに今や自分の道も漸々成就し、今日上帝が自分を迎に來るから、斯樣に庭を掃き清めて居るのであると答へ、更に母の爲めに一箇の櫃を留めて、欲しいと想ふ物は何でも此中に藏めてある由を告げ、更に明年惡疫が流行するであらうから、其時は庭前の井の水と橘の葉とを煎じて飲めば、如何な病でも立處に治ることを話し、頓(にはか)に上帝の迎を受けて昇天して了つた。

其明年果して惡疫が天下に流行した時、蘇耽の母は彼が願によつて毎日百人餘の生命を救ふことが出來た。其後三年程經ちて蘇耽の母が死んだ時、州の東北に聳えて居る牛脾山の頂に紫雲鬟き、其雲の中で頻りに號哭する聲が聞え、其聲風に散て遠く十里四方に響き渡つた。それを聞た人々は咸(み)なそれは蘇耽の靈が母の死を哭するのであると知つたので、郡守を初めとして近在の人民共件の山に登て厚く其悔を陳べた。而して聲は依然として雲の裡に聞えるけれど、其姿は之れを見ることが出來なかつた。

其處で人々は蘇耽に請ふて、一度姿を現して親しく面謁することを得せしめて呉れるやうに頼むと、蘇耽の聲が爲て、自分が俗寰を去てから大分久濶(しだらく)になるから形貌(かはかたち)も痛く變化して居る。若し現(あらは)に姿を現するならば、恐らくお身達を驚かすであらうと答へた。然し衆は是非姿を見せて呉れと强て請ふたので、然らばと言て、蘇耽は雲の間から顏の半面と右の手とを現はした。見れば一面に細い毛が叢生(はえ)て、何んとも形容することが出來ない、恰(まる)で獸の人間である。

其時蘇耽は人々に遠路を態々此處まで遣て來られた親切を謝し、其お禮として安全な捷徑(ちかみち)を敎へて上げようと言て、其儘其姿が消え失せて了つた。

蘇耽

扨て人民共はいざ山を下りようとすると、忽ち目の前に長い浮橋が現はれて山の頂から大空を横切て直ぐに郡城の壘壁の上へ架け渡された。下を見れば何千丈といふ高さて、山や、丘や、沼や、川は霞の底に蟻垤のやうに小さく見える。其時衆の中に一人の官吏が居て、最初蘇耽から後を振返て見ることを堅く禁せられて居たのを遂ひ忘れて、何心なく背後を振返ると、忽ち脚を脱して彼の浮橋から眞逆様に或溺水の岸に墮落したが、不思議に身に一の傷だに負はなかつた。そして其時彼は一頭の赤龍が空から降て來て件の溺水に入て其姿が忽ち見えなくなるのを見た。

それからといふものは彼の牛脾山の頂に一匹の白馬が現はれて、常に其嶺を往來して居たので、人民共は誰言ふとなく、件の山を呼んて白馬嶺と稱するやうになつた。

其後幾年か經て、或年蘇耽は、一羽の鶴と化して、町の城廓の東北に聳えて居る樓の上に來て止つた時、或人が之れを見て彼を射ると彼は爪を以て樓の板に次のやうな文句を書いて、何處ともなく立ち去つた。そして其痕が恰も漆て書いたやうに鮮かてあつた。

城郭是。人民非。三百甲子一來歸。吾是蘇耽彈我何。

東方朔

東方朔は字を曼倩といひ、平原頗次の人てある。永らく家を出て歸らなかつたので、其兄彼の無情を責めて、汝は永らく家を留守にして漸う今歸て來たが、何一つ自分を慰めるやうな土産物をも持て來ないとは、餘り無情いぢやないがと怨ずると、東方朔はさも訝しさうに兄の顔を眺め、自分は暫く紫泥に行て居たのだが、其處の海中に紫の水があつて自分の衣を汚し

たから、一寸虞淵へ立倚て洗濯して來たのである、自分は今日の朝發て晝歸て來たのだから、何にも宅を永らく留守した譯でも何んでもないと答へてあつたが、然し仙界の一日は即ち俗界の三年に當て居ると昔から言傳へられて居る。

彼が漢の武帝へ上書した文は實に自ら高く稱譽して少しも忌彈る所がなく、如何に彼が自信の堅かつたかゞ分る。其文の大要は斯うだ。愚臣は幼少の時父母に別れ、兄に養はれて漸く成長することを得た。年十二の時書を學び、三年にして洽ねく經史に通し、十五の時擊劍を習ひ、十六の時詩書を學んで、二十二萬言を暗誦し、十九の時孫、呉の兵法及び戰陣に用ゆる鉦鼓等の名を學んで、二十萬言を悉く暗誦することを得た。臣今年二十二歳、身の長九尺三寸、口は珠を陳ねた如うに美しく、齒は貝を編んだやうに綺麗に、勇は昔の孟賁を凌ぎ、戰に臨んで敵を破ること慶忌にも劣らない、そして又淸廉は鮑叔に齊しく、信實は尾生にも優れて居る。斯の如くにして自分は天子の臣となる丈の資格は充分備へて居ることゝ思ふ云々。帝之れを見て大に喜び、早速彼を召し抱へて侍中といふ役に任じた。

彼曾て天子の御前に於て陪食を仰せ付けられた時に、彼は食ひ了つてから餘

つた肉を盡く懷中へ藏ひ込んだので、其汁流れて悉く衣服を汚したことがある。又時々皇帝からして彼に縑帛を下さることがあつたが、すると彼は其品を擔へて家へ歸り、前回に贈られた舊い縑帛をば長安の商家に賣拂ひて、其錢で容貌よき少女を購ふて來ては家に連れ込んで居たが、それも一年經ては又追ひ出して更に新らしい者を連れ込み、天子から下された贈物は皆女の爲めに費して了ふので、時の人々は皆彼を嘲り罵つて居た。然し彼は自分は謂はゞ朝廷の間に世を避けて居る隱者のやうなものであるといつて、世間で何と云ても平氣で濟して居たが、彼は酒を飲んで氣も大分昂ぶる頃になると、常に聲高らかに歌ひ、そして自分は今俗間に埋もれて朝廷の內に世を避けて居るが、此立派な宮殿は自分の一生を托するに先つ不足が無い、然すれば何も苦んで深山の奥や蓬蒿の下に身を遁るゝ必要があらうかと言て居た。

其後彼將に瞑目せんとした時、同舍の者共に向ひ、天下の人々誰一人として自分を知て居るものはない、唯自分を知て居るものは大伍公一人のみだと言はれたので、其後武帝は右の大伍公を召して此事を訊はれると、彼は只知らぬ由を答へた。然し帝は彼が星の卜に長じて居ることを聞かれたので、彼を天文臺に連

れて行き、天を仰で、今諸々の星が各れも皆其位置に在て、一つも缺けて居るものが無いか如何かと問はれると、彼は熟々と星座を眺めて、諸々の星は各れも皆其地位に備て居て一として缺けて居るものはない、唯此處に一つ訝しいのは、四十年計り以來見えて居なかつた歲星（太白星）が、只今再び現はれて居る事であると答へた。

帝此時東方朔が前後十八年の長い間朕の側に居つたにも拘らず、自分は今まで彼が歲星の精であることを知らんで居たのは、何たる愚な事であらうと言はれて、痛く悄氣返て見えられたといふことだ。

衞叔卿

衞叔卿は中山の人である。雲母を服して仙術を得た。漢の儀鳳二年八月壬辰、武帝一人殿上に坐して四方の景色を打眺めて居ると、其處へ忽ち一人の異人が白色の鹿に乘て靜かに空中から下りて來た。年の頃は三十許り、容色美しくして恰かも少年の如く、身に羽衣を着、頭に星冠を戴て居る。皇帝驚いて其名を尋ねると、件の男は中山の衞叔卿であることを答へたので、皇帝はそれならば朕

の臣下である、何も遠慮に及ばぬから、此處へ近く寄つて共に話を爲やうと仰つた。元々衞叔卿の此處へ來たのは單に皇帝に見える爲めではなく、皇帝が大いに仙道を好み給ふといふことを聞たので、自分が行つたら大方優遇して道のことでも尋ねらるゝことであらうと思つたからである。處が只今皇帝はさては朕の臣下であるかと言て、別に賢者に見える禮遇も爲無い樣子なので、心の中に痛く失望し、姑らく默て其處に立て居たが、其中彼の姿は何處へか消え失せてしまつた。皇帝之れを見て急に後悔し、柏梁に使者を遣して衞叔卿の子の度世を探し求め、俱に一所に連れ立つて華山へ赴きて衞叔卿を尋ね求めさした。

扨て皇帝の使者と度世とは華山に上て衞叔卿の行衞を探し求めると、岡ある谷に臨んだ彼方の崖の上に、衞叔卿は五六人の友人と石の上に博戲をして居るのを見た。紫雲其上に靉（たなび）いて、數人の仙童其側に待て居る。其處で度世は父の側に近傍り、潜かに一所に遊んで居る人々の名を尋ねると、叔卿は洪崖先生許由、巢父、王子晉の輩であることを告げ、更に言葉を添へて、家の柱の下に仙藥を埋めて置いたことを話した。仍（そ）て度世は家に歸つて直ぐに柱の下を掘て見ると、果して其處に一箇の箱があつて、飛仙といふ封印が記してある。中を開て見ると

● それは即ち五色の雲母であつた。其後度世は件の雲母を服して亦仙人となることが出來た。

王興

王興は陽城の人で、壺谷の中に住て居たが、彼は文字は少しも知らなかつた。そして彼が仙術を得るに到つたのは實に偶然の事からである。それは漢の武帝嵩山に上り、大愚石を攀ぢ上て、其處に一棟の樓臺を築き、臣下の董仲舒、東方朔に命じて、齋戒沐浴して神の來るのを覗はしめて居ると、夜になつて身の長二丈許りある一人の仙人現はれ出て、武帝を見て、自分は九疑山の人である、中嶽（山嵩）に長さ一寸、九つの節ある菖蒲が石の上に生えて居て、之れを服すれば長生をするといふことを聞たから、それを採るために此處へ遣て來たのであることを話すと、其儘姿が消え失せて了つた。此時武帝は臣下を顧みて、今の異人は決して仙道修業中のものではない、案ずるに是れは中嶽の神が自分に件の菖蒲のあることを告げ喩さん爲めに、故意と斯樣な戲をなさるゝのであらうと仰せられて、件の菖蒲を尋ね求め、三年許り之れを服してあつたが、後に苦痛を覺えて中途で止

めて了つた。其他臣下の中でも此草を採て服したものも多かつたが、皆皇帝と同じく中途で止めて了つた。然るに此處に唯彼の王興一人のみは終まで止めずに服して居たので遂に長生する事を得たのである。

黃安

黃安は代郡の人である。年一萬歲を超えたけれど、容貌なほ童子の如く、平生硃砂をとつて服して居たが、赤い銅色になつた身體を露出にして年中衣服を着るといふことはなく、平生家に居る時には三尺程あ

る大龜の背に乘て居て、滅多に歩むことはない。然し遠く行かねばならぬ時には即ち此龜を背負ふて歩く。或人が黄安に向つて龜の背に乘て居る事は今年で最早幾年になるかと問ひ尋ねると、彼曰く、此龜は三千年に一度頭を出すのであるが、自分が此龜を手に入れてから是迄五度頭を出して居るから、都合て一萬五千年以上になる道理である。

漢の武帝或日彼を宮中に呼びよせて、與に虚無神仙の道を論じてあつたが、其折には皇帝毎時も師弟の禮をとつて彼に對してあつたといふことだ。其後泰山を封した時、彼及び董謁、李充、孟岐、郭瓊の五人に命じて特に御車に同乘するの光榮を賜ひてあつたが、後世之れを五人の仙臣と稱して居た。扨して皇帝が崩御なされた後、此の五人の者も亦何處へか立去つて了つたが、其行先を知つたものは誰一人としてなかつた。

郭瓊

郭瓊は東方郡の人てある。容貌は甚だ醜かつたけれども、極めて度量の廣い人てあつた。常に杖を曳いて近村を遊行して歩くことを此上も無い樂として

居たが、他人の家に寄宿することあれば、主人に乞ふて薪を貰ひ、庭に出て火を焼き、其傍に坐して書を讀み、其夜徹して眠ることなかつた。そして彼は其家の主人が深く、筒中に藏して居る秘蔵の類は悉く知て居て、如何に其鍵を嚴密にして置いても、何時それを讀んだのか悉く知て居るので、人々は皆彼が神異を驚嘆して居た。それからは彼の妻が見えると、人々は爭ふて戸を閉ぢ門を塞て、自分の家の秘密を彼に知られんことを恐れて居た。然るに彼は家の前に到ると、袖の中から一箇の算盤を出し、それによつて一々其家の秘事を窺ひ知て居た。彼は又些細するにも曾て目を閉ぢるといふことなく、又泥土の上を歩いても、足跡を殘さない。扨して平生片肌を脱いて居て、一寸見ると狂人かと思はるゝ程てあつた。

伯中山 附、西河の少女

伯中山又は伯山甫ともいふは雍州の人てある。華山の山奥に住て仙道を行ひ澄して居たが、時々故郷へ歸て來て年老つた兩親の許を訪れて居た。そして彼は時に年已に二百歳程になつたけれど顔色あざやかて少しも老衰した容子

伯中山

はなかつた。

彼は神通極めて廣大にして、何處でも彼が一度でも足を踏み入れた家の秘密は悉皆知て居て、數代前の先祖の時からの出來事を話すに恰かも手にとるやうであつた。そして又人々の身の上を判斷するに、吉凶禍福總て彼が言ふ通りであつたので、世間の人々は誰彼の區別なく皆彼を非常に尊敬して居た。彼の親戚の者に今年七十になる老媼が居て或年重い病にかゝつたが、其時彼の藥を請ふて服した處病が忽ち全治したのみならず、件の老媼は俄かに若返つて年の頃十八九の娘のやうに美しくなつた。

然るに此處に漢の武帝の使者某が居て、或日使を帶びて河東へ行く途次會西河といふ處を通ると、市城の西端に一人の女が一人の老翁を杖を以て打擲して居たが、其時老翁は靜かに身を屈めて快く笞を受けて居るので、件の使者は不審に思ひ、種々と女を宥めて其故を尋ねると、件の女云ふやう、此老翁は自分の息子で今年既う七十一になるが、昔時自分の舅に伯中山といふ人が居て、自分に神藥の調劑法を教へて呉れた。其處で自分は又其秘法を此子供に教へたけれど、此奴性來不情な男で其藥を飲む事を嫌つたので、遂に今見る通り斯樣に老衰して

了ふ樣になつた。それを不憫相だと思つたから、自分は是迄幾度說き勸めたか知れないけれど、テンデ耳にも入れる容子がないので今斯樣に打擲して居る處である云々。其處で使者は愈〻不審に思ひて、左樣云ふ汝は今年幾何になるかと尋ねると、彼女は今年漸う百三十歲になる事を告げたので、使者は二度吃驚してあつたさうてある。

其後件の女は伯中山の跡を追ふて華山に隱れて了つたが、世間で誰一人彼女の名を知て居るものはなく、唯西河の少女々々と呼んて居た。

壽光侯

壽光侯は神通廣大の眞人であつて、目に見えぬ諸々の鬼魅も一度彼の神力に逢へば、身忽ち縛られて其本身を見はすのであつた。曾て或處に一人の婦人があつて、妖魅の爲めに惱み苦しめられてあつたが、壽光侯が右の婦人を訪づれて其疫神を祓ふと、其翌日になつて長さ數十尺もあらうと思はるゝ一頭の大蛇が自ら其婦人の門前に來て斃れて居た。又此處に一株の怪樹があつて、若し其下を通る人があれば忽ち斃れて死し、又其上を飛ぶ鳥があれば忽ち地上に

壽光侯

墜つる。壽光侯之れを聞て早速其樹の下に到り、口に呪文を唱へると、件の大樹は俄かに枯死して了ひ、其枝の上を見ると長さ七八十尺許の大蛇が死んで懸て居た。

漢の武帝或日彼を宮中に呼びよせ、彼が神通を試してみやうと思ひ、伴て言ふやう、朕が宮殿に夜中になると何者とも知れず、絳衣を着て髪を振り亂した數人の異形の者が現はれ出て、手に〳〵燭火を持て互に名を呼び合ふものあるが、汝之れを捕へることが出來やうかと尋ねられると、壽光侯はそは容易い業てある。今宵にも其怪物を退治して御覽に入れやうと答へた。扨て其日の夜になると、皇帝は三人の臣下に命じて異形の姿を粧ひ、手に〳〵燭を持て互に其名を呼びながら、殿中を彼方此方と驅け廻らしめた。此時壽光侯は口に呪文を唱へ拂鬼の法を行ふと、件の三人は俄かに地に倒れて窒息して了つた。然し其後彼者共は全く妖魔てなかつたことが明かになつたので、壽光侯が再び解呪の法を行ふと件の三人は復た元の如く甦つた。

焦先

焦先字は孝然といひ、河東太陽の人てある。兄弟はなく、兩親は已に失せて、獨り淋しい生活を爲て居たが、此時彼は已に百七十歳の老人て、白石をとつて常食とし、毎日山に行て薪を採ては人に施し與へるのを仕事として居た。そして其れは村端から一軒〳〵と順を追ふて、一周すれば、復た再び最初の家から繰返すのてあつた。其時人が若し彼を呼んて御馳走をすれば、彼は喜んて食ふけれども、家の中に入て共に話をするといふ事は決して無かつた。而して其家の人々が留守てあつた折には、薪を其儘門の前に投げ棄てゝ去るのてある。

漢が亡んて魏の代になつた時、彼は黄河の邊りに菴を搆へて、其處に住み、冬も夏も諸肌脱になり、絶えて身體を洗ふといふ事がなかつたから、肌膚が垢に汚れて殆んと泥を塗つたやうてある。而して食物も數日に一度食べることあるけれども身體少しも痩せ衰へず、或時は老人の姿となつて居るかと思へば、或時は若々しい少年の姿になる事もあつた。其地の太守董經といふもの或日彼の許を訪れて、種々訊ひ尋ねたけれど、彼は默して一言も答へなかつた。又魏が呉の國を攻めた時、或人が誂らが勝つかと彼に尋ねると、彼はそれには答へず、唯次のやうな歌を歌つた。

祝劒祝劒。非魚非肉。更相追逐。本爲殺牂羊。更殺羖羝。

今此歌を見るにこれは魏の敗るゝのを言つたので、牂羊は呉の軍を指し、羖羝は魏の軍を指したものである。然るに其後果して魏の軍が大敗してあつた。其後或日野火が起て彼の菴が類燒にかゝつた時、彼は軒の下に坐つた儘寸許も其處を動かなかつたが、着て居た衣さへ燒け焦げも爲なかつた。其れから二百年許經て彼は世を遁れて何處へか立去て了つた。

王褒

王褒字は子登といひ、范陽の人で、漢の安國侯七世の孫に當る。幼少の頃から仙道を好み、華山に上つて修業を積むこと九年に及んだ。或夜のこと、獨り書齋で書を讀んで居ると、屋外の林の中で、人馬の聲、鼓角の音が聞え、暫時すると一人の天兵が空に浮んで來た。其中に一人の立派な神人が居て、車に駕り、手に虎符を持て、王褒を呼んでいふやう、吾は太極眞人西梁子文である。汝が日頃から此處にあつて、修業に怠りなく、勵んで居ることが、天帝の御耳に入つたので、自分は今夜天帝の詔を奉じて此處へ來て態、汝に告ぐるのである。今日から汝の名を

登上清と改め、遠からぬ中に汝を小有司に任じて仙籍を掌る大役を命ずるであらう、然れば、心を四景の上に注いで三乘を勵み勤めよ、然すれば、仙道成就せんこと疑なし、ゆめ〳〵苟且に思ふてはならぬぞと。かくいつて太極眞人は復た天兵と一所に天上遙かに消え失せて了つた。

其後彼は洛障山に隱れて居たが、此處で南極夫人、西城眞人の二人に逢ひ、太上寶文、大洞眞經等の仙書を授けられ、且つ又二眞人に伴はれて、玄州を拜觀することを得たが、其時三人は雲車を驅て俄頃にして玄州に到着した。扨て玄州といふは四面に海を環らした一孤島で、島の上に一の華麗壯嚴な宮殿があつて、皆瓊瑤を以て鏤められて居る。此處は即ち仙都で太上丈人が此處に居られる。其時二眞人は紫極宮に入て王褒を丈人に拜謁せしめた。丈人は流霞の羽袍を着、頭に芙蓉の冠を頂き、腰に一口の神劍を帶び、手に大きな鈴を持て、左右に數百人の待女が控へて居た。此時丈人は西城眞人から王褒の名を聞き、大に其志を賞して上清隱書の龍文、八靈眞經二卷、外に雲碧陽水、晨飛丹腴各二升を賜はれたが、王褒は此仙藥を服して忽ち仙道成就することを得た。其處で上帝は彼に極めて速き飛飈の羽車を賜ひ、之れに乘て遍く天下の仙洞を驅け巡り、諸々の仙人に

天書の秘要を傳へしめた。上清玉晨帝君は又彼に實芝を賜ひて太素清虛眞人となされたが、此實芝といふ草は、之れを服すれば身忽ち金色の光を放つて、頭に圓光を現すやうになる。

扨て王褒は上清玉晨帝君から太素清靈眞人に任せられ、小有天玉を監領して王屋山の洞內に住むことになつたが、玉童玉女各三百人は常に彼の身邊に侍して上清宮の王章、九天の玄文、及び天地間の秘書は總て皆彼が監理する所となり、そして彼が上清宮に出入する折には玉の車輪、黃金の車蓋をつけた龍駕にのり、虎旅を用ゐることを許された。

王仲都

王仲都は漢の人であるが、初から道士となつて、梁山に上つて修業して居る中、太白眞人に逢ひて虹丹を授けられた。それから寒暑と戰て尙ほ苦學修道すること二百餘年間、漢の元帝の時京師に召されて其仙術を試みた事がある。其時は恰度冬の寒い時であつたが、王仲都は寒風雪を吹き捲く中を單衣一枚で、跣馬の車を驅けさせて上林園にある昆明池の周圍を廻つた。其時殿上に之れを視

て居た百官共は裘(かはごろも)を重ねて居ても、身が凍るやうな嚴しい寒さであつたに拘らず、仲都は容貌少しも異らず、額からフツ〳〵と湯氣を出して居た。其後又朝廷に召されて方術を試みたが、時は恰も盛夏の最中で、然かも熾に燃えたつ烈火をと假りに獵夫の姿に變じて孫思貌の寓居を訪れ、長生の道を議論して其心を試めし見たが、痛く其熱心なのに感動して、仙道の秘訣を授けて去つたといふことだ。

樂巴

樂巴(らくは)は成都の人である。仙道を得てから、後漢の朝廷に仕へて尙書の役に任せられて居たが、或年の正月朔日皇帝から酒を賜はれた時、彼は一滴も飮まず、件の酒を口に含んで、西南の方に向てそれを噴(ふ)き出した。有司の諸役人之れを見

て大に憤り、其不敬の罪を責めて之れを罰しようとした時、樊巴罪を謝していふやう、實は臣の生れた成都に會〻火災があつたので、不敬とは存じながらも、早速の機轉に、賜はれた酒を嘆て其火災を鎭めたのであると。有司等之れを聞てなほ信ぜず。妄誕の言を弄して上を欺むくものと思ひ彼を苛き罪に處しようとした時、成都から急使が飛んで來て、昨日城市の東方より失火して今や將に大事に及ばんとした時、俄かに東北の方から雨が降り出して幸に火災を取鎭めることを得たが、此處に不思議な事には、其雨は悉く酒の香が爲てあつて、今に彼地の人々が、それを不審に思ふて居る處であると奏上したので、樊巴の罪は直ちに許されてあつた。

范幼冲

范幼冲は遼西の人で、漢の尙書郎となつて居たが、地理の學に通じて居たのみならず。或仙人に逢ふて胎化變形の術を授けられた。そして毎朝明方になると青色、白色、赤色の三氣があつて、互に縺れ合ひながら纏〻のやうに東の空から飛んで來て直ちに彼の口中へ入る。其時彼は、九十度繰り返し〳〵此三氣を吸ひ、

腹が一杯になつた頃に至て、始めて之れを止める。斯樣に十年が程毎朝之れを續けて行く中に、身中に自然と三色の氣が滿ち〳〵て遂にそれによつて昇天することが出來た、之れが即ち高元君太素內景の法であつて、後世異誥范監と尊稱して居る眞人は即ち此范幼冲のことである。

蘇林

蘇林字は子玄、濮陽といふ處に生れた。幼少の時から操行他の子供と變て居て、道を求めやうとする志が深かつた。年二十一の時笈を負ふて趙の國に赴き、當時名高かつた琴高先生に從ひて道を學び、氣を煉り、齋をますの術を授けられた。此琴高先生といふは周の康王に仕へて門番のやうな賤い役をして居た人であつたが、內行補精の術と仙丹を煉る法とを知て居て、神通も極めて宏大であつた。時に彼の歲は已に九百歲になつて居たが、彼は元來飛行自在の仙人ではなく、全く一箇の地仙に過ぎなかつた。平生水遊を好んで、赤鯉に乘て水中に入ることを此上もない樂として居た。

然るに蘇林の志は素からして天上の仙人とならうといふのであつたから、此

琴高の道には到底滿足することが出來なかつた。其處で彼は其後琴高の處を去り、華山の仙人仇先生の許に行て更に深く道を究めんとした。

扨て此仇先生といふは湯の朝廷に仕へて木正の役を勤めて居た人で、胎食の法を得、還神守魄の道に長して居たのであるが、蘇林を見ていふやう、今足下を見るに眞人の相自から眉目の間に現はれて居る。須らく心を盡して眞人の道を學ばれたら屹度成功するであらう、自分のやうな仙術などは言ふが程の價値もないものであるから、必らず自分に倣ては不可ぬ。世の中には今一層立派な眞人の道があるといふことを忘れてはならぬぞと、呉々も戒めて、消子といふものに彼を紹介した。

其時消子は彼に道の眞訣を授け、且つ誨していふやう、地上の眞人とならうと思はゞ、必ず先づ藥を服して三尸を除去し、穀蟲を撲滅することを忘れてはならぬ。三尸とは一に青姑といふて深く人間の泥丸を犯す蟲であるから、人一度之れに犯されれば眼が暗んで見えなくなり、面に皺がよつて口中腐敗して息氣臭く、齒が忽ち脫落して了ふ。二は白姑といつて深く五臟六腑を犯す害蟲であるから、人若し之に犯されれば精神が萎けて精氣が衰ひ、始終心が鬱いて居て身體

も次第に弱てくる。三には血姑といつて深く胎內の間に食ひ込む害蟲である から、之れに犯された人は忽ち胃腸を害はれ、身體痩せ衰へて精神終に昏迷して了ふ。それで若し此三尸を除去しない中は穀食を廢しても此蟲が死するに到らざれば、假令服藥苦行しても少しも功能がない。故に此仙人の道を求めやうと思ふには、第一に先づ制蟲丸を服さなければならぬ。制蟲丸とは卽ち一名初神去本丸といふものである。もし又眞人とならんと思ふならば、必らず先づ制仙丸を服さなければならぬ。制仙丸とは太上八瓊飛精の仙丹である云々。

或日消子蘇林に向て自分は今上帝から召されて昇天し中黄四司大夫の役を掌て北海を治むることになつたので、姑らく彼とも別れねばならぬことを話して懇に暇を告げ、其儘昇天して了つた。其處で蘇林は消子の寢室を自分の居間として獨り其跡に殘て居たが、或日其室から一封の書を發見して、それを披て見ると、それは卽ち消子が自分へ誓て遺した文であつた。其文には次のやうな意味のものが記されてある。『五斗三一は天帝の秘藏の道で、二十年間神を凝して修業を勵めば、此三一を見ることが出來やう。此三一さへ身に備へて能く之れを保ち存して居ることが出來るならば、千百歲の長壽は愚か、其名は長く天帝の

蘇林

玉札に刻まれて、洽ねく世人の尊敬を得ることが出來る。自分は曾て禾を食ひ精を餐ふこと三百年、大氣を服して神を煉ること五百年、思を凝らし精を積むこと六百年、三一を守ること三百年、洞室を守ること六百年、玄丹を服すること五百年、其間天下の名山を周遊して四岳を訪ね、數多の神仙に就て深く其の道を推究めた。それから此洞室に歸て來て毎日形を守り眞を思ふて道を積むこと前後二千八百餘年、今日漸う天帝から召されて平素の望を達することを得たのである。道は一朝一夕で成就するものでない、自分も此永い間修業を積んで始めてこの樣な身分になることが出來たのであるから、汝も怠らずに勉强した方がよろしい、決して中途で學業を廢するやうな事は無いようにせよ云々』

蘇林は之れを讀んで今更恩師の厚い志に感じ、其後は一層身を粉にして修業に勵んだ。すると其功漸く著れ、道も略ぼ成就して來たので、其處で天下を洽ねく周遊し、或は身を隱して山野に潛み、或は姿を屢〻商人に易へて市巷を彷徨へなどして、隱現自在神變出沒の術を實地に試して見た。處が漢の元帝の神爵二年三月六日、弟子の周季通といふものに、自分が昨日俄に天帝の詔によつて眞人の位に敘せられ、太極中侯大夫の役を仰せ付けられて愈〻昇天せねばならぬやうになつた事を告げ、其翌朝天兵數百人の迎を受けて、用意の雲車に乘り、終に西北の空を指して昇天して了つた。

劉根

劉根は字は君安といひ、京兆長安の人である。總身に長さ一二尺の細毛生え、眼窪みて光銳く、鬚髯皆黃色を帶びて長く垂れて居た。漢の成帝の時に嵩山に上て道を修業してあつたが、某神人に遇ふて仙術を授けられ、それを以て又多く世人の災厄を救ふて居た。

一說に、劉根が初め修業して居る時或日華山に遊ぶと、其處へ白鹿にのつた一人の仙人が、十數人の仙女を隨へて現はれ來り、劉根を見て、汝は此迄仙人に韓衆といふものが居るといふことを聞て居るかと問ふた。其處で劉根は自分は曾て左樣な名の仙聖を聞て知て居ると答へると、件の仙人はそれこそ自分であると言て、其儘姿が消えて了つたといふことだ。

其時潁川の太守に史祈といふものがあつて、劉根をば魔術を以て人を誑かすものと思ひ、吏を遣して彼を召捕ひ、汝平生鬼神を使ふなどゝ大きな吹螺を言て

人民を惑して居るさうであるが、若し眞に鬼神を使ふことが出來るならば其罪を許して遣らぬものでもないが、萬一詐僞であつた時は早速嚴罰に處するからと、嚴しく責めつけた。其時劉根は片頬に微笑を湛え、鬼神を使ふことは容易い望である、然らば唯今眼前に仙術を御覽に入れ樣と言て、筆を借り、一枚の符に何やらサラ〳〵と書き認めて、口の中で呪文を唱へると、府廳の門前が俄かに騷しくなり、夥しい人音がしたと思ふと、やがて一人の赤衣を着た鬼が二人の四人を捕縛して來た。能く〳〵視ると件の四人こそは誰あらう、即ち吏祈の先年死んだ兩親である。之れを見て流石の吏祈も大に驚いて姑らく呆然として眺めて居ると、件の赤鬼は忽ち牙を噛み眼を瞋らして、吏祈を睨み付け、兩親を斯樣な細目に逢したのも畢竟は其方が神仙の道を疑ふて眞人を罪しようとて辛き目に逢はして遣るぞと責めつけたので、吏祈も今更自分の疎忽であつた事を悔い、痛く其罪を詫びると、件の鬼も亦劉根の姿も一時に消え失せて了ひ、其後再び彼の姿を見たものは無かつた。

薊子訓

薊子訓（けいしくん）は齊の人である。官に仕へて郎中となり、其後駙馬都尉となつたが、終に仙術を得て世を遁れた。其後或年人に誘はれて、京師に赴いた時、數多の公卿紳士我も我もと其寓居に押掛け、酒よ肴よと毎日騷いて居た。或時彼は二十三人の貴人に對して、明日彼等の宅に伺ふ由を告げてあつたが、扨て翌日になつて彼の貴人共は名々客間を掃除して、彼の到るのを今や遲しと待ち構へて居ると、規定の時間になつて彼は果して遣て來た。而して其翌日彼の二十三人が一所に落合て互に其事を話す段になると、此處に薊子訓が其日同時刻に二十三人の宅へ訪問したといふことが明かになつたので、彼等は今更驚いて、其時彼が着て居た服裝を檢べて見ると何れも皆同一てあつたが、唯其話した言葉だけは其主人と場合とに應じて、夫れ〳〵異なつて居たさうてある。

其後薊子訓は突然何處へか立去て了つた。初め彼が京を立ち去る時、市中の數十箇處から白雲がムラ〳〵と立騰て、彼の姿は坐しながら自然に消え失せて了つた。其の後或人が長安の東霸城に於て、彼が一人の老人と一所に連れ立て

銅人（漢の武帝の時造られた）を撫て摩りながら、初めて此銅人が鑄られたのを見たのはまた昨日のやうに覺えるが、最早已に五百年近くなるかと、互に物語て居たのを見た。其處で、件の男は、薊子訓に言葉をかけやうと思ひ其跡を追ひかけて見たが、其歩行は如何にも悠焉して別に早いとも何とも思はなかつたけれど、其實非常に迅速で馬で驅けても遂に追付けなかつたさうである。

魏伯陽

魏伯陽は吳の國の人てある。性來道術を好み、山に入つて一心不亂に神丹を煉つて居た。其時三人の弟子が始終彼の側に侍して居たが、其中二人の弟子は眞實に道を求むる心が無いのを彼は早くも見拔いて居たので、或日仙丹が愈〻成就した時、一つ彼等の心を試して見やうと思ひ、三人の弟子に向て、日頃の苦心も其效あつて、今日愈〻仙丹も出來上つたが、之れを我々が服用する前に先づ犬に遣て試みた方がよい。若し之れを服して犬が何の障もない樣子てあつたら、其後始めて我々が服するも遲くはあるまいと告げ、彼が曾て山に入る時に一所に連れて來た一匹の白犬に件の仙丹を試みて見た。

一體神丹といふものは、陰陽の二氣が充分に和合して居ないものは、其中に些少の毒を含んで居て、之れを服すれば忽ち一命を失ふのてある。然るに今伯陽が煉た仙丹は、其陰陽の和合がまだ充分てなかつたと見え、件の犬はそれを服するより早く忽ち斃れて了つた。之れを見た伯陽は弟子共に向ひ、汝等も見る通り、犬は今彼の仙丹を服するより早く斃れて了つた所を見ると、此仙丹は未だ充分煉れて居まいと思はるゝ、若し我等之れを服するならば又犬のやうに死んて了はねばならぬ。扨て如何したらよいかと、さも心配さうに暫時沈吟して居たが、さも思ひ切つた樣子て、自分も幼い時から世をす

魏伯陽

魏伯陽

て家を離れ、艱難辛苦を凌んで、此迄かゝつて漸う煉り上げた仙丹がまだ充分煉れて居なかつたとは、最早神明から見放されたのであらう。斯うなつては今更をめ〳〵何の顔下げて故郷へ歸られよう。生きて長く恥を晒らすよりも一層の事思切て、自分は此仙丹を服用しようと思ふ。汝等は未だ年も若い事であるから、一先此處を去て、他に道術の優れた仙聖を求めたら如何だと諭し、件の仙丹を服して其儘息が絶えて了つた。

此時側に居た處生と名乘る一人の弟子は之を見て、自分の師は決して普通の人でない、然るに今自ら進んで死を求めるといふには、其處に何か深い理由がなければならぬと心付いたので、自分も亦件の丹を服して死んで了つた。其處で跡に殘つた二人の弟子は伯陽にそんな深い考があつての事とは思も寄らなかつたので、急に死ぬのが厭になり、仙丹は長生をする爲めにこそ煉りもすれ、之れを服して死ぬことであつて見れば、寧ろ此儘逃げ去て惜しい生命を助かつた方がよいと互に相談をして、死んだ伯陽と弟子の葬式を取り行ふ爲め其儘急いで山を下りて了つた。

扨て伯陽は此時まで死んだ振をして、窃かに二人の立去るのを見濟して居た

が、此時俄かに起き上り、兼ねて作り置いた妙丹をとつて來て死んだ弟子と犬とを蘇生させ、再び煉り上つた仙丹を服して一所に昇天することが出來た。其處で一日樵人に逢ふた時、一封の書狀を認めて精しく其後の模樣を記し、彼の逃げ去つた二人の弟子へ送り届けさせると、件の二人の弟子は此手紙によつて始めて自分等の惡かつた事を悟り、足摺して後悔してあつたさうである。

魏伯陽に一の著書がある、それは參同契といふ書で、前後二卷ある。此書は易經を解釋したやうにも見えるが、其實は全く易の交象を借りて仙丹を煉る方法を述べたものであるといふ事だ。

王老

此處に王老といふ一人の道士が居た。處が或日一人の年老つた道士が彼の許をねて來て、一箇月餘も留て居る中、滿身に小瘡が出てさも苦しさうであつたが、其の時件の老道士王老に向ひ、酒の中に其身を浸せば忽ち癒ることを話したので、王老は、早速數斛の酒を用意して大きな甕の中に入れ、件の道士にかくと告げると、彼は其中に身を浸すこと三日許りて、やがて甕の中から出て來た。見る

と驚いた。あれ程、滿身に出來た小瘡は跡形もなく消滅した計りでなく、今迄白かつた鬚髯は悉く眞黑になり、顏も急に若々しくなつて恰も少年のやうである

其時件の老人は王老に向ひ、若し此酒を飲めば誰れでも仙人となつて長生することが出來ると告げたので、恰度其時麥を打て居た王老の一家族は我も我もと其處へ集て來て、件の甕の酒を飲み盡し、皆々其處に醉ひ倒れて了つた。暫時すると天氣俄に變り、風起り、雲湧いて、酒を飲んだ一家族は皆々一時に昇天して了つた。其時近隣の人々は天上で頻りと麥を打つ聲がするのを聞てあつたさうである。

張道陵

張道陵字を輔漢といひ、張子房八世の孫である。身の長け九尺二寸、眉濃く顙廣く頂朱（うなぢ）を差して瞳の色綠である。鼻は隆く秀でて居て、頤は角張り、髭髯左右に生え延びて、手を垂るれば膝の下まで屆き、伏犀額の上に起伏して深く頂の上まで切込み、眼光鋭くして視る時人を射る。

彼は漢の光武帝の建武十年天目山に於て生れたのであるが、初め彼の母が或

夜夢に北斗呈から身の長け一丈餘、身に繡箔（ねひとり）した衣を着た一人の偉人が降りて來て、自分に薔薇香を授けると見て眼が覺めた。其時着て居た衣服も居間も異樣の香氣がみち〳〵して居て、一箇月計りも散らなかつた。扨て其月から彼の母は孕つたのであるが、愈々彼が生るゝといふ時になると、黃い雲が室を立籠めて紫氣庭に鬱き、室の中には一種の光明みち〳〵て夜も晝の如くに明るく、復た以前のやうな異樣の香氣がして一日散らなかつたさうである。

道陵生れて七歲の時道德經を初めとし、天文地理、河圖、洛書、纖緯の諸書を讀んで皆其蘊奧を極めてあつたが、其後官に擧げられて役についた。然

張道陵

し彼は元來仙術を究むるの志が深かつたので、間もなく官を辭して北邙山に隱れて居た。其時一頭の白虎が居て、口に符文を啣み、それを彼の傍に置いて何處へか立ち去つたと傳へられて居る。時の天子和帝が太傅の官に任じ冀懇侯に封するからといつて、三度詔を下して彼を徵されたけれど、彼は遂に應じなかつた。其後彼は蜀の國に行つたが、其國の溪嶺といふ山が深秀の趣に富んで居るのを見て大に喜び、遂に鶴鳴山の奥に地を卜して此處に隱れて居た。此山に昔から一箇の石鶴が在て、道を得た人が此山に上る毎に必らず鳴くと言傳へられて居たが、彼が此山に入つた時、矢張り此石鶴が聲高く鳴てあつたといふと、だ。彼の弟子に深く天文の學を究め、黃老の道に通じた王長といふ者が居て、師の道陵と一所に龍虎の二丹を煉つて居たが、一年經つと、紅の光があつて室にみち、二年經つと青龍と白虎とが遶て來て交る〳〵、丹を煉る鼎を守護し、三年になつた曉に仙丹が漸う出來上つた。其時道陵は年六十歲であつたが、其丹を服して俄かに若返り、恰も三十許の人のやうになり、そして氣力も又昔日に增して、走て居る馬に追付くことが出來た。

其後彼は弟子の王長と共に北嵩山に上つた時、一人の繡衣を著た天帝の使者

に逢ひ此山の中峰にある石室の中に三皇の內文と黃帝の九鼎と、外に太淸丹經とが藏められて居る。若し此等を得て修業するならば昇天することが出來るであらうと敎へられ、七日許り齋戒沐浴した後、靜かに件の石室の中へ入て見ると、今殿んだ地の下でコト〳〵と怪しい響がするので、其處を掘て見ると、それは果して使者が敎へた丹經であつた。其處て件の丹經を反覆繰返して讀み、遂に仙術の妙味を悟ることを得、又空中を自在に飛行し、又は種々の物に身を變化するの術を得た。

其後彼は專ら山川の間に放浪吟步して精神を養ひ、或は仙客に應接して長閑に日を送て居たが、其時會々西城房陵の間に一箇の白虎神が居て平生人の血を汲ふことを好み、毎年其鄉人が人を殺して祭壇に供へなければ田畑を荒らして無辜の人民に害を與へるといふことを聞いたので、早速其神を呼び寄せ、痛く其不心得を戒めて永く人民の害を除いた。又梓州に一頭の大蛇が居て身を動かす毎に山岳震動し、そして其吐く所の毒霧にあたつて日に斃るゝもの幾百といふ數を知らぬと聞き、早速其處に赴いて法を以て件の大蛇を禁縛し、二度と人民に害を爲れぬやうにした。

張道陵

時は恰も順帝の壬午の歳正月十五日の夜てある。道陵獨り鶴鳴山の菴に寢て居ると、何處ともなく鳴鑾の音がして、洋々たる天樂の聲聞え、香花地に布きて紫雲空に滿つ。怪んで東の空を眺めると、雲の中に五頭の白龍に素車を曳せて數千の天兵車の前後左右を打圍み、旌旗風に亂れて、月にかゞやく佩劒の光秋の夜の霜の如うてある。熟々見れば件の車中に一人の神人が坐して居る。身の丈け一丈餘、手に五明の寶扇を執り、頂に八景の圓光があつて、容貌玉の如く、神光人を照らして正しく視ることが出來ぬ。其時一人の從者恭しく車の前に進み出て、道陵に向て、此處に在します君こそ即ち太上老君てあると告げたので、道陵も大に驚き俄に威儀を正して禮拜すると、老君は道陵に向て、近頃聞けば蜀の國の青城山に八大魔王が居て人民を苦しめるさうてあるが、之れを退治せんものは今の世に汝を措て他に適當な者が居らぬ。よつて大儀てあらうが、此大任を汝に命ずる程に、隨分身を粉にして彼等魔神を征服して呉れ、宜しく賴むぞと仰せられて、正一盟威秘籙、三清衆經九百三十卷、符籙、丹竈の秘訣七十二卷、外に雌雄の劒二振、都功の印一箇、衣冠、朱履等各一對を賜はり、且つ言葉を繼て、若し件の魔神を退治するに於ては、それは全く汝一人の大功てあつて、汝が名は長く丹臺に

錄されて、未來永劫までも傳はることてあらう、必らず〳〵身を輕じて過つやうなことないやうに氣を付けよ、今日から千日を期して、再び闕廷(けつてい)て汝に對面するてあらうといつて、再び天上に歸られて了つた。其處て道陵はそれから毎日彼の秘文を玩味して、益〻仙術を煉り、邪神を攝伏するの法を修めて其奥妙に達したので、愈〻彼の六大魔神征服の爲めに青城山へ向ふこととなつた。

此處に八大魔王といふは、青城山を根城として各數萬の鬼兵を領し、洽ねく人間界に橫行して天下の善民を惱まして居たが、此八大魔王といふのは、第一は劉元達といひて天下の善民を惱まし、第二は張元伯といひて瘟病を掌り、第三は趙公明といひて下痢の病を掌り、第四は鐘子季といひて疫厲を掌り、第五は史文業といひて寒瘧を掌り、第六は范巨卿といひて酸痞を掌り、第七は姚公伯といひて五毒(石胆、丹砂、雄黄、礬石、磁石)を掌り、第八は李公仲といひて人心を魅かすことを掌て居る。

扨て道陵は、盟威秘籙を身に帶び、青城山の頂に琉璃の高座を設けて自ら其上に坐し、左の方には大道文始天尊を控へ、右の方には三十六部の眞經を安置し、座の周圍に靈幡(れいばん)をたて環らし、鐘を鳴らし磬を扣ち龍虎の神兵を備へて、魔神の軍今や來ると待構へて居ると、やがて、數萬の魔兵一時にどつと押寄せて來て、道陵

目懸けて進み寄るを、道陵少しも騒かず、手を擧げて一本の指を弱すと、それが即ち一の大きな蓮花と化して彼の身を防ぐ。魔軍再び炬火數千把を持て來て、彼が身を燒殺さうとすれば、道陵又手を擧げて指すと、件の炬火は逆に風に煽られ、鬼軍の方へ向て燃え廣がるので、見る間に數千の鬼兵共は燒死して了つた。此時魔軍は始めて彼の神通宏大なるに恐を抱き、今は身を危みて近く寄りかゝらず、遠くから言葉をかけて、仙聖は峨嵋山に住て居らるゝと聞て居たが、何が故に今此處に來て我等の住居を侵さるゝのであるか、其理由を承りたいと詰つた。

此時道陵故意と聲を荒らげ魔鬼共能く承はれ、汝等日頃から罪ない人民に害を爲して、世を亂し人を苦しむるにより、我今度忝なくも太上老君の命によつて汝等を懲らさん爲めに態〻此處に到つたのである。罪を悔ひ過を改めなばよし、さもなくば天罰立處に汝等が身に報ひ來らんと言つて、ハッタと瞋めつけた。

魔王劉元達等之れを聞くと、大に怒り、數萬の鬼兵を率ゐて一時に攻め寄せんとした。此時道陵は丹筆をとつて空中に一箇の圓陣を描くと、不思議や數萬の鬼兵俄かに頭を抱いて苦み出し地に仆れて唸めく聲天に響くかと思はれた。之れを見て流石の八大魔王も遂に降服し、叩頭三拜して各其罪を謝した。其處て

道陵再び丹筆を以て逆に空中に描くと、鬼兵共の苦痛は又昔の如く治つた。

其時道陵は彼の八人の魔王を近く呼びよせ、今日から此處を引拂て遠く立退き、以後再び疫病を放て人民を苦しむることないやうに、呉々も戒めると、件の魔王共は顔を膨らし、自分等が人民共に災を爲すことは祖先からして興へられた特權てある。夫れを今悉く放棄して了へとは殘酷てある、お慈悲に半分丈け許して呉れと嘆願したけれど、道陵は頑として少しも聽入れなかつた。其處て魔王共も道陵の言葉に服せず、次の日になると、復たもや鬼軍を率ゐて攻めよせて來た。道陵之れを見て復た件の丹筆を以て空中に描くと、鬼兵共復び前の如く斃れ、唸き苦んで憐憫を乞ふた。然し道陵は少しも手を緩めず、再び丹筆を以て地の上に一線を描くと、山は忽地其處から二つに裂け、鬼兵共が彼方の山から此方の山へ渡らうとして藻掻いたけれど、それが出來なかつたので、今は力及ばず大聲をあげて泣き叫び、今日から此處を引拂つて遠い西方の娑羅の國へ赴き、再び人民に仇をなさぬやうにするから此苦痛を止めて呉れと嘆願した。其處て道陵も漸う怒を收め、再び丹筆を逆に持て空中に描くと、鬼兵共は再び元のやうに起き上つた。其時道陵は弟子の王長に命じて、一の長い石を持て來させ、此

方の山から彼方の山へ架け渡して橋を作り、鬼兵共を皆此方へ渡さしめた。

然し鬼兵共は今摧伏して歸順したといふものゝ、其内心が如何であるか俄かに信用も出來ぬから、道陵は先づ自分の法力を示して彼等を心から屈服せしめやうと思ひ、八大魔王に向ひ、一つお互の法力を試して見やうじや無いかと發議すると、彼等は何の異議もなく承諾した。然らばと言ふので、道陵は先づ身を盛んに燃えて居る火の中に投げ込むと、やがて蓮の葉に載て浮び出た。八大魔王共もそれに倣て同じく火の中に身を投げ込むと各れも大火傷して出て來た。次に道陵身を水の中に沈むると、やがて再び黄龍に乘て水上に浮び出たけれど、魔王共之れを試みると各れも皆水に溺れて了ふ。次に道陵は神符一枚をとつて、口に呪文を唱へながら、左の手で其神符を指すと、鬼兵共忽ち倒れて死す。更に左の手で之れを指すと、鬼兵共再び蘇生返る。魔王共も其に倣て試みたけれど何の効驗もなかつた。

其時件の魔王は忽ち化して八頭の猛虎となり、道陵目懸けて突懸ると、道陵は忽ち一頭の大獅子と變じて之れに向ふ。魔王又八頭の惡龍と化して攻め寄すれば、道陵は忽ち金色の翅を有する大鷲と化し、龍の眼を目懸けて飛びかゝる。魔王更に身を轉じて高さ數十萬丈の大魔神となり、雙手に大櫂を持て道陵に擊てかゝれば、道陵同じく身を變じて金剛神となり、身の長け七十二萬丈、肩の廣さ五十三萬尺、頭に大冠を戴き、圓光を負ひ、十二種の無量相を具へて變幻出沒の神通を現はし、魔神に向ひ擊てかゝる。次に魔王は身を躍らして空中に飛び上れど、一躍の高さ十二丈以上に及べば身忽ち墜落して了ふ。之れに反して、道陵は一躍百餘丈の高さに飛び上ることが出來た。次に魔王共五色の雲を起して天地を蔽ひ暗ませば、道陵は五色の大陽を出し、其輝き渡る光炎を以て悉く件の雲を飛び散して了ふ。

斯樣に成すこと爲ること皆魔王の敗となり、今は術盡き變化極つて皆々大地の上に匍伏して居ると、道陵は更に重さ萬斤餘の大石を蜘蛛の巢のやうな細い

絲で縛て、魔王共の頭の上に釣しあげた。其時二匹の鼠が何處からともなく出て來て、件の絲を爭ひ噛み、今にも石が彼等の頭上に墜ちやうとして居るのを見て、魔王共は最早生きた心地もせず、同樣に泣き悲んで憫みを乞ひ、一日も早く此地を去て二度と人民に仇を爲ないやうにするからといつて、今は心から屈服した樣子が現々と顏にあらはれて見えたので、道陵は深く件の八大魔王を戒しめて各幽冥界に歸らしめた。

其處て道陵は蒼溪縣の雲臺山に上て、此處は即ち自分の功が成就して、他日昇天する所の地てあると定めて、此處に菴を結んて住て居ると、或日復た鳴鑾天樂の音が空中に聞えて、太上老君再び現はれ出て給ひたけれど、高く雲の上に車を停めて下まて降りて來給はぬから、道陵は地に平服し、はら〳〵と淚を流して、昏て詔を奉じ、秘文を賜はつて惡鬼と戰ひ、目出度彼等を鎭壓することを得たが、是れも要するに陛下の御稜威によることは言ふ迄もない。とは云へながら然し臣が身命を惜まず、微力を盡した功勞も少からぬ事と存じて居る。して今陛下には忝なくも態〻此處に御光來になつたにも拘らず、雲上高く停らせ給ふは臣が身になほ未熟の處があつての故か、さては又大道永く此身を見捨てたるのであるか、願くは一言の御詞を賜はつて、臣が意を決せしめ給へと、大地に身を轉ばして慟哭した。

其時老君は一人の使者に命じて言はしむるやう、汝の功勞は實に廣大にして、九眞上仙に拜する丈けの價値はあつた。然るを汝漫りに鬼を殺し、又擅に風雨を起し、鬼神を使役し、山川を震動せしめ、殺氣を以て天地を穢したのは、元來慈悲を以て本旨として居る大道に違反して居る。是を以て上帝痛く汝の罪を怒て在すによつて、吾汝に親しく近つくことが出來ぬのである。然れば汝暫時身を退いて、過を悔い罪を謝して謹愼の意を表し、尙ほ一層奮勵して三千六百日の間道を修めた後に、我更に再び汝と無何有の鄕、上淸八景宮の內に於て對面しようと言訖て、復び天上に歸つて了はれた。

其處て道陵は王長と一所に鶴鳴山に歸り、其處に暫時謹愼を致して居た。然るところ或日某處に妖怪が住て居て人民を打惱ます由を聞たので、早速弟子の王長、趙昇等を率ゐて其處に至ると、途中て十二人の神女に逢ひ、此附邊に一の醜

泉があると聞えて居るが其場所は何處であるかと件の神女共に尋ねると、彼處に見ゆる大湫が即ちそれである。但し其處には昔から一頭の毒龍が住んで居て、近づくものに害を爲すと言傳へられて居るから能く〳〵氣を注けられよとのことであつたが之れを聞て道陵は件の大湫の邊に行て、法を以て其毒龍を呼びよせたけれど出て來ない、其處で彼は一枚の符を書き、化して金翅の鳥となし湫の上を飛び旋らしめると、毒龍は之れを見て大に驚き、急いで湫を振りすてゝ何處へか逃げ去て了つた。すると其後湫の水は悉く涸れ盡し、遂に鹹泉が湧き出るやうになつたので、住民共は此處に始めて再び其水を吸んで鹽を製することが出來た。其時嶷の十二の神女再び出て來て、名々一の玉環を道陵に捧げ、長く彼が妾となつて仕へんことを乞ふた。道陵之れを見て先つ其環を受け取りそれを組み合せて一の大きな玉環となし、それを井の中に放ふり棄て、誰れでも先づ其環を得たものを以て妾とする由を告げ、そして神女共が我先にと衣を解いて井の中へ入り、玉環を取らうと爭ひ騷くを見濟し、急に件の井戸に蓋を爲て、永く彼等を封し込めて井戸の神として了つた。之れが爲めに其邊の住民は今になつても彼の神女の害に逢ふことがなく、長く鹹泉の利を受くることが出來

たので、其後彼の諱を以て其町につけ陵州と號したさうてある。

其後彼又宋江の邊を通ることがあつた。其時其江中に怪物が多く住て居て、民に仇をなすといふ事を聞き、大山篆符を書て其害を鎭めてあつたが、水涸るゝ毎に人々其符を水底から一時拾ひ取て來て、惡鬼に憑れた病人を容易く治すことが出來てあつたといふことだ。

扨て道陵は重ぬて道を修むること前後二十年間てあつたが、或日二人の仙使が突然彼の許に訪ねて來た。一人は靑い襟をつけた朱い衣を着て左手に板籍を執て居る。今一人は黑い幘を以て髮を包み、身に美しい絹の衣を着て、腰に劍を佩びて居た。そして手に一の函を捧げ恭しく道陵の前に進みよつて、上帝の命によつて彼を閬苑に呼び迎へん爲めに態〻此處へ來た事を告げ、上淸眞符を彼に渡した。そして暫時經つと、數千の天兵一頭の黑龍に紫の輦輿をひかせ、雲に駕て靜々と現はれて來て恭懃に道陵を件の輿に載せて天上の仙宮へ連れて行つた。

扨て道陵は愈〻仙宮へ到着して見ると、其結搆の宏壯にして美を凝らして居る有樣は實に目も眩む計りて、宮殿の門の上には擬太玄都正一眞人闕の九字を書

した扁額が掲げられてある。其の時數多の仙人が出て來て一々彼に拜謁し、それが濟むと二人の仙童が現はれて彼を老君の許に案内した。是より先き二人の從者が居て彼の傍に始終附隨て居たが、何れも皆二十許の少年で、或人に聞くとそれは子房子淵の二人であるといふことだ。太上元始天尊の住ひなさる宮殿といふは、砌は皆玉を以て作り、土堦は皆黄金を以て鏤められて居た。次に殿上を見渡すと、金碧燦爛として目も眩む程である。稍〻少時經つと一人の仙童が現はれて恭しく詔を奉じて彼に正一盟威の法を授け、尙ほ彼を拜して太玄都正一平氣三天扶敎輔元大法師となされ、更に昇天の期日をも豫め彼に告げ知らした。其後道陵は上帝の宮を辭して自分の住家なる巴西の渠亭山の赤石崖舍に歸て來ると、先つ三天正一の秘法を弟子の王長、趙昇に授け、尙ほ離沅山中に於て廣く其法を世に推廣め、次に又陽平山に於て飛仙の法を嗣師に授けた。

桓帝の永壽元年正月七日、夜もほの〳〵と明け方近くなつた時、王長、趙昇の二人空中を見ると其處に太上老君がお出になり、張道陵の名を呼んで、汝の功滿ちたによつて唯今秘錄を授け遣すぞと言ひ訖ると、老君は道陵に命じて白鶴に乘らしめて、成都へ連れて行き、此處で暫時正一盟威の大旨と北斗南斗經とを說い

て聽かせ、それが濟むと、老君は忽ち天上へ歸て了はれた。其時道陵は長く自分の遺跡を後世まで傳へんと思へ、雲臺山の西北にある斷崖の間に身を投げ込むと、石壁の中を穿つて、其頂の方から再び飛んで出てた。それが爲めに其處に二つの洞穴が出來た。崖の中腹にあるのを峻仙洞といひ、頂にあるのを平仙洞といふ。同年九月九日彼はなほ渠亭山に留て居たが、上帝其處へ態〻使を遣はして彼に正一眞人の號を授け、愈〻昇天すべきことを諭された。此に於て、彼は盟威都功等の諸品の秘錄及び斬邪の二劍、其他玉冊、玉印をば長男の衡に授け、三五步置正一の秘法は精しく此等の書に說いてあつて、妖邪を退治し、人民を安んずるの術も亦皆此中に記してある。我子孫は代々自分の位を受け紹くべきであるから、我家の子孫でないものには此等の書を傳へてはならぬぞと堅く戒め、又王長、趙昇の二人の弟子に仙丹の殘部を分けて遣て自分と一所に昇天することを得せしめ、やがて多くの仙官共の迎を受け洋々たる天樂の中に、紫の蓋輿に載り黑龍を御して遙かに昇天して了つた。時に年百二十三歲、昇天の場所は即ち彼の雲臺山である。其時彼の夫人の雍氏も亦共に一所に昇天して了つた。其後彼の子孫は世々眞人の位を受紹いて、江西の廣信府、貴溪縣の龍虎山に住て居た。

劉晨

劉晨は剡縣の人である。漢の永平年間阮肇と共に藥を採る爲めに天臺山に上つたが、路に迷ふて歸路を失ひ、十三日計り山の中に彷徨ふて居た。然し腹が減て堪へられぬので、何か食物が無いか知らんと四方を見渡すと、彼方の峰に澤山の桃の樹が在て、實が甘さうに綴つて居る。之れを見て二人は大に喜び、急いで彼方の峰に登り、熟した桃の實をとつて飽くまで食ひ、扨て水を飲まうとして溪澗に下りて見ると、一箇の木椀が上流の方から流れて來た。中に胡麻の飯が盛てある。二人は之れを見て、飯を盛つた木椀の流れて來る處を見ると、此上流に人家あるに極つて居ると互に喜び勇み、岩を傳へ水を渡り、木の下をくゞり、薮を掻分けて、やがて廣々した大きな溪の邊りに出た。

と見れば、溪の邊に二人の美しい婦人が居て、今二人が一箇の木椀を手に持て居るのを見て、互に顔を見合せて暫時何事か囁いて居たが、やがて二人を慇懃に出迎ひ、先刻から貴郎方のお出になるのを待て居たといつて、自分の家へ二人を案内した。二人は何が何んだか理由は少しも分らないけれど、案内さるゝ儘に

件の女子の後について行くと一の立派な家に到着した。壁の四方に羅帷絳帳をかけて、帳の鉤は各れも皆金銀を鏤めて居て、其一箇々々に懸けられた鈴は各れも皆同じく金銀で作られて居る。家の中は非常に廣く下婢なども數多召使て居る樣子であつた。其中頓て酒肴が運ばれたが、胡麻の飯、山羊の脯、牛肉の羹など何れも山海の珍味てないものはない。兎角して居ると一群の女子手に手に拂子を持て遣て來て、彼の二人の女に好對の新郎を得たことを賀し、歌ふやら跳るやら大騒をして其夜は樂しく打明した。

劉晨と阮肇

かくて劉阮の二人は並々ならぬ待遇を受けて、心ならずも半年計り此處に留て居

たが、熟、此處の氣候を見ると、常に陽春三月の頃の陽氣て花は四時を通して咲き、種々の美しい鳥が來ては互に啼き交す有樣、實て話に聞て居る仙鄉とは正しく斯樣な處を指すのであらうかと、二人は今更山に迷て斯樣な珍らしい處を發見した幸福を喜んて居たが、それにつけても故鄉に殘した兩親妻子のことなど思ひ出され、切りに故鄉が戀しくなつて來たので、或日其事を二人の女子に打開け、暇を示けて立出ると、彼等は復た溪の邊まで送て來て、里へ歸る路を指し示してゐれたから、二人は無事に故鄉へ歸ることが出來た。

扨て愈々故鄉へ歸て來て見ると、こは驚いた、自分の古里は見る影もなく荒れ果てゝ居て、村の人々に訊ねると自分等が村を去つてから已に七世を經て居て村人の中に誰一人として自分を知つたものはなかつた。其處て二人は急に復た曩の處が懷しくなり、再び山に入て彼の女子の家を尋ね覓めたけれど、遂に見當らなかつたさうてある。それは丁度晉の太康八年であるが、彼等二人は其後何處へ行つたか終に其行方が分らなくなつて了つた。

劉　憑

劉憑は沛の人てある。稷邱子に從て仙道を學び、石桂英及び中嶽石硫黃を服して居たが、年三百餘歲になつたけれど、顏色鮮かて恰かも少年のやうてあつた。そして平生禁氣の法に長じて居て、其神通極めて宏大てあつた。それて彼が或年長安に行つた時に數百人の商人が彼の許へ訪ねて來て、自分等が平生高價の商品を携帶して諸方を廻るに盜賊が心配て日夜氣を安んずる折がない事を話し、自分達の爲めに護衞をして呉れないかと哀願したので、彼は快よく承諾し、以後百餘名の行商人が何處へ行くにも皆彼に從つて居た。然るに或日の夕暮に、とある山路へ差蒐ると忽ち數百人の盜賊が不意に現はれ刀を抜き弓に矢をつがひて、劉憑の一行を中に取圍んで了つた。

其時劉憑は盜賊共の前に進みより、聲を荒らげて彼等の罪を責め、心を更めて今迄の惡行を止めなければ天に代て成敗を行ふてやるぞと叱りつけると、盜賊共も亦大に怒り、一齊に箭を放つたので、數百の箭は雨の如く劉憑の一身に集て來た。憐れ劉憑は蝟の如く身にたつ箭の爲めに敢なく一命を隕すかと思ひの外、不思議や賊共の放つた箭は何れも皆中途から地に落ちて、一として劉憑の身にたつものはなかつた。之れを見て劉憑は冷笑ひながら、手をあげて空中を指

すと、俄かに大風が起て來て、砂を飛ばし塵を揚げたので、流石の賊共も眼口を開く事が出來ず、何れも皆地上に俯伏して眼鼻を掩ふと、身體が忽ち痙れて少しも身動が出來ず、兩手が自然と脊の方に縮み上て、息も今に絶えなん心地がした。そして首領と覺しい三人の男は忽ち夥しく鼻血を出して即座に死んで了つた。之れを見た餘の者共は眼から涙を流し、頻りに唇を動かして何事か哀願する樣子てあつたれど聲が出ない。劉憑に附從て居た商人共は之れを見て、急に元氣つき、各々腰の刀を拔いて盜賊共を斬らうとしたが、劉憑は堅くそれを制して彼等を苦しむる事を禁じ、扨て自ら賊共に向ひて深く彼等の將來を戒め、再び斯樣な惡行を爲ないやうにと懇々說き諭した後、禁氣の法を解いて彼等を放ち歸して遣つた。

此處に或者の妻に惡鬼の爲めに魅かれて、長年病に苦んで居るものが居たが、或日劉憑に賴んで件の惡鬼を祓つて貰ふと、其家の側に一つの泉水があつたが、其水が自然と涸れて、底から一頭の蛟が死んで現はれた。さうすると件の妻の病も忽ち平治して了つたさうてある。

又或處に一の古びた神廟があつて、其傍に一株の大樹があつたが、何時頃から

か其樹の上に一の異しい光が現はれて、人がもし其下を通る事があれば忽ち死んで了ひ、鳥なども其上に留れば又直ちに死んで了ふ。それて人々は皆件の樹を神樹々々と稱して誰一人其邊りに近寄るものがなかつた。然るに劉憑又此樹を呪ふと、件の樹は忽ち枯れて了つて、彼の異しい光も同時に何處へか消え失せ、其代り長さ七八丈位もあるかと思はるゝ大蛇が枝の上に纏みついた儘死んで居てあつた。

劉憑に一人の甥が居たが或人と土地の爭から裁判沙汰となつた時、敵の黨派は四五十人もあつたけれど、劉憑の甥には劉憑の外誰一人助言する者がなかつたので、此方の道理が大に正しかつたにも拘からず、太守は時とすると敵の肩を持つやうな態度を示す事が度々あつた。其處て劉憑も內心少なからず不平に思ふて居たが、或日太守の前て俄かに怒り出して敵の不正なる事を罵ると、忽ち彼の口から電光がひらめき出て、霹靂が耳を突裂く計りに鳴り渡つた。是に於て敵の者共を初めとし、流石の太守も膽を冷やして驚き戾れ、それから太守の裁決に少しの不公平な所もなくなつたので、其訴訟は遂に劉憑の甥の勝利に歸してあつたさうてある。

劉　憑

ところが此評判が一時に高くなり、遂に漢の孝武帝の耳に達したので、皇帝或日詔を以て彼を朝廷に召し寄せ、此頃夜になると縫衣を着て髪をふり亂した異しい者が數十人計り手に〳〵燭火を持て殿中を驅け廻る者が居るが、汝の神通力を以て此妖怪を拂ふ事が出來ないかと尋ねられた。劉憑之れを聞いてそれは小鬼の仕業で、押鎭むるに雜作もないと答へたので、皇帝は其夜密かに腹心の者數十人に異樣を裝はせ、夜更になるのを伺ふて殿中を驅け廻らしめると、劉憑は欺かるゝとは露知らず、眞の妖怪だと思ふて、口に呪文を唱へながら一枚の符を殿上に擲つと、今迄驅け廻つて居た彼の人々は身體忽ち痙れて其處に打斃れ、皆々蟲の息氣となつて苦しみ始めた。皇帝之れを見て大に驚き、急に劉憑を御前に召して、件の異しい者共は妖怪でもなんでもない、全く自分が彼の仙術を試めして見る爲めに假りに假粧せしめた腹心の者共である事を告げたので、劉憑も大に笑て其法を解いて件の人々の生命を助けて遣つた。

其後劉憑は太白山へ隱れて了つた。其れから數十年計り經つと、彼は再び故鄕へ歸て來たが、其時彼の顏は少しも老衰した容子はなく、却て前よりも一層若々しく見えてあつたさうである。

孔安國

孔安國は魯の人である。仙道に達し、年二百歲になつたけれど容貌恰かも童子の如く、弟子數百人常に彼に隨て居たが、一年半經つと復た山を出て人里へ歸て來て居た。彼は常に山奧の岩窟の中に住み、五穀を絶て鉛丹を服して居たが、其時には飮食ても何ても總て皆通常の人と異つた所はなかつた。一體彼は人と爲り極めて洗着な性質で、輕々しく道を傳へるといふ事はなく、能く〳〵其者の性行を案じて然る後其道を傳へて居たので、彼の弟子數百人もある中に彼の道を傳へられたものは極めて僅少てあつた。

此處に彼の弟子に陳伯といふものが居て、約三箇年計り孔安國に從て居たが、安國は早くも彼の才智人に優れて性行の正しい君子である事を見拔き、或日彼を側近く呼びよせ、告げて云ふやう、自分は幼少の頃から艱難辛苦して道術を尋ね求め、道に關する有らゆる書卷は悉く讀破した積りであるが然し神丹、八石、昇天の法は遂に之れを得る事が出來ず、唯地仙の法を得て今日まてそれを行ふて來た。此先又歲年生き長へる事かそれは豫め言ふ事が出來ぬ。而して自分は

孔安國

昔吳の國の海濱て一人の漁翁に出逢ふたことがある。其漁翁といふのは即ち越の范蠡て、其時は姓名を易へて世を遁れて居てあつたのであるが、自分が道を求むる切なる心を憫みて、避穀服餌の法を授け、司誠、子期、姜伯等の諸眞人の仲間に伍しで此世を濟渡する事を得せしめた。かくて自分は服餌の道を得てから以來、略三百餘年ばかり藥を服して居たが、先年其法を崔仲卿といふものに授けてやつた。其時彼は恰度年が八十四て、其以來今日まて已に三十三年になるが、近頃聞けば彼は能く其法を愼んて服藥修行して居る爲め身體も氣力もともに益〻強健になつて、鬚髮も漆のやうに黑く、齒も一として缺けてないといふことてある。それて汝も仲卿の許へ行つて一つ身を入れて修行して見よ、能度道を得らるゝに相違ない。唯半途にして惰氣を出して癈さぬやうに心掛けたがよいと云々。

陳伯之れを聞て大に喜び、早速安國の許を辭して彼の崔仲卿の許へ赴き、一伍四什を物語て彼の弟子となり、心を碎いて道を修行したので遂に其方術の奥妙を授けられて地仙となつて世を渡る事を得た。

此處に又張合といふものが居て、其妻年五十になつた時、陳伯の術を得て俄かに二十許りの少女となつた。處が年八十六になつた時一人の子供を生み、其後又數人の弟子に其法を傳へ、皆々四百歲の長壽を保つ事を得せしめた。

成仙公

成仙公は諱を武丁といひ、後漢の桂易臨武烏里の人である。年十三の時身の長け七尺堂々として偉丈夫の面影があつた。縣の小吏となつて賤しい身分であつたが、彼は人と爲り寡言沈默てあつたので、人々は皆彼を指して癡者てあると笑ふて居た。然し彼は幼少の時から多くの書を讀み、一定の師はなかつたけれど、元來叡明の性質てあつたので、其蘊蓄が極めて深かつた。

或年京都へ使に行つての歸途、長沙郡を通る事があつたが、途中て日に暮れら れ次の驛舍へは道程もまだ大分遠かつたので、とある路傍の樹の下に一夜を明すべく腰を下して憩ふて居ると、件の樹の上に二人の男が泊て居て、何日か長沙の市中て藥を賣つて居たことなどを話して居たが、夜が明けて見るとそれは人ては無くて即ち二羽の白鶴てあつた。彼は之れを見て世には不思議な事があればあるものだと心の中に大に異みながら、其翌日長沙の市へ出ると其處て白

い傘を差して昨夜長沙郡の林中に野宿したなどを話しながら行く二人の奇妙な男に出逢ふた。其處で彼は異んて件の二人の後について少し歩いた後、やがて聲をかけて件の二人を呼びとゝめ、或料理屋へ連れ込んで盛んに御馳走をすると、件の二人は散々に食べた後、お禮の言葉も述べずに其儘默て立去つて了つた。其處で仙公は復たもや彼二人の後について數里計り行くと、件の二人は彼を振返て見て大に怪しみ、君は何ぞ願ひ事でもあつてそれが爲めに始終我等の後に從て來るのであるかと尋ねた。て、仙公は厚く禮を施し、自分は身分の賤しい者てあるが、公等の仙道に達して居らるゝといふ事を聞たので、如何かして其道を授けて貰ひたいと思て、此處まて公等の後に附いて來たのてあると話すと、件の二人は互に顔見合せて打笑ひ、やがて彼の名を問ひ尋ねた後懷中から一卷の素書を取出して中を審べて見ると、果して其中に仙公の姓名が記されてあつた。其處て件の二人は汝は道を得らるゝべき宿緣があるよつて唯今道を授けて遣すと言て、丸藥二つを取出して彼に與へ、次に彼が地仙となるてあらう事を告げて、其儘何處へか立去て了つた。

扨て仙公は二人の異人から道を傳へられ、喜び勇んて故郷へ歸て來たが、それ

より彼は鳥の鳴く聲、獸のなく聲を聞ても能く其意味を解する事が出來るやうになつた。然るに或日彼は縣の長官から命ぜられて府君周昕の許へ御使物を持て行く事があつた。此周昕といふ人は甚だ人物を鑒定する事に長じて居たが、今仙公の容貌を見て大に異しみ、種々と彼の姓名職業などを聞いた後、彼を自分の許へ差留めて置いて文學の主簿となし、圖書の監理を掌らしめて居た。

或日のこと仙公は數多の同僚と一所に役所に於て四方山の話を爲て居た。其時會〻庭の木に數多の雀が集て何事かペチヤクチヤと噪て居たのを聞いて、仙公は獨り可笑しがつて笑て居るのを見て、側に居た人々は怪しんで其故を尋ねた。すると彼答へて言ふやう今窓の外の雀共の話は、唯今市の東端て米を積んだ荷車が轉覆して米が路の上に撒き散らされて居るから、お互に仲間を誘ふてそれを食べに行かないかと今相談をして居る處である。

之れを聞いた人々は、如何して雀の話す言葉が汝に解るだらうかと言て彼の言葉を容易に信用しなかつたが、試みに人を其處へ遣して問ひ尋ねさすと、矢張り仙公の言ふ通りてあつたので、人々は今更彼の不思議な術を知て居るのに驚いてあつたさうてある。

然るに此事が大に評判となり、仙公の名が一時にパット郡中に廣つたが、此處に寮吏の或者共は之れを聞いて大に嘲笑ひ、却て周昕を以て異しい男を採上げて職位を奈すものだといつて大に非難した。然し周昕は是れは汝等の知る處ではないと言てテンデ彼等の言葉を顧みなかつた。處が或年の元日周昕は多數の人々を集めて酒を飲む事があつた。扨て杯が一通り座敷を一週した頃、仙公は席に坐つた儘一口の酒を含んでそれを東南の方に向てハット噴き出したので、之れを見て居た人々は大に驚て彼に其故を尋ねると、それは只今臨武縣に火災が起つたので、早速酒を噴いてそれを救ふたのであると答へた。

之れを聞て居た人々は虚言を云ふにも程があると怒り罵つてあつたが、翌日臨武縣の知事張濟といふものから急使を遣して上進して來た。其文によれば、元日の祝賀會で數多の役人が樂しく酒を飲んで居ると、西北の近隣から俄に火が起て縣廳までも類焼し、なほ焔をあげて全市悉く焼土となるかと思はれた時、今迄天氣清朗で南風が烈しく吹き荒んで居たのが、此時見る〳〵西北の方から一朶の黒雲が起て來て、車軸を流すやうな大雨を降らしたので、火事も餘り大きくならずに消し止める事が出來た。唯此處に一つ心得ぬ事は、右の雨が非常に

酒の香がしてあつた事である云々。此處に於て始めて縣中の人々は成仙公の凡人でないといふ事を知り、彼は急に諸人から尊敬せらるゝやうになつた。

其後府君は成仙公に郡城の西の地を與へて其處に宅を築いて住はせて置いたが、彼には一人の母と一人の弟と外に二人の小供があつた。そして其後二年經つと彼は或病氣にかゝつて遂に卒して了つたので、府君は彼の葬式を濟まして二日計り經つた後、成仙公の友人某が臨武縣の方から遣て來ると、會〻武昌岡の邊りて成仙公が白い騾馬（うさぎうま）にのつて西の方を指して行くのに出逢ふた。其ときの友人は彼に聲をかけて、最早日暮に間もないのに何處へ行くぞと尋ねると、彼はナニ一寸迷溪へ往て來やうと思ふが、直ぐに歸つて來ると答へ、次に自分が家を立て來る時大刀を戸の側に、履を雞樓の上に置き忘れて來たから、自分の家へ着いたら其事を家族の者共に話して藏て置くやうに言傳へて呉れと頼み、二人は其儘東西に別れて了つた。扨て件の友人は仙公の宅へ着て見ると、家人共は成仙公に死なれたので泣き悲んで居る處であつた。其處で彼は大に怪んで自分は先刻現に仙公に逢つた事を話し、且つ大刀と履とを持て來る事を忘れて來たから、それを藏て置くやうに言傳へてくれるやうに仙公から頼まれた事を包ま

ず物語ると、家人共は大に怪しみ、大刀も履も皆彼の死骸と一所に棺の中に入れて葬つた筈だと彼に告げた。て、彼は益〻不審に思ひ、府君にも遇ふて此事をば殘らず打開かし、兩人立會の上、成仙公の死骸を埋めた場所へ行つて其棺を掘り起し、能く〳〵中を檢べて見ると、彼の死骸は何時の間にか消え失せて居て中には唯七尺程に切られた一本の青竹があつたのみであつたので、此處に初めて人々は彼が尸解仙化したのであるといふ事を悟つた。そして彼が白い騾馬にのつて通つた事に因んで、件の武昌岡の名を其後改めて騾岡と稱した。

王喬

王喬は河東の人で漢の明帝に仕へて尚書郎の役に就て居たが、後葉縣といふ縣の知事となつた。處が漢朝の法例として畿内に赴任して居る長官は、佳節の日又は月の朔日には必らず朝廷へ出て天子に拜謁する規定であつたが、王喬は毎月朔日の早旦に朝廷へ參内するにも拘らず、是迄唯の一度も車馬或は從者を伴れて來た例が無いのを訝しく思ひ、或日太史に命じて王喬が參内する處を潛

かに覗ひ見せしめると、彼が朝廷へ來る頃になれば、必らず二羽の鳧が東南の方から飛んで來て、宮門の前に止まる。それで或日試みに羅を張て其鳧を捕へて見れば、それは即ち天子から尚書官の役人へ賜ふた所の履であつた。そして王喬が參内する時になると、葉縣の城門の外にある時を示け知らす大鼓が、誰れも撃ぬのに自然に鳴て、其聲が遠く京都迄聞えてあつたといふことだ。

彼が昇天する時に一の不思議な事があつた。それは或日のこと、突然天から一箇の棺が役所の庭前に下りて來て、吏人共が力を合せて如何程推して見たけれど一寸も動かない、皆々呆れ惑て居ると、王喬は之れを見て、是れは大方上帝が自分を呼び迎へるのであらうと思ひ、其處で早速沐浴して身體を淨め、衣服も新しいものに着換へて其棺の中へ入ると、件の棺は忽地自然と天上へ上て行き、終に其影が失せて了つた。其時町端の城門の東に誰れが築いたといふともなくて、一の墳丘が出來、其晩縣中の家毎に畜て居た牛は皆々汗を流し息を喘ませて居たが、唯一人として其理由を知つたものは居なかつた。其後人民共は一の廟を建て、葉君の祠と號して彼を祀つてあつたが、人若し此祠に禱ることがあると、立處に功驗があつたさうてある。

張麗英

張麗英は漢の寧都縣の張芒が娘てある。生れた時容貌美麗てあつて、肌膚雪の如く白く、面に一種の光が浮んで居て何處となく普通の者と違て居た。そして彼女は平生鏡を持つたことが無く、紈扇を翳して面を照らすに鏡と少しも違はなかつた。年十五の時山に入つて仙術を修煉してあつたが、其後漸く道が成就することを得た。

此處に長沙王に吳芮といふ者が居て、或日彼女の許に使者を遣して殿中へ呼寄せようとすると、張麗英は堅く其請を斥けて承諾はず、山の最も高い處に上つて使者を眼下に見下し、此山に一箇の石鼓があつて、其中を貫けば直ちに洞天山に通ずることが出來る。仍て若し其穴を整て洞天山まて通ずるやうに爲すならば、其時こそ喜んて汝の請を容るゝてあらうと話した。使者歸て吳芮に斯くと話すと、吳芮大に喜び、自ら先に立て數多の人夫を指圖し、數多の日數をかけて漸く石鼓の穴を整り上げた。

其時何處ともなく紫の雲が湧て來て、暫時すると張麗英が雲に浮んで空中に

立現はれ、吳芮に向て、今こそ汝に妾の素性を告け知らさうが、自分こそは即ち金星の精化てある。少し理由があつて此下界へ降り、暫時此處に留て此山を治めて居たのてあると告げ、石鼓の文一篇を下へ投げ下すと、其儘何處ともなく飛去て了つた。因て後世其山を名づけて金星山といつた。

王遠

王遠字は方平といひ、東海の人てある、漢の朝廷に事へて中散大夫までなつた。博學多識の人て天文其の他諸の纖緯の學にも通じて居て、未來の吉凶を知ること恰も掌を指すやうてあつた。桓帝彼の賢明てあることを聞て召し抱へやうとしたけれど、彼は少しも聽き入れなかつた。其後天子自ら詔を下して強て彼を朝廷に呼びよせたけれど、彼は初から頭を垂れ目を閉ぢて一言も語らず、そして歸る時、宮門の扉に四百餘字を題して、自分が朝廷に無理矢理に連れられて來た顚末を細に書き認めた。帝之れを見て大に怒り玉へ、人に命じて其字を削り去らしめたけれど、墨水深く木に滲み込んで、其痕がなほ鮮やかに讀むことが出來てあつた。

王遠は太尉陳耽が家に四十餘年間食客となつて居たが、陳耽の家では、其間一人として病にかゝり又は死亡したものはなかつた。處が或日王遠は陳耽に自分が人間界に留まる期間も今漸う盡きて、明日愈〻仙界に歸らねばならぬことを告げて懇ろに暇乞をなし、翌日果して息が絶えて了つた。其の時陳耽は彼の死は普通のものと異て居るのを能く知て、居たので、別に棺に入れて葬るやうなことは爲ず、但だ香を焚いて其死を嘆き悲んで居ると、三日程經て彼の死體は何處へか飛て失せ、衣服のみが只其儘殘つて居た。恰かも蛇の蛻殼を見るやうであつた。王遠が仙化して了つてから百日程經つと、陳耽も亦死んで了つたが彼は王遠から仙術を授かつたので、矢張り同じく仙化したのであらうといふ人もある。

蔡經 附、麻姑

蔡經は漢の桓帝頃の人で、姑蘇といふ處で生れた。或日王方平(王遠)が突然彼の家に訪ねて來て、汝は仙人となつて大に世人の難苦を救ふて遣るがよい。汝には元來其仙緣がある。自分が今態〻此處へ遣て來たのも全く汝に仙術を傳へん爲めであるのだ。唯汝は氣少くて肉徒らに多く、爲めに身が重くて昇天は難しからうから、先つ尸解の方を修行したがよからうと告げ、因て仙道の大要を告げ知らした。

其後暫時すると、蔡經の身が俄に發熱して火の如く熱り、三日許りたつと肉落ち骨露れ身體甚しく痩せ衰へた。然るに或日彼は靜かに室の中に寢て居て夜具を自分の身體の上に覆ひ被せたが、後暫時たつて夜具を取去て見ると、早や彼の姿は何處へか消え失せて居た。

處が其後十數年程經て、或日彼は突然家に歸て來た。初め尸解した時は已に可なりの老人であつたが今見ると、容貌艶々として鬚髮共眞黒てある。そして家人共に

蔡經と王方平及び麻姑

向つて、此七月七日に王方平が再び此處へ來るであらうから、其時酒數百斛を用意して置くやうに吳々も賴んで、其儘何處へか再び消え失せて了つた。

扨て愈、其日になると、王方平は果して遣て來た。顏は黃色で鬚が少許り生え、頭に遠游冠を戴き、五色の綬を長く前に垂れ、腰に一口の劍を帶びて居る。而して五つの龍車を附き隨へ、前後左右には數多の護衞兵を隨へて其莊嚴なること王侯の儀式のやうてあつた。其時王方平は又人を遣して自分の妹の麻姑を呼び迎へしめると、暫時經て麻姑が遣て來た。見るとそれは十八九許の女子で、頂の眞中に一の髻を作り、周圍の髮はザラリと下へ垂れて居て長いのは腰まで屆いて居る。そして身には刺繡した立派な衣裳を着て、其美麗なと四邊に照り輝く許り。席も愈、定まつて人々が各坐に就いたとき、彼女は行厨を開いて中から麟の脯を取出したが、其器具は何れも皆金銀珠玉て作つたものてある。そして麻姑は心の中て潛かに蔡經の母と妻とに面會しやうと望んて居たが、其とき會、蔡經の妻は子を產んてまだ日數が經てゐなかつたので奥座敷に引籠て居た。それを彼女が不圖見付て忽ち蔡經の妻てあることを知つたけれど、機會が惡かつたので其儘身を引返し、更に少許の米を持つて來て、それを地上に擲つと皆

化して丹砂となつた。其時之れを見て居た兄の王方平は思はず笑て、そんな子供のやうな惡戲は止したがよからうと叱つたさうてある。

此麻姑といふ仙女の爪は非常に長く延びて居て鳥の爪のやうてあつた。それて蔡經は背が庠い時には每度も彼女の爪て搔て貰ふと、非常に心持がよかつたので、王方平に隱れては潛かに彼女の爪を借りて居た。然るに此事を何時しか王方平が知つて大に怒り、杖を以て蔡經の脊を打ち、麻姑を何んだと思つて居るのか、苟且にも神人を掴いて、脊の庠いのを搔かせるとは餘り酷いといつて、非常に叱つたことがある。

此日蔡經の家て用意した酒は數百斛計りあつたが、誰も飮む所を見なかつたのに、何時の間にか其酒が盡きて居た。其時蔡經の兩親は王方平は平常何處に住んて居らるゝかと蔡經に問へ尋ねると、崑崙、羅浮、括蒼の三山には夫れ〳〵立派な彼の宮殿があつて、彼は常に其處に住て仙界のことを掌て居る。而して一日の中に天上の仙人と往復すると數十回、彼は常に黃色の麒麟にのつて宮殿に出入して居る。そして彼の仙界に於ける權力は實に偉大なもので、彼は到る處の山や海の神々に奉侍されて厚い尊敬を受けて居るといふことてあつた。其

後も禁經は時々自分の家に歸て來ては年老つた兩親を慰めて居た。

子英

子英は舒鄕の人て、平生水の中に入つて魚を捕ふるに妙を得て居た。或日のと例の如く水に入つて魚を捕へて居ると、一尾の赤鯉を獲た。其色が勝れて美しいので、彼は其儘之れを自分の池に飼て置くと、一年許たつ中に次第に大きくなつて、長け一丈餘に及び、角と翼が生えて來た。

子英

然る處、或日件の鯉突然言葉を發し、自分は上帝の命をうけて君を迎ひに來たのであ

る。今日漸々其時が來て君と一所に昇天するやうになつたから、其準備をするがよいと言ひ了らぬに俄かに雨が降つて來て、件の魚は子英を脊にのせた儘昇天して了つた。

扨て子英は鯉に乘て昇天したけれど其後彼は毎年のやうに家へ歸て來ては妻子と一所に飲食してあつたが、數日經つと、屹度彼鯉が復た迎ひに來て、再び彼を天上に伴れて行く。かやうに爲て居た事が七十年間計てあつたさうてある。今日吳の國に彼を祀つた祠があるとのことだ。

于吉

于吉は琅琊の人てある。其苦行が餘り激しかつたので、それが爲めに疾を得た。其處て彼は朝夕天に向て自分の不運を訟へて居ると、其至誠が天上の老君に通じたものと見え、一日一人の年老つた仙人が彼の許へ遣て來て、汝の疾を癒してやる外に、尙ほ長生を得て治ねく天下の人民共を救ふことが出來るやうに爲てやるぞと言て、彼に一卷の仙經を授けた。于吉は右の經を得てから疾が忽ち癒り、其他如何なる疾ても癒すことが出來ないといふことはなかつたので、其

後彼は其術を以て洽く人民の苦を救ふてやつた。そして其後太上老君も又時々彼の許を訪ふて、其度に仙道の秘奥を說いてきかした。

呉の太守孫策が江東の地方を平定した時、惡疾が流行して彼の將士の中に病の爲めに斃るゝものが多かつた。其處て于吉は將士共から招かれて其病を癒すやうに賴まれたが、彼が一度水を口に含んて、病人に向つてそれを吹掛けると如何んな病ても不思議に癒てあつた。然るに彼は此事からして却て孫策の嫌疑を受けてあつたが、其後又旱魃が久しく續いて、人民大に苦むことがあつた時會〻彼は捕縛されて一日天日に曝されると、不思議にも一天俄に掻き曇て大雨が降て來た。之れが爲めに彼は益〻孫策から惡まれ、終に彼が爲めに縊殺されたが、其屍體は知らぬ間に何處へか消え失せて了つた。然るに其後于吉は再び現はれて暫時人間界に留て居たが、それから百年餘り經つと、終に仙人となつて何處へか立去て了つた。

董奉

董奉字は君異といひ、侯官縣の人である。其時同縣に長余姓といふものが居て年なほ幼い時に或機會から董奉に面會したことがあつた。其時董奉は已に三十餘てあつた。其後五十年經て、長余姓が或る他の榮職に就て再び侯官縣を通つた時、其地の役人共皆彼の許に往いて拜謁したことがある。其時董奉も其中に在つたが、長余姓は彼を見て驚き、足下は恐らく仙道を得られたのではあるまいか、といふ譯は、自分が年なほ幼くて縣に居たときに足下に面會したことがある。それは足下も亦記憶して居らるゝことてあらう。其時足下は最早可なりの年頃てあつたが、今日お目にかゝつて見ると、足下はまだ嬰鍒として昔の儘て少しも年老つた容子がない、如何にも不思議な事てあると話した。其時董奉は故意と惚呆けた振をして、自分でも不思議に思つて居る由を語り、會〻斯樣な倖運を自分が持て生れたものてあらうと言つて笑つた。

此處に交州の刺史を爲て居た杜燮といふものが病死して、已に三日許り經過してあつたが、其時會〻董奉が交州に遊歷して居たので、三つの丸藥を彼の口に含ませ、側の人に命じて彼の頭を擧げ、其身體を搖らしめると、暫時たつて、彼は忽ち蘇返り、目を開き、手足を動し、顏色も復のやうに鮮かになり、半日程たつと頓て起き上り、其後四日程經つと、談笑少しも昔に異らなかつた。そして人に語ていふ

には、初め死んで息が絶えた時ば精神恍惚として恰かも夢のやうであつたが、暫時たつと、黒衣を着た人が數十人遣て來て、自分を露車の上に載せ、何處へか曳いて行つたかと思ふと、頓て大きな朱塗の門のある處に連れて行き、其儘或一の獄屋に投げ込むと直ぐと戸を鎖して外から土を以て封じたやうである。獄屋は一軒立の小屋といふよりも寧ろ室といふ方が近く、漸う一人容るゝ丈の廣さである。

暫時すると、一人の男が遣て來て、自分は太一帝の使者であるが、帝の勅によつて此處まで汝を迎ひに來たのであるといつた時、誰やらか鋪を以て戸の外を頻に掘る樣子であつたが、暫時して戸が開き、自分は戸の外へ連れ出された。見れば其處に赤い蓋を附けた馬車が一輛あつて、三人の男が乘て居た。其中の節を持て居た一人の男が自分の名を呼んで車にのせ、其處から還て前の朱塗門の處へ着いたかと思つた時、自分は始て蘇生したのである。

是に於て杜瓊は中庭に立派な一の高樓を築いて、其處に董奉を住まはせ、厚く彼を待遇してあつたが、董奉は唯脯と漿計りを食べて居た。酒は非常に好きで日に三度飲んで居た。そして彼は時々杜瓊の許へ來て共に飲食をすることも

あつたが、其擧動極めて輕く、自分の居間を出たかと思ふと影の動くやうにスーッと進み來て、何時の間にか杜瓊の座敷に來て居る。還る時も矢張り同樣であつた。

董奉は姑らく杜瓊の許に滯留して居たが、或日暇を告げて其處を立去らうとすると、杜瓊は痛く別を惜んで、爲めに大船を造て遣らうとした。董奉はそれを押留めて、自分は旅行をするのに決して船は用ひぬ、唯一箇の棺さへあれば充分であるといつたので、其處で杜瓊は彼の言葉通り早速一の棺を用意さすと、翌日になつて董奉俄かに變死した。因て其屍體を棺に入れて埋葬すると、七日程經て、岩昌の方から還て來た人があつて、杜瓊に彼方で董奉に面會したことを話した。杜瓊之を聞て不審の餘り董奉の棺を掘り出して中を開いて見ると、屍體は何時の間にか消え失せて、中には唯一枚の丹書のみが殘て居た。

董奉は其後廬山の麓へ一軒の小屋を建て其處に住て居たが、此處に一人の癩病患者が居て、今や將に息が絶えなんとした時、彼に治療を乞ふた。其時董奉は彼を空室の中へ坐らしめ、五重に疊んだ布を以て其目を塞ぎ、人の其側に近寄ることを堅く禁じて居た。暫時たつと彼の患者は苦しい聲を出して、誰れか來て

自分を祓るやうてあるが如何にも疼痛んて堪らぬ。其舌は目には見えぬが、何んても長さは一尺位あつて、其呼息使への様子から察するに、此者は何んだか牛のやうな物に相違ないと叫んて居たが、件の怪しい物は彼の身體を充分に祓め終ると、何處へか立去て了つた。其時董奉は彼の側へ進みよつて其布を解いてやり、水など與へて飲ましめ、是て最早よろしいが、唯風に當ては不可ぬからと戒しめ、其心得を丁寧に誨へて歸して遣ると、十數日の間は皮が剝げて居るので、總身眞赤に色づき、疼痛もなか〳〵收らなかつたが、水浴して居る中に痛も次第に滅して、二十餘日程經つと皮も自然に生じて來て、病は跡形もなく癒つて了つたさうてある。

其後天下大に旱り、百穀殆んど枯れ盡した時、縣令の丁土產といふもの酒脯を備へて董奉の許を訪づれ、禮を厚くし詞を卑うして、天下の爲めに雨を禱らんとを乞ふた。董奉は顏に微笑を含んて、唯一言、雨か、よし分つた、雜作もないことだといつて、其儘天井を仰ぎ、だが然し御覽の通りの茅屋て雨さへ凌げぬ有樣だからと言ふのを聞て丁土產は直ちに董奉の心中を悟り、早速人を遣して彼の家を改め作らしめ、壁を塗る爲めに人を走らせて、水を持て來させようとした。董奉

之れを見て、日が暮れたら水が自然に得らるゝだらうと言つて堅く其事を押留めたが、其夜になると果して大雨が降て來た。

彼は又水を呪ふて病を治すに妙を得てあつたが、それも謝禮として錢一文取るてもなかつた。唯患者の中て病の重かつた者は謝禮として杏五株、輕い者は唯一株だけ自分の家の附邊に栽えしめた。斯樣に爲て數年經つ中に杏樹七萬株以上に及び、葉繁り幹太り、何時しか立派な一の森林が出來上て、山中に居る諸の禽獸共が其林へ來ては終日遊び戲るゝので、木の下には草一本だに生えず、恰かも耕したやうに淸洒してあつた。そして杏が熟する時になると、彼は其處に一箇の大きな倉を作り、杏を求むるものがあれば、米穀と杏とを交換せしめた。中に惡心のものがあつて、餘計に杏を取ることがあると、一頭の虎が何處からともなく現はれ出て、件の惡漢の跡を追驅ける。其時若し餘計に取つた丈けの杏を其處に投げ棄れば、虎も亦其處から後へ引回すのてあつたが、然はなくて、偸んて家へ持ち歸れば、其者は直ちに死んて了ふ。其時若し偸んだ杏を董奉の處へ持て行つて罪を謝し過を悔いると、其者は忽ち又蘇生する。それが爲めに杏を買ふ者の中に詐僞を働くものや、偸盜をするものは一人も無くなつた。斯樣に

董奉

して董奉は、其の依て得た處の米を件の倉に積み貯へ、貧窮のものあれば須ちてやり、資に窮した旅人あれば惠んでやるやうにして、それが爲めに毎年三千斛位費してあつたけれど、なほ殘餘が夥しくあつたさうである。

此處に縣令丁氏の親戚の家に一人の娘が居て、或妖神の爲めに魅られて心神錯亂し、有らゆる手術を盡したけれど少許も効能なかつた。董奉之れを聞て不憫に思ひ、一度其女子の爲めに病を祓つてやると、翌日長さ一丈六尺程もあらうと思はるゝ一頭の死んだ大白鮑が、何處からともなく件の家の前門に這出て來た。それと同時に女の病も直ちに平癒して了つた。其處て彼女の兩親は其恩を謝する爲めに、件の娘を董奉に妻し、夫婦仲睦じく琴瑟相和してあつたが、如何なる譯か、其間に子供が一人も無かつた。其後董奉は上帝から碧虛太一眞人の位を授けられ、日中に昇天して了つたが、跡に殘つた妻は矢張り彼の杏を賣て生活を立てゝ居た。そして其杏を偸み、或は詐て餘分に取る者があると、何處ともなく虎が現はれて其者を追跡することは、董奉が居た時と少しも變らなかつた。其後人々は其杏を種ゑた場所に一の祠をたてゝ、永く董奉を祀つたさうてある。

介象

介象は字を元則といひ、會稽といふ處に生れた。諸子百家の書に精通して居て、傍ら文章をも能くして居た。多年の間仙術を修業したが、遂に東岳に上つて禁制の術を受け、種々の奇術に長ずることを得た。例へば茅の上に火を燃やしてその火て鷄を煮る、然かも件の茅は焦げも何にも爲ない。又鶴や犬などをして三日も鳴かず吠ゑなくならしめ、或は一里以内の地方を限て人家て火を燒きつけても燃え付かなくしたり、或は一市街の人々を坐つた儘起き上ることが出來なくしたり、或は姿を變じて草木鳥獸となる等、千態萬狀一々名狀することが出來ない。

扨て彼はなほ一層深く仙術を究めんと思ひ、或年諸國を歷巡つて達道の仙人を求めたけれど一人も出遇はなかつた。其處て彼は思切て山奥に引込み、思を凝して名師に遇はして呉れと神に祈て居たが、一日疲れ切てフト石の上に寢て居ると、其處へ一頭の大虎が來て、直に彼を噬まうとした。其時彼は件の虎に向ひ、若し天帝が汝に命じて我を護衞する爲めに此處へ遣したものならば、構ない

から其處に坐て居れ、然もなくて山神が汝に命じて我を試さうと爲るのならば、早速此處から去て了ふがよいと言ふと、件の虎は頭を垂れ、尾を卷いて何處へか去て了つた。其後彼は穀山に上つたが、其處に數多の石があつて大さ雞卵の如く、紫の光を放て居るのを見、即ち二つ計り取て袂の中へ入れ、それから穀水といふ河の邊へ遣て來ると、水が深いので渡ることが出來ず、如何爲やうかと案じ煩ふて居る處へ、忽ち一人の美女が現はれた。年の頃十五六、顏は玉のやうに美しく、着て居た衣服は燦然として五彩を放て居る。彼は之れを見ると、早くも心中に仙人の假りに美女に變した者であることを悟て、丁寧に禮を施して長生の法を尋ねると、件の女は、汝が先刻拾つた物を今急いで舊の處へ置いて來い、自分は此處に在て汝の歸るのを待て居るからと言つたので、仍て介象は急いで舊の處へ立歸り、件の石を其處へ棄て、再び河の邊へ歸て來て見ると、件の女は矢張り其處に彼を待て居た。

其時彼仙女は再び彼に向て、今汝を觀るに、血食の氣未だ盡き切て居ないが、それでも う三年の間穀を斷て齋戒した後、再び此處へ歸て來い、夫れまで妾は此處に留て汝の來るのを待て居ると話したので、其處て彼は三年經つた後、再び其所へ

行て見ると、件の仙女は矢張り其處に彼を待て居た。そして彼が再び歸て來たのを見て大に喜び、一卷の丹書を出して彼に授け、此法を修熟するならば仙人となること疑がない、其他の法は一も施すに及ばぬぞといつて、其儘仙女は何處へか立去て了つた。

其處で介象は仙女に敎へられた通り、精を出して仙丹を煉る方術を研究して居たが、其藥がまだ出來上らない中に、或人が之れを聞き知て、此事を吳の太守に密奏したので、吳の太守は早速彼を武昌に呼びよせ、稱して介君となし、態〻彼が爲めに立派な第宅を建て、厚く彼を待遇し、そして彼から隱形の術を學ばれた。扨て其後太守は宮殿の中に於て親しく其術を試して見るに、彼は衆人滿坐の中に居るにも拘はらず、傍に居る者共の眼には彼の姿は少しも見えなかつたさうである。

或日吳の太守介象と膾のことを議論して、何が一番美味しからうかと問ふた時、介象は鱠魚が一番風味が良からうと言つた。然し鱠魚は海中に棲息して居る魚なので、吳の太守はその魚は美味しからうが、唯容易に得難いのが遺憾であるといふと、介象は雜作もないことであると答へて、庭前に一つの穴を掘らせ、そ

介象

れに水を一杯滿さしめ、其處へ釣を垂れて暫時經つと、忽地一尾の鯽魚が釣れた。之れを見て吳の太守は大に驚き怪しみ、其魚は食はるゝかと尋ねると、介象は笑つて、特に君の爲めに取たものであるから、食べられないといふことが無いと言つて、直ちに料理人に命じて之れを調理せしめた。

其後介象は太守に迫て暇を乞ふたけれど、大守は彼を惜んで容易に聽入れなかつたが、或日何かの機會に大守が梨一籠を介象へ賜つたことがあつた。其時介象は件の梨を二つ三つ食べると、頓て俄かに變死して了つた。其處で吳の大守は其死體を埋葬して遣ると、其翌日介象は已に建業に行つて居て、吳の太守から賜つた梨の種子を其庭苑の役人に與へて之れを苑内に種ゑしめた。吳の太守此事を聞て大に怪しみ、試みに彼の棺を掘り出して見ると、中には唯一枚の奏版符が殘つて居る計りで、死體は已に紛失して居た。其處て吳の太守は紀念の爲めに介象が住て居た所の家を祠となし、時々其祭禮を行ふて居た。然るに不思議なことには、其祭禮の度毎に白鶴が何處からともなく澤山集つて來て、良久經つと、又何處へか飛び去るのであつた。其後介象の弟子て師の姿を蓋竹山て見たといふものゝ言葉によると、彼は其時白桃の花一枝を手に持て居たが、其顏

は昔よりもズット若く見えたさうてある。

李意期

李意期は本と蜀の國の人てあるが、世間の噂によると、彼は代々世に現はれて居たさうてある。妻も子もなく、又是といつて一定した住家もなく、氣に合つた處なれば二十年も三十年も長く其處に住み、一朝厥氣がさせば又飄然と他の處へ出掛けて行くのであつた。そして誰か急用があつて遠方へ旅立つやうな者がある毎に、彼は其者へ神符を授け、而して彼の腋の下へ朱筆て呪文を認めて遣れば、彼者は千里の遠い處ても一日の中に往復する事が出來てあつた。又彼は人々に他國の珍らしい都市や宮殿などを話して聞かせる場合に、之れを聞くものが充分其話を了解する事が出來ないと折には、彼は一撮の土を持て來て指の先て暫時それを捏ねまはして居ると、其土が皆小さい都市や宮殿などの形に變じて、人馬絡繹たる光景が現々と眼の前に現出する。而して須臾すると、それが又忽ち消えて了ふ。

彼は平生都市の片邊りに土窟のやうなものを作て其中に住んて居たが、冬夏

通して唯一枚の單衣を着て居て別に着換といふものもなく、酒は極ほんの少々飲み、脯肉や棗や栗などを專ら好んで食べて居た。そして人が何か食物や品物などを惠んでやると、彼はそれを皆貧乏人に頒ち與へて、自分は何一つだも取らなかつた。

蜀の太守劉玄德が吳の國を伐うと企てた時、玄德は李意期を呼び迎へて吳を伐つに就て其の吉凶を尋ねると、彼は默て居て少しも答へず、白紙の上に多勢の兵士が進軍する所の繪を描いて、其後それを裂き破り、次に又大勢の人々が集て數多の戰死者を埋葬する所を描き、其儘其處を辭して何處へか立去て了つた。之れを見て玄德は心の中に甚だ不愉快に思ふて居たが、果して彼は吳と戰て散々に大敗し、最初國を出る時十餘萬人の大軍であつたものが、國へ歸て來た時には僅か數百人の小勢に過ぎなかつた。そして玄德は憤激の餘り病を起し、其後間もなく永安宮に於て卒して了つた。

李意期は元來寡言な男で、人が問ふても一々答ふる事がなかつた。それで彼の處へ行て吉凶を觀て貰らう人々は皆彼の顏色をみて、彼が喜んだ顏をすれば其事は吉てある、之に反して彼が心配さうな顏をすればそれは不吉なのである。

として居た。其後彼は琅琊山に上つた切り、再び其山を出て來なかつたさうである。

封衡

封衡は字を君達といひ、隴西の人である。幼少の時から仙道を學んで終に其秘奥を悟る事が出來た。

彼は初め五十年許りの間は專ら黃連を服して居たが、其後鳥獸山に上つて藥を採り、引續いて百餘年の間禾を服して居た。かくて鄕里へ歸て來た時は年齡已に二百歲以上になつて居たけれど、容貌を見ると、光澤兩頰に漲て居て、恰度二十前後の人のやうであつた。そして誰れか病氣に苦んで居るものがあると、知つた識らぬに關らず、其家へ出掛けて行つて、腰の竹管から藥を出して病人に與へ、或は砭鍼の方法を以て立處に其病を癒して居たので、多くの人々から神のやうに尊れて居た。其後又彼は魯生女に逢ふて彼に還丹の秘訣と五岳眞形圖とを授け、それから洽ねく天下を周遊して名山を訪ね、邪神妖鬼を征服して人民の害になるのを除いて居た。それで彼が到る處の山の神や水の神は皆大に喜ん

封衛

て彼を路に出迎へ、凶鬼怪物は彼の名を聞て甞深く逃げ隠れるといふ有様であつた。彼は平生一頭の青牛にのつて諸國を周遊して居たが、誰一人としてそれが封衛であるとは知て居らなかつたから、人々は甞彼を指して青牛道士と呼んで居た。甞て或處の惡漢共が集て、矢刀槍を以て彼を害しやうと試みたけれど、不思議や彼の身體に向へば、如何んな兵器でも甞折れたり曲つたりして如何しても彼を傷ける事が出來なかつた。

魏の武帝或日彼を朝廷に召して養性の法を問はれた時、彼答へていふ、身體を適度に働かして筋骨を煉り、食欲を節して清き心を養ひ、總て飲食物は脂氣の多いもの又は味の濃厚なものの或は酸鹹いものは一切之れを避け、又喜怒哀樂等總て心神を傷るものは堅く之れを避くると同時に、女色を遠さけて房事を愼みさへすれば、それが幾んど道に近いのである。古の聖人は春夏の二季は專ら陽氣を養ひ、秋冬は主として陰氣を養ふて居たのも、是れ春夏は陽氣の旺んな季節で、秋冬は陰氣の積もる時節であるが爲めなので、要するに天地の運氣に應し其が造化發育の妙機に順ふて、深く其の根底よりして養性の道を修めたのである云々。

彼には何處へ行くにも始終二人の從者が常に附從て居て、一人は書笈を負ひ一人は藥筒を携へてあつた。そして其書笈の中には、容成の養氣術十二卷墨子の隱形法一篇靈室衛生經一卷が在り、藥筒の中には煉水銀や靈黃連屑等の仙藥が入つて居た。而して彼は人間界にある事が前後二百餘年許りて、其後元北山に隱れて終に其行衛が知れなくなつた。

鍾離權

鍾離權は即ち鍾離簡の弟で、燕臺といふ處て生れた。字は寂道、和谷子ともいひ、又王陽子とも號し、又雲房先生とも稱して居たが、後名を改めて覺と言つた。初め彼生

る時、一種異樣の光あつて烟の如く空中高く立上つたので、之れを見た人々は大に驚き怪んであつたさうである。そして彼の容貌を見ると、頂は圓く、額は廣く、耳は厚くして眉が長く延び、目が深く窪んで居て、鼻が高く突き出て、口が締て頬が大きく、唇は眞紅て朱を差したやうてある。そして胸が廣く、臂が非常に長く、身體も普通よりはズーッと大きくして恰度三歳になる小供位あつた。そして生れて六日間は泣きもせず、乳一口呑むでもなかつたが、七日目になつて突然聲を出し、自分は曾て紫微宮に遊んで上帝に拜謁したことがある。それて自分の名は立派に上帝の玉冊に書き記されて居ると言つた。

彼壯年になつた時に、漢に仕へて大將となり、吐番を征服したが、軍に敗れて獨り山の中へ逃げ隱れた。然るに此山は蜒蜿十數里に亘る深山で、谷深くして白雲常に山峽を鎖し、老樹天を蔽ふて晝なほ暗く、人跡絶えて稀なれば岩は皆苔蒸して居て、幾千百年を經たか分らぬ。彼は峰を超え、谷を渡り、足に任せて路の無い筮簌を彼方此方と歩き廻て居る中、遂に日に暮れられたので、今は一歩も先へ進むことが出來ず、漸う星の明りを便りに、とある林の中に身を潜めて、其處で一夜を明かさうと決心した。其時何處からともなく、頭髪を振亂し、草の葉を綴り

合せて作つた衣を着た一人の怪しい山僧が現はれ出て、彼に馴々しく種々と言葉をかけ、そして暫時經つと、先へ立て彼を案内し、略六里も來たかと思ふ頃、一つの山莊へ到着した。其とき件の僧は其山莊を指して、彼處に見える山莊こそ、昔東華先生が仙道を得られた處である。足下暫時彼處に行て休息したがよいと云て、其儘姿は搖消す如く失せて了つた。其處で彼は敎へられた通り件の山莊へ近いて見ると、其處から白鹿の裘を着、手に青黎の杖を持つた一人の老人が出て來て、汝は漢の大將軍鍾離權ではないか、何故然んな處に立て居て早く此處へ這入て來ないのかと言て、彼を曳磨るやうに門の中へ案内し、種々手厚く待遇した上、彼に長眞訣と金丹火候の方と青龍劍の使用法とを授けた。

扨て彼は思も懸けぬ山中へ迷ひ入つて、思もよらぬ異しい山僧に助けられ、そして又思ひも設けぬ仙人に逢ふて、世にも珍らしい仙術を得たので、心中に深く之れを喜び、厚く師の老人に禮を陳べて其處を辭し、足漸う門を出たかと思ふ頃、不思議や、今迄あつた家も人も忽然として消え失せて了つた。

其後彼は再び華陽眞人に遇ふて、大乙刀圭、火符內丹、洞曉玄々の方を授けられたが、其後又上仙王玄甫といふ仙人に遇ふて長生の秘訣を傳へられた。其後彼

は諸國を流浪して魯の國に到つた時、郁といふ處に暫時住て居たが、間もなく其處を去て崆峒山に上り、紫金の四皓峰に隱れて居る中、此處で或仙人から玉匣秘訣を授けられ、遂に功滿ちて昇天することを得た。

李阿

李阿は三國の時の人で、生地は蜀の國である。年老ても容顏昔て衰へず、常に若々しい顏をして居たが、毎日成都市に往いて人々に食を乞ひ、そして得た所のものは多少に拘はらず、皆之れを人に頒ち與へて居た。彼は夜になると何處へか立去て、次の朝復た市中へ出て來るのであつたが、誰一人として彼の住家を知て居るものはなかつた。

處が此處に古强といふ一人の剛膽な男が居て、李阿の普通の人間でないことを早くも覩破し、其行先を見屆てやらうと思ひ、或晩潜かに彼の跡について尾行すると、其住家は靑城山の奥で、甚さへ寂しい處であつた。此後彼は朝夕李阿の跡につき隨つて成都の市へ往復して居たが、萬一山中で虎狼などの猛獸に襲はれんかとの心配もあつたので、一日父が大切に藏つて置いた寶刀を盜み出して

潜かに所持して居ると、李阿は之れを見て、大に怒り、自分に隨ふからには、虎や狼などを恐るゝに及ばないと言て、其刀を奪ひ取て大地に叩きつけ、中程から二つに折つて了つた。然し李阿は翌日になつて、古强が父から叱られるのを恐れて痛く心配して居るのを見て、不憫に思ひ、彼の折れた刀を再び取り上げ、二つ三つ輕く地に叩きつけると、刀は復た舊のやうに完全なものとなつた。

或日古强が例の如く李阿に隨て成都へ往く途中、李阿は誤て牛車の爲めに其脚を轢かれて忽ち氣絶したかと思ふと、須臾して後復た起上り、平生の如く歩み出したが、折れた脚は何時の間にか舊のやうに癒て居た。そして、其とき古强は年十八て、李阿は略、五十許りになつて居たが、其後古强が年老いて八十以上になつた時、李阿の容貌は矢張り舊のやうて少しも老けた樣子が見えなかつた。然し其の後間もなく李阿は突然崑崙山から召されたといつて忽ち昇天して了つた。

左慈

左慈字は元放といひ、廬江の人てある。天柱山に上つて仙道を學び、心を潜め

て修業をして居たが、其後或年石室の中から、丹經を發見して、それを讀んで道漸う成就することを得た。彼は諸々の神通を得て、變化の道に長じて居たが、中でも六甲のことに精通し、鬼神を使役することに妙を得てあつた。

或日魏の太守曹操彼を召捕へて、一室の中に押籠めた儘、食物をも與へず、略、一年程禁錮して置いた後、再び彼を出して見ると、彼は座て居ながら鬼神を使て食物を取寄するの術を知て居たので、彼の顔色は少しも衰へるやうなことはなかつた。

曹操或年數多の客を招いて一大盛宴を張ることがあつた。其時彼は、金銀を惜まず使つて天下の有りとあらゆる珍味を取り寄せてあつたが、唯一つ松江の鱸丈けは遂に取寄せることが出來なかつたので、頗る不滿に思ふて居ると、側に在つた左慈は早速銅盤に水を一杯注がしめ、其中へ釣を垂れて暫時すると、程なく一尾の鱸が釣れた。曹操之れを見て、鱸が取れて先づ滿足だが、此上蜀の薑が あれば是に增した結構な事がないと言ふと、左慈は直ちにそれは雜作もない事てあると答へて、ツト座を起つた。其時曹操は彼は左樣容易く領承つたのは、若しや近邊の其處許から取つて來る下心ではあるまいかと疑つたので、豫て錦を

買はせに蜀の國へ人を遣して置いたから、序に今急にもう二十段丈け增して購ふて來るやうに、左樣彼に傳言して吳れと左慈に頼むと、彼はそれも亦快く承諾し、フイと別室へ起去つたが、頓て再び座敷へ戻て來ると、袖の中から一本の薑を取出した。其後間もなく、錦を買ふ爲めに蜀の國へ赴て居たものが歸て來たが、矢張二十段丈增して買ふて來た。

或日曹操數多の士大夫をつれて郊外に出遊なされたことがあつたが、其時左慈は何處からか酒一升と脯一斤とを持て來て、手づから百官にお酌をして廻つた。其時曹操怪んで其出所を尋ね、更に人を派して宮中の酒藏を檢べしめた所、其中に藏て置いた酒と脯とが悉く失つて居たので、彼は今更左慈の奇術に富んて居ることを憎み、即座に彼を捕へて殺さうとした。然るに左慈は早くも曹操の意中を覺り、頭に挿して居た簪を以て杯中の酒を二分すると、酒は兩方に分れて其間隔が二三分に及んだ。其時左慈は其半分の酒を先つ曹操に飲ましめ、殘りの半分を自分が飲乾して、頓て件の杯を天井目懸けて投け上げると、杯は屋根の棟に食付いた儘其處に懸垂して、ブラ〳〵と風に吹かれて左右へ搖れる有樣は、恰も鳥でも飛んで居る樣であつた。之れを見て座中の人々は大に驚き、皆々

左慈

顔を揚げて件の杯は棟を離れて再び下へ墜ちて來た。其時左慈は何處へか消え失せて已に其處に在らなかつた。

其後市中で再び彼の姿を發見したので、早速それを捕繫せしめやうとすると、四邊に居る人々は皆形を變じて左慈の姿になつたので、遂に彼を捕へることが出來なかつた。其後又陽城山の頂で彼の姿を見たものがあつたので、早速召捕に人を遣すと、彼は趨て羊の群の中へ入り、其儘姿を變じて羊となつたので、再び彼を召捕ることが出來なかつた。是に於て曹操は態と詐つて、自分は汝を殺さうと思つて召捕るのではない、唯汝の術を試みやうとするのであると彼を欺くと、羊の群の中から忽ち一頭の年老つた羝(おひつじ)が出て來て、後脚の兩膝を折つて人のやうに起上り、言語を發して、斯樣なものになつて御座ると言つたので曹操は左右の臣下に目配をして急に彼を召捕へしむると、此時他の羊は同時に亦皆變じて羝となり、一齊に後脚で起上り、言葉を揃へて、急に斯樣なものになつて御座ると言つたので、復たもや彼を捕ふることが出來なかつた。

其から數日經て或人が左慈の在る處を密告したので、曹操は早速吏を遣して彼を召捕へ、そして獄中に縛めて嚴重に見張を爲て置いたが、或日彼を引出して

取審べやうとすると、獄屋の前にも一人の左慈が居て、眞僞の判別が出來ない。是に於て曹操は彼二人の左慈を市へ引出して斬殺に爲やうとすると、忽ち二人ともその姿が消え失せて了つた。其處で曹操は更に市中へ令を下して、古い葛巾を被り、青い單衣を着た眇目(すがめ)の男を見たら、誰彼の差別なく早速召捕へて官へ上告せよと觸廻(ふれまは)らしめた。すると、其の後市中の人民が誰れも彼れも皆青い葛巾に青い衣を着た眇目の男となつて、何れが左慈やら、遂にこれを判別することが出來なかつた。

其後左慈は八霍山に上て仙丹を煉り、終に其處て仙化して了つたといふことである。

呂恭

呂恭字は文敬といひ、幼少の時から仙術を好んで居た。或日のこと一人の下僕と一人の下婢とをつれて藥草をとる爲めに太行山に上ると、とある溪谷の邊に三人の男が居て、呂恭を見て汝は長生の道を求めやうと欲して居るか、我等は皆太清宮の仙人で、一人は姓を呂といひ、字を文起といふ、今一人は姓を孫といひ、

呂恭

字を文陽といふ、次は、姓を李といひ字を文上といふよしを告げた。之れを聞て呂恭は吾姓名を名乗り、且つ仙道を求むる志の切なることを告げると、文起と名乗る仙人は、さては汝と吾とは同姓であるのみならず、汝の字は亦吾々三人の字の各頭文字を得て居る、是れは何様深い因縁があるらしい。若し我々に從て藥を採るならば、長生の方を教へてやらうと言ひ出したので、呂恭は大に喜び、彼等三人に從つて藥を採つて居ると、二日許經つて彼等は呂恭に長生の秘方を悉く授け、且つ彼が、此處に來て僅かに二日を過したと思ふけれど、仙界の二日は即ち人間界の二百年であることを告げた。

扨て呂恭は三人の仙人に別れて山を下り、己の鄉里に歸て來て見れば、今迄あつた村や家は影形もなく、唯茫々たる一帶の荒野で、何方を見ても人一人の影さへ見えぬ。兎角して漸う此處に趙光輔といふ一人の老人に逢ひ、昔の事を尋ねて見ると、彼は訝しさうに呂恭の顏をつく〳〵眺めて、自分が幼い時老人共から聞た話によれば、昔此處に呂恭といふ人が居て、或日藥をとる爲めに山へ行つたきり再び歸て來なかつた由であるが、それから今日迄殆んど二百年も經て居ると語した。其時呂恭は又彼から己が曾孫に當る呂習といふものが、今道士となつて城市の東北十里許り距てた處に住て居るといふことを聞たので、其呂習の許へ尋ねて行て見ると、呂習は大に驚き、己が家の仙人が歸て來たといふので厚く彼を待遇した。然るに其後呂恭は神方を呂習に授けて何處へか去て了つた。

其時呂習は年已に八十許の老人であつたが、此神方を服すると、頓かに少くなり、二百歲になつた時、同じく亦山へ入つて再び家へは歸て來なかつた。而して其子孫は數代此藥を服して長生を得、各皆地仙となる事を得てあつたさうである。

黃初平

黃初平は晉の丹谿平の人である。年十五の時羊を牧ふて居たが、或日一人の道士に